西村京太郎

美女高原殺人事件

徳間文庫

徳間文庫

美女高原殺人事件

西村京太郎

徳間書店

西村京太郎　作品

消えた巨人軍（ジャイアンツ）
鬼女面殺人事件
日本ダービー殺人事件
幻奇島
聖夜に死を（クリスマス・イブ）
汚染海域
華麗なる誘拐
殺人者はオーロラを見た
盗まれた都市
黄金番組（ゴールデンアワー）殺人事件
ゼロ計画（プラン）を阻止せよ
マンション殺人
けものたちの祝宴
南伊豆高原殺人事件
八ヶ岳高原殺人事件
会津高原殺人事件
志賀高原殺人事件
スーパー雷鳥殺人事件
ハイビスカス殺人事件
美女高原殺人事件

カバーイラスト＝緒方雄二
カバーデザイン＝秋山法子
カバー印刷＝真生印刷㈱

目次

第一章　グループA　5
第二章　追跡　50
第三章　消えた男　97
第四章　ジグソー・パズル　143
第五章　小さな罠　190
第六章　再検討　238

第一章 グループA

1

小山淳一郎は、三年前、警視庁捜査一課を、懲戒免職になった。四十二歳の時である。

その日、彼は、同僚と、殺人事件の容疑者のマンションを監視していたのだが、功をあせり、同僚の制止を振り切って、容疑者の部屋に、侵入し、犯人の証拠を見つけようとした。

まずいことに、容疑者の男が、突然、帰ってきて、鉢合せになった。小山は、狼狽し、強盗

岐阜県
高山本線
神岡鉄道
大同山
神岡町
41
槍ヶ岳
笠ヶ岳
錫杖岳
奥穂高岳
上高地
奥飛騨温泉郷
新穂高ロープウェイ
焼岳
大雨見山
国見山
ひだふるかわ
ひだこくふ
国府町
十二ヶ岳
飛騨大鍾乳洞
丹生川村
平湯温泉
平湯大滝
158
安房トンネル
たかやま
美女峠
美女高原
361
朝日ダム
木曽川
乗鞍岳
乗鞍高原
乗鞍高原
宮村
朝日村
秋神ダム
高根村
野麦峠
位山
益田街道
船山
飛騨川
栃尾山

小山は、仕事熱心な刑事と、自負していた。多少、法律を犯したり、容疑者を乱暴に扱ったりはしたが、犯人の検挙にかけては、凄腕といわれていたのである。総監賞を貰ったことも、何度かあった。

それなのに、マスコミによる袋叩きは、凄まじいものだった。

〈昔のままのオイ・コラ刑事〉

〈容疑者を殴る蹴るで、同僚も眉をひそめていた〉

〈人権意識皆無の暴力刑事〉

〈二年前、クラブのホステスに、いうことを聞かないといって、殴りつけ、重傷を負わせていた〉

これが事件の直後に、小山に浴びせられた悪罵の例である。

それぞれに、小山としては、反論があったのだが、口にしなかった。口にしたところで、無視されたろう。

小山は、働く気力を失った感じで、ぶらぶらしていた。

2

三年前の九月二十日に、一人の男が、小山を、訪ねてきた。なぜ、その日付けを覚えている

に見せかけようとして、相手を殴りつけ、逃げた。

だが、それが、マスコミに、わかってしまった。令状なしの家宅捜索の上、相手に、一カ月の重傷を負わせた。更にまずいことに、相手は、シロだったのである。

いつもなら、上司が、何とか、示談になるように、努力してくれたかも知れない。少なくとも、職務に熱心なあまりということで、依願退職に、もっていって、くれただろう。

しかし、当時、警察官の不祥事が多発して、世の指弾を浴びていたから、自然に、処分は、厳しくなった。同僚は、小山の行動を制止しなかったということで、停職一カ月、小山本人は、懲戒免職だった。

不幸は、それだけではなかった。以前から、仕事に熱心な余り、家庭を省みないといって、不満を口にしていた妻が、中学三年の娘を連れて、別居した。結局、半年後に、離婚届に、小山は、判を押した。

妻の加代子は、慰謝料は、一円も要りませんといったが、小山は、払いたくても、払えなかった。懲戒免職で、退職金は、全く貰えなかったからである。

わずかに、二百万足らずの貯金があったので、小山は、その半分を、加代子に渡した。

その間、小山は、職探しをしていない。

人手不足の時代なので、探せば、いくらでも、仕事はあったと思うのだが、なかなか、その気になれなかったからである。

小山は、慎重に、きいた。

「引き受けて下さるといわれれば、お話しします。一つだけ申し上げれば、日本のためになる仕事です。これは、断言できます。それから、もちろん、難しい仕事をやって頂くのですから、報酬も十分に、お支払いします。最低で、月に百万。いかがでしょうか？」

「百万ですか」

何か、秘密めいた仕事のようだが、小山は、百万という金額に、まず、心が動いた。現在、四十代の初めで、典型的な中年になっている。少しは、楽しい人生を送りたいし、今の世の中では、そのためには、どうしても、金が必要だからである。

「法律に触れるような仕事じゃないでしょうね？」

と、小山は、きいてみた。

西条は、微笑して、

「木下さんが、推薦している仕事ですよ。あなたを、困らせるようなことは、お願いする筈がないじゃありませんか」

「しかし、ただの仕事に、百万円も、払うとは思えませんがね」

と、小山は、いった。

「そうです。あなたのように、心身ともに、タフでなければ、できない仕事です」

「日本のためになる仕事だと、いわれましたね？」

かというと、預金の最後の十万円をおろして、これが無くなったら、嫌でも、働かなければならないと、思った日だからである。

陽が暮れて、面白くないので、飲みにでも出かけようと、思っていたところへ、その男は、訪ねてきたのである。

まだ、残暑の厳しい時だったのに、きちんと、三つ揃いの背広を着ていた。そのくせ、変に崩れた感じがあって、人を見る眼があると自負していた小山にも、最初、相手の職業が、読めなかった。

「木下仁さんの紹介で伺いました。西条です」

と、男は、いった。

木下仁というのは、前の警視総監の名前だった。

西条と名乗った男の名刺には、西条恒夫の名前と、自宅の住所、電話番号だけが、書いてあった。

「単刀直入に申しあげますが、ぜひ、われわれの仕事を、一緒に手伝って頂きたいのですよ。われわれは、あなたを、必要としているのです。あなたの才能と、決断力が、何としても、われわれの仕事に必要なのです」

と、西条は、いった。

「どんな仕事をなさっているんですか？」

誘の仕方はしないだろうし、百万円もの月給を、最初から、払いはしないだろう。

「まさか、マルチ商法みたいなことじゃないでしょうね？」

小山が、きくと、西条は、笑って、

「あんな仕事に、あなたのような立派な方を、お誘いしたりはしません。第一、マルチ商法が、日本のためになると、思われますか？」

「確かに、そうですが――」

小山は、じっと、相手の顔を見た。この男が、信用できるかどうか、その顔色を読み取ろうと思ったのである。

だが、表情の読みにくい男だった。

（こいつが、もし事件の容疑者で、訊問するとしたら、きっと、手古ずるだろうな）

と、小山は、思った。

逆に、西条が、じっと、小山を見た。

「われわれは、小山さんの経歴や、警視庁での仕事ぶりを、考えて、白羽の矢を立てたのです。あなたのような立派な人でなければ、この仕事は、務まりません」

「しかし、私は、警察を、懲戒免職になった男ですよ」

と、小山がいうと、西条は、笑って、

「そんなことは、問題になりません。あれだって、職務に熱心なあまり、行き過ぎたわけでし

「そうです。それが、一番大事な点なのです。従って、使命感を持った人でなければ、務まりません。その点、あなたは、長年にわたって、東京という大都会の治安に尽力されてきた。最適任の方なのです」

と、西条は、いった。

「というと、世間に向って、恥しくない仕事ということになりますね？」

小山は、念を押した。

「もちろんです。いかがでしょうか？　一緒に、働いて頂けませんか？」

「あなたと、一緒に、働くわけですか？」

「私と共同で働いて頂くこともありますし、他の人間と、働いて頂くこともあります。いずれの場合も、難しい仕事で、反面、やり甲斐のある仕事です」

「難しい仕事ということに、引かれますね」

と、小山がいうと、西条は、ニッコリ笑い、

「そういって下さると思いましたよ」

「具体的に、どんな仕事を、するわけですか？」

「その前に、ぜひ、承知して頂きたいのですよ。われわれと一緒に働く、とです」

と、西条は、いった。

小山は、じっと、考えた。ただの会社勤めではないことは、わかった。それなら、こんな勧

と、小山がきくと、西条は手を振って、
「小山さんが、そんな方でないことは、よく知っていますよ」
と、いった。
小山は、苦笑した。
「それで、いつから、出社すれば、いいんですか？」
「出社する必要はありません。こちらから、電話を差しあげるか、車で迎えにあがりますから、その時に、働いて下さればいいのです」
と、西条は、いった。
その後、三日間、何の連絡もなかった。
四日目の二十四日の夕方になって、突然、西条から、電話が掛った。
「今日、最初の仕事をして下さい。今から、迎えにあがります」
西条は、一方的にいい、十五、六分して、車で、迎えにきた。
小山は、いわれるままに、助手席に乗ったが、車が、走り出してから、
「どんな仕事なんですか？」
と、きいた。
「調査です」
「調査って、何の調査ですか？」

ょう。あなたが、悪いわけではないし、われわれは、あなたのそうした過激なまでの熱心さに、大きな期待を、かけているんです。ただただ、ミスのないように、働くような人間には、全く、期待していないんですよ」

と、いった。

「一つだけ教えて下さい。私の刑事としての経験が、生かせる仕事ですか？」

と、小山は、きいた。

「もちろんです。大いに生かして頂かなければなりません」

3

「やりましょう」

と、小山は、いった。

西条は、嬉しそうに笑い、背広の内ポケットから、銀行のネームの入った紙袋を取り出して、小山の前に置いた。

「ここに、百万円入っています。あなたが、われわれのところで働いて下さることになった記念といいますか、契約金といいますか。とにかく、受け取って下さい」

「私が、それを受け取って、何もしなかったら、どうされます？」

「いや、よく似ていますね。ただ、今まで、考えなかったんですよ。確かに、私立探偵の仕事に、よく似ていますね」
「違うんですか？」
「目的が違います。私立探偵は、金儲けで、他人の秘密を嗅ぎ廻る。われわれは、そんなことはしません」
「よくわかりませんが」
「大きな目的のためです。そのために、秘密を使います。金のためや、私利私欲のためには、使いません。それは、はっきり、いっておきますよ」
「よくわからないが、正直にいって、私には、どうでもいい。ただ、私は、二度と、法廷に引っ張り出されるのは、ごめんだ。それは、大丈夫なんですか？」
と、小山は、きいた。
西条は、笑って、
「あなたを、法廷に立たせるようなことはしませんよ。ただし」
「ただ、何です？」
「危険な仕事だということは、承知しておいて下さい」
「どの程度に、危険なんですか？」
と、小山が、きいたが、西条は、それには答えず、腕時計に、眼をやっていたが、

「今日は、一人の女についての調査です」
車は、陽が落ちて、暗くなった街を走り、中野近くのマンションの前で、とまった。
「調べる女は、このマンションの六〇二号室に住んでいます。名前は、三田ゆう子。これが、写真です」
西条は、ポケットから、一枚の写真を取り出して、小山に見せた。
「美人ですね」
と、小山はいった。
西条は、ニヤッと笑って、
「だから、男関係が、派手でしてね」
「私立探偵の仕事だったんですか」
「何がですか」
「私の仕事ですよ。その女の素行調査でしょう？　簡単な仕事だから、私一人で、やれますよ。四、五日、尾行すれば、男と会うでしょうからね」
と、小山は、いった。
「私立探偵の仕事ねえ――」
なぜか、西条は、ニヤニヤ笑った。
「違うんですか？」

差し上げます」

西条は、急に、開き直った態度で、小山を見つめた。そういわれると、小山は、逃げ出すわけにはいかなくなったし、自分が、不法侵入ということで、警察を敵になったことへの反撥も、まだ、消えていなかった。

「やりましょう」

と、小山は、いい、受け取ったキーで、六〇二号室のドアを開けた。

二人で、中に入って、ドアを閉める。小山の胸に、刑事だった時の緊張と、興奮が、よみがえってきた。

「何を見つければいいんですか？」

と、小声で、西条にきいたときには、小山は、もう、不安よりも、やる気が、先行するようになっていた。

「彼女の男関係です。はっきりと、関係があるとわかる写真なり、手紙なりが欲しいんですよ。それを、見つけて下さい。あなたなら、それが見つけられる筈です。その道のプロだった人なんだから」

「時間は？」

「十二時まで、女は、帰って来ません」

それなら、大丈夫だ

「彼女は、店に出かけた時間だ。行きましょう」

と、いい、車を降りた。

小山も、そのあとに、続いた。

西条は、マンションに入り、ためらわずに、エレベーターで、六階まで、あがって行った。

問題の六〇二号室の前に来ると、西条は、ポケットから、キーを取り出して、小山に渡した。

「これで、開けて下さい」

「キーがあるんですか？」

「われわれの仲間には、鍵の専門家もいるんですよ」

と、西条は、微笑した。

小山は、キーを、受け取ったが、

「これは、不法侵入になるんじゃありませんか？」

「あなたが、そんなためらいを見せるとは、思いませんでしたね。あなたは、悪をただすためには、相手の部屋に侵入してもいいと、考えていたんじゃありませんか？　われわれは、あなたのそういう決断力を買っているんです」

「しかし、これは――」

「いざとなると、あなたは、臆病になるんですか？　われわれは、あなたを、買いかぶっていたのかな？　もし、臆病風に吹かれたのなら、帰って、結構ですよ。百万円は、そのまま、

「コピーして、元へ戻しておきます。あった場所は、覚えていますね？」
「もちろん」
と、小山は、いった。

4

それから、また二日たって、西条が、電話を掛けてきた。
「ひとりの男を、尾行して、何処へ行くか、誰に会うか、出来れば、会った相手との会話の内容も調べて貰いたいんですが、何が、必要ですか？」
「そうですね、小型で、馬力のある車。目立たない車が、まず、要りますね。それから、高性能のカメラ、小型のテープレコーダー、それに、盗聴器」
「用意しましょう」
と、西条は、簡単に肯き、二時間後に、迎えにきた。
小山の要求は、見事に満たされていた。チューン・アップした、二百キロまでだせる白のカローラ、赤外線装置つきのカメラ、日本で一番小さいテープレコーダー、それに、超小型の盗聴器を、車にのせて、持ってきたのだ。
西条は、そのカローラで、小山を、等々力にある大きな邸の近くへ連れて行った。

と、小山はいい、部屋の中を、ゆっくりと、見廻した。

容疑者や、容疑者の彼女の部屋を調べたことは、何度もあった。経験を積む中に、大事なものを、何処に隠しているか、見当がつくようになってきた。

小山は、手早く、抜かりなく、探し始めた。手紙の束を見つけると、一通ずつ、さっと、眼を通していく。

西条は、自分は、手を下さず、頬もしげに、見守っている。

二時間もすると、小山は、三通の手紙と、五枚の写真を見つけ出した。

三通の手紙は、同じ男からのもので、ところどころに、露骨な描写があり、彼女との関係が、どこまでいっているか、わかるものだった。

写真の方は、多分、セルフタイマーを使ったものだろう。男と女が、この部屋のベッドの上で、裸で抱き合っているものだった。五枚とも、同じ男女だった。

写真は、二重底の宝石箱から見つけ、手紙は、寝室の隠し戸棚にあったものだった。

西条は、嬉しそうに、

「やはり、あなたに仲間になって頂いた甲斐がありました」

と、いった。

「これを、どうするんです？」

と、小山は、きいた。

（向うの男は、何者なんだろう？　西条は、何のために、調べているのだろうか？）

車を走らせながら、そんな疑問が、浮んでくる。等々力の邸の門柱には、「原田」という表札が、掛っていた。

もちろん、これだけでは、どこの原田か、わからない。

ベンツは、赤坂のフランス料理店の駐車場に入って行った。どうやら、この店で、夕食にするらしい。

小山も、同じ駐車場にカローラを駐め、店へ入った。

男は、入口で立ち止まり、広い店の奥にいた六十五、六歳の男に、軽く手をあげてから、同じテーブルに、腰を下した。

小山は、その斜め横のテーブルが空いていたので、そこについて、一番安い料理を注文した。

そのあと、小山は、改めて、自分が尾行して来た原田という男の顔を、眺めた。

年齢は、五十歳前後だろう。特徴のある角張った顔付きで、いかにも、意志の強そうな眼をしている。

相手の男は、原田に比べると、はるかに小柄だった。ただ、顔だけは、大きくて、どこかで見たような気がしたのだが、名前は、思い出せなかった。

原田の方が、ニコニコして、相手の機嫌をとっているように見える。小山は、聞き耳を立てたが、声は聞こえなかった。

「あの邸の主を、尾行して、電話でお願いしたことを、調べて貰いたいのです。これが、その男の写真です。うまくいけば、特別ボーナスを払います」

と、西条は、いった。

小山は、渡された写真を、見ながら、

「どんな人ですか？」

「それは、あなたが、知る必要はありません。あと一時間以内に、出て来ますから、尾行して下さい。ブルーのベンツで、運転手つきの車です」

「どのくらいの期間やればいいんですか？」

「一週間やって下さい」

と、西条はいい、さっさと、車を降りて、姿を消してしまった。

彼がいった通り、三十分ほどすると、邸の中から、ブルーのベンツが、出て来た。

小山は、サングラスをかけ、尾行に入った。

再び、刑事時代の興奮が、よみがえってきた。

殺人事件の容疑者を、尾行するときの興奮である。今回は、相手が、何者ともわからないのだが、興奮は同じだったし、優秀な車や、機械が、与えられている。

間もなく、陽が暮れる。

ベンツは、ゆっくりと走っているので、尾行は、楽だった。

――それでは、食事のあと、大事なことを、私のオフィスに行って、話そうじゃないか

そのあとは、とりとめのない世間話になって、二人は、食事のあと、立ち上って、店を出て行った。

小山も、そのあとを、つけた。

原田は、自分の車を帰してしまい、谷川という男のロールス・ロイスに乗り込んだ。

小山は、また、尾行に移った。赤坂から、東京駅近くまで走り、そこにあるビルに、二人は、入って行った。

十一階建のビルで、入口には、「谷川ビル」の名前があるから、小柄な男のビルなのだろう。

入口には、大柄な守衛が、がんばっているので、中に入ることが出来なかった。ただ、案内板を見ると、最上階の十一階が、社長室のようだった。

十一時に、例のベンツが迎えに来て、原田は、それに乗って、帰宅した。

翌日、原田は、午前十時に邸を出たが、ベンツが行った先は、羽田空港だった。運転手兼秘書と二人、札幌までの搭乗券を買っている。

小山も、同じ飛行機に乗ることにした。刑事時代も、容疑者を追って、北海道や、沖縄に、飛んだことがある。自動車と違って、飛行機に乗ってしまえば、相手は、外へ逃げようがないから、楽は楽だった。

小山は、小型カメラで、何枚か二人の写真を撮り、そのあと、身体でかくすようにして、テープレコーダーについている指向性マイクを、向うのテーブルに向けた。イヤホンを耳につけると、二人の話し声が聞こえた。

――いざという時は、谷川先生が頼りですので、よろしくお願いします

――君も、口がうまいねえ。渡辺君にも、同じことをいってるんじゃないのか

――とんでもありません。私は、谷川先生、ただ一筋でございます

――私の秘書が、二日前に、君が、渡辺君の事務所に入って行くのを見たといっていたがねえ

――ああ、あれは、電話で呼びつけられまして、仕方なく、顔を出したんです。渡辺先生は、立派な方だと思いますが、あの通り、ケチで、傲慢ですからね。あれじゃあ、人は集りませんよ。その点、谷川先生は、面倒みがよくて、温かいから、自然に、人が集って来ます。私が、こうして、先生を、お慕いしてるんだって、その人徳に、引き寄せられたんです。これは、お世辞でも、何でもありません。本心です

――すると、君を味方と考えていいということだね？

――もちろんです。身も心も、谷川先生に、捧げるつもりです。どんなことでも、お命じになって下さい

と、小山は、思った。暴力団の組長を、殺人容疑で追っていて、別宅を、張り込んだ時である。あの時、別宅には、三台もの監視カメラがついていた。

小山は、陽が暮れるのを待って、もう一度、近づいた。

低い塀を乗り越える。一階に、明りがついているので、原田は、一階にいるのだろう。

中庭から、居間に近づく。かすかに、話し声が、聞こえてきた。

小山は、足音を忍ばせて近づくと、木造の壁に、持ってきた盗聴器を取りつけた。急いで、外に逃げ、ラジオで、盗聴しながら、それを、テープにとることにした。

最初に、若い女の声が入った。「乾杯しようか」という男の声が聞こえた。

そのあとは、聞き覚えのある原田の声と、もう一人の男の声だけが、聞こえてきた。

――このシーバスリーガルは、佐々木君に貰ったものでね。彼とは、同郷だし、向うは財界の親分だから、まあ、仲良くしているんだよ

――渡辺先生の顔の広さには、いつも、感服します

――私の取り柄といえば、いい友人を、沢山、持っているということだけだからねえ

――それもあるでしょうが、先生には、強い愛国心がおありになります。だから、先生に、日本の政治を委せたいという声が、大きくなっているんです

――君も、そう思っているのかね？

千歳空港に着いたのは、午後二時過ぎだった。

若い秘書が、レンタ・カーを借りているのを見て、小山も、すぐ、手続きを取った。

相手のレンタ・カーが走り出し、小山は、尾行に移った。

東京は、まだ、残暑があったが、さすがに、北海道は、秋の気配である。地図で確かめると、原田たちは、支笏湖に向っているようだった。

支笏湖めぐりのバスがあるとみえて、時々、観光客を乗せたバスを追い越した。途中の原生林では、すでに、一部で、紅葉が始まっている。

支笏湖に着くと、湖岸を走るレイクサイドフリーウェイを走り、恵庭岳に向った。

千歳空港から、一時間ほどで着いたのは、山麓に建てられた別荘風の建物だった。

原田の車は、その別荘の前にとまり、降りて、木造の洒落た造りの建物の中に入って行く。

小山は、離れた場所に、車をとめた。建物の周囲は、雑木林になっている。小山は、車から降りて、雑木林にかくれるようにして、建物に近づいた。

「WATANABE」という横書きの表札が見えた。

(どこかで聞いたような名前だな)

と、思いながら、小山は、雑木林の中に、屈み込んで、別荘の様子を見つめた。

玄関のところに、監視カメラがあるので、うかつには、近づけない。

(こんなことがあったな)

――君を信用しているから、紹介したんだよ。彼女のことは、内緒にしておいて欲しい。最近は、女性問題が、命取りになるからねえ

――心得ています。安心して下さい。先生の為にならないことを、私が、する筈がないじゃありませんか

――その言葉を、信じているよ。サチコ。原田君に、あれを、差しあげたらどうだね

(間)

――これは、何でしょうか?

――来月の五日に、彼女が、東京の新橋で、踊りの会をやるんだよ。その招待券だ。時間があったら、行ってやってくれたまえ

――花束をお贈りしますよ

そんな会話を聞いている中に、小山は、赤坂のレストランで見た谷川という男のフルネームを、思い出した。

谷川孝太郎。元国務大臣で、派閥の大物だった。

そして、今、話している渡辺は、これも、政治家の渡辺拳か。

(となると、あの西条は、どんな人間なのだろうか?)

と、小山は、考えた。

――当然です。私の知っている若手の代議士たちの中にも、渡辺先生に、次の首相になって貰いたいという声が、わきあがって来ています

――しかし、若手の諸君も、派閥にからめとられて、身動きがとれんのじゃないかね？

――そんなことはありません。若い連中は、派閥を越えて、渡辺先生の支持に廻ろうじゃないかと、いっています。連中は、今までの派閥政治に、あきあきしているんですよ

――それは、いい徴候だねえ。君は、谷川君を、支持していたんじゃないのか？　そう聞いたことがあるがね

――とんでもありません。あんな時代おくれの老人に、何が出来ますか。時代は、動いているんです

――しかし、君は、谷川派に属している筈だが？

――今、申しあげたように、もう、派閥の時代じゃありません

――それはいいことだ。政治に、希望が持てるというものだ

――そうです。渡辺先生の時代に、なりつつあるんですよ

――では、あらためて、乾杯だ

――しかし、先生が、こんな所に別荘を、お持ちとは、知りませんでした

――北海道は、私の故郷だからね

――今の女性も、ここの景色に負けずに、素晴らしい方ですね、若くて、お美しい

また、西条の背後に、どんな人間がいるのか、何人くらいのグループなのか。そうした質問も、禁じられた。

その代り、何も仕事をしない時でも、百万円の月給は、支払われたし、時には、多額のボーナスが、支払われた。

一度だけ、西条の属しているグループの力を、見せつけられたことがある。

それは、三年後の今年の七月末だった。

小山は、今度も、西条の指示で、早川功一郎という男を、尾行している時だった。

この時も、早川という五十代の男について、写真を見せられただけで、何の説明もなかった。ただ、尾行している中に、早川が、どんな男か、自然にわかってきた。新聞に、早川の写真が、のったからである。

早川交易の社長で、株の取引きで儲けた十八億円を脱税し、追徴されたと、新聞に、出たのだ。

要するに、株で大儲けをした人間である。

早川は、女性関係も派手で、横浜にも、一人の女を囲っていた。

小山は、西条の指示で、女のマンションに忍び込んだのだが、突然、帰って来た彼女に見つかってしまい、大さわぎになった。

小山は、神奈川県警に、逮捕された。空巣に入り、帰宅した女に、暴行を働いた容疑である。

何か、得体の知れないグループに、傭われたような気がしてきた。

だが、逃げ出す気はなかった。結構、スリルがあって面白かったし、百万円の月給が、魅力的だったからである。

このあと、小山は、問題の女、浅田幸子の素行調査を、頼まれた。

東京に戻った小山は、彼女の踊りの発表会に出かけ、一週間尾行し、彼女が会った人間のリストを、作りあげた。

そうした小山の尾行や、盗聴が、どう利用されたか、わからない。

ただ、翌年十月の総選挙のあとの組閣で、渡辺拳と、谷川孝太郎の二人が、総裁候補にあがっていながら、なぜか、全くダークホースの若い三田村が、総裁になり、首相になった。

それが、小山の調べたことと、関係があったのかどうか、西条は、聞いても、答えてくれなかった。

その後、小山は、西条に指示されるままに、さまざまな人間について、尾行し、監視し、写真を撮り、会話を録音した。

電話会社をやめた男と組んで、電話の盗聴をしたこともある。

相手は、政治家に限らなかった。有名なタレントの時もあったし、学者や、作家のこともあった。

なぜ、そうするのかについて、質問は、許されなかった。

した。

もう十時に近かった。西条は、タクシーで銀座に出ると、「ジュテーム」というクラブに入った。

小山は、自分の車を、有料駐車場に預けておいて、その店に入ってみた。幸い、銀座としては、広い店だったし、適当に、混んでいたので、西条から、かくれて、飲むことが出来た。

ここで、西条が、誰かに会うのかと思ったが、それらしい気配はない。三十歳くらいのホステスと、何か喋りながら、楽しげに、飲んでいるだけである。

小山は、自分のテーブルに来たホステスに、西条のことを、聞いてみた。

「あのテーブルのお客さんなら、よく見えるわ。月に、二、三回くらいかな」

と、ユミコという、三十五、六歳のホステスは、小山に、教えてくれた。

「ひとりで、来るの？」

「ええ。いつも、ひとりね」

「誰か、連れて来ることは、ないのかね？」

と、小山は、きいた。何となく、訊問口調になってしまうのは、刑事生活が、長かったせいだろう。

「あたしの覚えている限り、ひとりだわ」

と、ユミコは、いった。となると、このクラブには、ただ、個人的な楽しみだけで、来てい

小山は、観念したのだが、なぜか、釈放された。

西条が、手を回した。というより、西条が働いているグループが、手を回したのである。

この時、小山は、助かったという思いと同時に、グループの持つ力に、驚き、怯えた。とにかく、警察を動かす力を持っていると、思ったからである。

同時に、小山は、西条の属しているグループの正体を、知りたくなった。

「われわれのことを、調べようなどとは、思わないことです」

と、西条は、何度も、小山に対して、念を押した。

だが、そういわれると、余計に、正体を知りたくなるのだ。

九月になって、小山は、西条を、尾行しようと、思い立った。

彼の住所は、わかっている。新宿のマンションだった。そのマンションに張り込んで、尾行し、彼が、どんな人間に会うか、調べてみようと、考えたのである。

馬力アップした車は、与えられていたし、赤外線つきのカメラ、盗聴器なども、持っている。これを利用すれば、西条という男と、彼の仲間について、何か、探れるだろう。

ただ、車は、西条が、貸してくれているもので、ナンバーも、車種も、知られてしまっている。この車で尾行したら、たちまち、気付かれてしまうに違いない。

そこで、小山は、ひそかに、国産のスポーツ・カーを買い求めた。

九月二十日に初めて、小山は、その車に乗って、張り込みに行き、夜、外出する西条を尾行

「何が？」

「あのお客さん、いつも、きちんと、払っているからよ。大人しいし、いいお客さんだわ」

「それなのに、おれには、借金を返さないんだ。余計に、腹が立つじゃないか」

と、小山は、いった。

看板になって、西条は、カオルというホステスと、一緒に、タクシーで帰る。小山は、それを、タクシーで、尾行した。

二人が行ったのは、大森のマンションだった。何のことはない。彼女のマンションに、しけ込んだのだ。

西条のマンションに電話すると、いつでも、出るのは、彼だった。独身とすれば、ひとりぐらい、女がいても、不思議はないのである。

ただ、カオルというホステスが、銀座の店に来たのが、三年前というのが、気になった。小山が、西条に声をかけられたのが、同じ三年前だったからである。

西条は、翌日、朝帰りした。

その後、何回か、西条を尾行したが、これといった収穫は、なかった。

西条は、ホステスのカオル以外には、会わないのだ。どうやら、仲間には、電話で、連絡を取っているか、或いは、カオルを通じて、連絡しているらしい。

十月二十九日に、西条から、電話連絡が、入った。

るのか。
「一緒のホステスは？」
「ああ、カオルちゃんね」
「いつも、彼女を、指名するのかね？」
「そうねえ。彼女のお客さんということになってるわ」
「彼女は、どんな人かね？」
と、小山は、きいた。
「そうねえ。大学を出たっていうことだけで、本当かどうか、知らないわ。自分の過去について、でたらめをいう人が多いから。でも、頭のいい人よ」
と、ユミコは、いった。
「どのくらい、この店で働いているのかね？」
「三年ぐらいかな」
と、ユミコは、いってから、じっと、小山を見て、
「あなた刑事さん？」
「とんでもない。ただ、あの客に、金を貸してるんだ。金がないというのに、こんなクラブで、飲んでるから、変だなと、思ってね」
「おかしいわね」

と、西条は、いった。

ファックスで、問題の男の顔写真が、送られてきた。

小山は、じっと、その男の顔を見た。なかなかの美男子である。だが、ただの甘い顔ではない。唇の薄さに、冷たさが、のぞいている感じがする。

（どんな仕事をやっている男だろう？）

西条が、調べてくれというのだから、どこか、後暗いところがあるに違いない。

これまで、二十人近く調べてきて、いずれも、どこかに、弱味のある人間たちだったからである。

翌日、四谷三丁目のマンションに張り込み、東京駅まで尾行した。

その男、木田は、新幹線で、名古屋に出て、西条の予想した通り、特急「ひだ」で、高山に向った。

高山は、雨だった。

木田は、予約していたらしく、日本旅館に入った。小山は、空部屋がないといわれ、仕方なく、近くの旅館に、泊ることにした。

幸い、二階の部屋の窓から、木田の入った旅館の玄関が見える。

木田は、旅館の傘をさして、小雨の中を市内見物に出かけた。小山も、それに、つき合うことにした。

「また、ある男を、尾行して、その行動を、チェックして貰いたいのです」
と、西条は、いった。
「いいですよ。もちろん」
「その男は、四谷三丁目のヴィラ四谷の五〇八号室に住む木田という男です。明日、旅行に出ることになっているので、尾行し、何処へ行くか、調べて下さい。ファックスで、この男の顔写真を送ります。今回は、成功すれば、百万円のボーナスを出します」
「いつまで、尾行したらいいんですか？」
と、小山は、きいた。
「一週間」
「行先の見当はつきませんか？」
「恐らく、飛騨高山へ行くと思います」
「なぜ、そう思うんですか？」
と、つい、小山がきくと、西条は、
「質問はしない約束でしたよ。まさか、あれこれ、私や、私の仲間のことを、調べようと思っているんじゃないでしょうね？」
「そんなことはない。明日、尾行しますよ」
「その結果を、電話で、報告して下さい」

「高山は、初めてですか？」
「そうです」
「それなら、晩秋の飛騨高山を、楽しんでいて下さい」
と、西条は、いった。
翌三十一日と、十一月一日の二日間、小山はいわれた通り、仕事を忘れて、旅行を楽しんだ。
雨は止み、寒かったが、小山は、下呂温泉に遊び、高山市の郊外にある飛騨民俗村を、見に行った。
一日の午後、旅館に戻ると、速達が、届いていた。
ワープロで、宛名が書かれ、差出人の名前はなかったが、西条からの手紙と、すぐ、わかった。
中の便箋にも、ワープロの文字が、並んでいた。

美女高原NO8のバンガロー　11／2PM6・00

それだけである。簡潔といえばいえるし、味もそっけもないといえば、いえる文章である。
小山は、帳場から、高山周辺の地図を借りてきて、広げた。
美女高原、美女峠といった地名が、小山の眼に、飛び込んできた。
高山市内から、意外に近い場所だった。

江戸時代の面影を残している上三之町を歩き、郷土玩具館を訪ね、屋台会館を見物した。

この日は、誰にも会わず、木田は、旅館に帰った。

夕食のあと、小山は、旅館の外に出て、公衆電話から、西条に、連絡した。

「問題の男は、今日は、高山市内を見物しただけで、旅館に戻りました。誰にも、会っていません」

「そのことですが、彼が、どこで、女に会うかわかりかけていますので、そこへ行って、張り込んでいて下さい」

と、西条は、いった。

「女？」

「そうです。その女と、彼とが、どんな話をするか、二人の話を録音して貰いたいのです」

「二人が、会う場所が、わかったら、電話して下さい」

「いや、速達で知らせますよ。場所を間違えると困るのでね。ただ、読み終ったら、焼却して下さい」

「わかりましたが、速達が着く間に、彼が、動いたら、どうしますか？　尾行しますか？」

「大丈夫です。彼は、そこで、女からの連絡を待っている筈だから、しばらく、高山にいますよ」

と、西条は、いう。

「私は、その間、どうしたらいいんですか？」

ってみようと思い、午後四時に、旅館を出た。
タクシーを拾い、美女高原に、向った。
旅館の仲居さんがいったように、国道といっても、幅のせまい道路である。タクシーの運転手によると、最近、国道に格上げされたのだという。
十五、六分も走ると、「美女高原」と書かれた大きな立看板が、眼に入ってきた。
前方に、乗鞍岳が、見える。すでに、山頂附近には、白く、雪が飾られていた。
美女ケ池が見えてきて、池の周囲に、駐車場や、ロッジがあり、寒い日だったが、何台かの車が、とまっていた。
ロッジは、一泊二食六千円で、泊れると聞き、今日は、ここで、一泊しようと、小山は考えた。
タクシーを帰し、小山は、問題のバンガローを、下見しに行くことにした。
夜間照明つきのテニスコートでは、若者たちが、乾いたボールの音を、ひびかせている。
池には、釣人の姿が見えた。
赤松や、白樺の林の中にあるオートキャンプ場には、さすがに、車の姿はなかった。その季節では、もう、なくなっているのだろう。
小山は、手で囲って、煙草に火をつけ、それをふかしながら、バンガローの方へ、歩いて行った。
林の中に、小さな山小屋風の建物が点在する場所に出た。一棟に、四、五人が、寝起き出来るだろう。それが、十三戸である。

小山は、ビールを頼み、運んで来てくれた仲居さんに、美女高原が、どんな所か、聞いてみた。

「今は、シーズン・オフですけど、夏は、キャンプをしたり、バンガローに泊ったりして、若い人たちで、賑わいますよ。テニスコートなんかもあるんです」

と、仲居さんは、説明してくれた。

「バンガローがあるんだね？」

「ええ。いくつもありますわ」

「他に、何が、あるんだろう？」

「美女ケ池では、貸ボートもあるし、釣りも出来ますよ。あと、オートキャンプ場があって、関東や、関西から、車で来る人が、沢山いますわ。もう、寒いから、来ないでしょうけど」

と、仲居さんは、いった。

「ここから、車で、どのくらいかかるのかね？」

「車で、二、三十分で、行けますよ。国道三六一号線を走るんです。もっとも、国道といっても、あんまりいい道じゃありませんけどね」

と、いって、仲居さんは、笑った。

その他、美女ケ池の周辺には、水ばしょうの群落があって、名所になっているらしい。

小山は、もう一度、地図を確認してから、西条の手紙を、封筒ごと、灰皿の上で、焼却した。

翌十一月二日。午後六時では、暗くなってしまうので、小山は、明るい中に、美女高原に行

5

死体は、十一月三日の朝になって、発見された。
発見したのは、高山市内のサラリーマンで、美女ケ池に釣りに来たのが、何となく、夏に泊ったバンガローを見に来てのことだった。
高山警察署から、パトカーが、駈けつけた。
季節外れで、ひっそりと、静かだったバンガローの周囲が、急に、騒がしくなったのは、新聞社の車なども、やって来たからである。
死体は、後頭部を、強打されていて、明らかに、殺人だった。
高山警察署に、捜査本部が置かれ、岐阜県警の中村警部が、実際の指揮をとることになった。
中村は、三十二歳の若い警部である。
中村が、困惑したのは、死体の所持品の中に、身元を証明するものが、全く、見つからないことだった。
運転免許証も、名刺も見つからない。財布も、失くなっていた。
それで、最初、物盗り説が、有力になった。
凶器は、スパナか、ハンマーのようなものと、鑑識は、いった。車で、美女高原にやって来

炊事場が、別に建てられている。バンガロー村のあたりは、落ち葉が、一様に敷きつめられ、歩くと、音がした。

小山は、NO8のバンガローを見つけて、のぞき込んだ。

畳敷きの部屋一つに、トイレがついているだけの狭い造りである。

午後六時になると、木田という男が、ここで、女と、会うのだろうか？

小山は、中に入り、和室の隅に、盗聴器を取りつけた。

次第に、周囲が、暗くなってくる。美女ケ池で、釣りをしていた人々も、帰ってしまった。

幸い、月明りがあって、バンガローの建物が、ぼんやりと、浮き上ってみえた。小山は、そっと、NO8のバンガローに近づいた。五、六十メートルの距離があれば、盗聴器の、効果が上る。

小山は、赤松の樹のかげに屈み込み、ラジオのスイッチを入れ、イヤホンを耳につけた。

まだ、木田も女も、バンガローに入っていないのか、何の声も聞こえて来ない。建物も、暗いままだった。

（時間が、早いのか？）

と、小山が、月明りに、すかすようにして、腕時計に眼をやった時だった。

いきなり、背後から、後頭部を強打された。呻き声をあげて倒れる小山に向って、更に、二撃、三撃が、加えられた。

小山は、小きざみに、手足をけいれんさせていたが、やがて、全く、動かなくなった。

中村警部は、すぐ、その旅館に、飛んで行った。これで、身元が、わかると、思ったからである。

宿帳には、東京都世田谷区の住所と、藤田功の名前が、書かれていたが、照会すると、偽名で、その住所も、実在しないことが、わかってきた。

いぜんとして、身元が、割れて来ないのである。

被害者は、十月二十九日から泊っていて、十一月一日には、「きくの」気付で、速達が届いていることが、わかった。

その手紙も、見つからないのである。

「灰皿に、燃えかすがあったから、燃やしたんじゃないですか」

と、中年の仲居さんは、中村にいった。

「いやに、秘密めかした男だね。他に、何か気付いたことは、ないかね？」

と、中村は、きいた。

「一日の夜は、美女高原のことを、いろいろと、私に、聞いていらっしゃいましたし、地図も、見せてくれとおっしゃって」

「じゃあ、初めて、あそこに行ったんだろうが、向うで、誰かに会うようなことを、いってなかったかね？」

「いいえ」

「速達の差出人の名前は、見なかった？」

た人間が、金欲しさから、通りがかった被害者を、襲ったのではないか。

そんな推理だった。

だが、物盗りに見せかけた殺人の線もある。

中村は、被害者の指紋を、警察庁に送るとともに、美女高原周辺の聞き込みに、当った。

部下の一人が、美女ケ池傍のロッジで、従業員が、被害者と、話をしているのを、確認してきた。

「二日の午後四時半頃、被害者と思われる男が、ここに泊れるのかと、聞いたそうです。それで、一泊二食つきで、六千円、素泊りなら三千五百円と説明したところ、今日、泊るかも知れないので、その時は、よろしくと、いったそうです」

と、林という刑事が、中村に、報告した。

「その時、被害者は、何か持っていたのかね？」

「ショルダーバッグを、肩から下げていたといっています」

「それも、盗まれているわけか」

「まだ、見つかっていません」

「あそこに行くのに、車を使ったと思うんだが、タクシーには、当っているんだろうね？」

「今、当っています」

と、林刑事は、いったが、その日の中に、被害者を乗せたタクシーの運転手が、見つかった。

その運転手の話では、高山市内の旅館「きくの」から乗せたということだった。

「住居不法侵入と、傷害で、逮捕されたんだったね？」
「そうです。私は、彼を制止できなくて、一カ月の停職になりましたが、小山は、逮捕されてしまって――」
「確か、執行猶予だったね？」
「そうです。小山が、あのあと、どうしているか、気になっていたんですが、何かわかったんですか？」
「殺されたよ。飛騨高山の郊外の美女高原という所でね」
「殺された――？　本当ですか？」
「身元不明で、指紋の照会が、あったんだが、小山の指紋が、前科者カードにのっていて、わかったんだよ」
「元刑事の身元が、前科者カードからわかるなんて、皮肉なものですね」
亀井は、眉をひそめて、いった。
「岐阜県警には、小山の名前を、電話で知らせた。向うは、小山の東京での行動を調べてくれといったよ。何故、美女高原へ行ったか、それは、東京でわかるんじゃないかということでね。これから、一緒に、彼のマンションへ行ってみないか」
「住所は、わかっているんですか？」
と、亀井が、きいた。

「名前は、ありませんでしたわ」
と、仲居さんは、いった。
（被害者の仕事は、何だったんだろう？）
と、中村は、首をひねった。それに、何をしに、この高山へ来て、美女高原に行ったのかもである。
差出人のない速達が届いていたり、どうやら、それを、灰皿で燃やしたりしているところをみると、何やら、秘密めかした仕事をしていたように思えるのだ。だが、それ以上のことが、わからなかった。
（とにかく、身元が割れれば、何かわかるのだが――）
と、中村は、思った。

6

その頃、東京の警視庁捜査本部で、十津川警部が、部下の亀井刑事に、声をかけていた。
「カメさんは、昔、一緒に働いていた小山刑事と、仲が良かったね？」
「ええ。よく、彼とコンビで働いていましたよ。あの事件で、彼が、懲戒免職になるまで」
と、亀井は、なつかしそうに、いった。

十津川は、警察手帳を示して、
「七〇三号室に用があるんです」
「七〇三号室？　その部屋なら、燃えましたよ」
「燃えた？」
びっくりして、十津川が、きき返した。
「そうです。七階部分が、燃えましたが、七〇三号室が、火元とみられています」
「まさか。留守の筈ですよ」
「しかし、火元であることは、間違いありません」
と、消防隊員は、頑固に、主張した。
火事は、すでに、鎮火している。エレベーターが使えないので、十津川と、亀井は、消防隊員に案内されて、七階まで、あがって行った。
消防隊員の言葉通り、七階部分は、焼けただれていた。
問題の七〇三号室は、コンクリートの壁は、焦げて残っていたが、室内は、完全に、焼けてしまっている。
「これじゃあ、何も見つかりませんね」
亀井が、溜息をついた。
「先廻りされたな」

「電話帳に、のっていた。三鷹のマンションだよ」
「行きましょう」
と、亀井が、大きな声で、いった。
二人は、亀井の運転するパトカーで、三鷹に向った。
「あんなタフな奴が、死んだなんて、信じられませんよ」
と、車の中で、亀井が、いった。
「少し、癖のある男だったね」
十津川も、思い出しながら、いった。
「しかし、優秀な刑事でしたよ。やり過ぎるきらいがあるんで、注意はしていたんですが」
「奥さんと別れたとも、聞いたんだが」
「そうなんです。懲戒免職になってから、離婚しました」
と、亀井は、いった。
JR三鷹駅から、車で七、八分のところに建つマンションに着くと、建物の前に、消防車が二台、とまっていた。
車から降りて、十津川と亀井が、中に入ろうとすると、消防隊員が、立ちはだかって、
「何処へ行くんだ？」
と、咎めるように、声をかけてきた。

「飛驒高山で、殺されたんです。彼が、どんな仕事をしていたか、ご存知ですか？」

と、十津川は、きいた。

「どんなって、あの人は、普通のサラリーマンじゃありませんね。日曜日でもないのに、一日中、部屋にいたりすることがあるし、そうかと思うと、夜、車で出かけて行きますからねえ」

「金に困っていた様子は、どうですか？」

と、今度は、亀井が、きいた。

「それは、ありませんでしたよ。白いカローラを一台持っているのに、新しく、国産のスポーツ・カーを、買ってますからねえ。あれは、五、六百万は、するんじゃありませんか」

「スポーツ・カーだね」

「それに、時々、銀行の人が来てるから、かなり預金もあったんじゃありませんか」

と、管理人は、いった。彼の言葉が、過去形になったり、現在形になったりするのは、まだ、小山の死に、現実感が、ないからだろう。

十津川と、亀井が、近くのM銀行三鷹支店に行って、調べてみると、管理人のいうように、小山には、二千万円の定期預金と、七百万近い普通預金があった。

（何をして、こんなに、貯めたのだろうか？）

と、十津川は、首をかしげた。

と、十津川は、いった。
「小山を殺した犯人が、火をつけたと、お考えですか？」
「犯人か、或いは、仲間が、やったんだろう。証拠湮滅というやつだよ」
「と、すると、美女高原で殺された理由は、東京にあるということになってきますね」
と、亀井が、いった。
「そうだろうね」
「しかし、動機の発見が、難しいですね。何もかも、焼けてしまっていますから」
と、亀井は、いった。
十津川は、階下まで降り、一階の管理人室を、のぞいてみた。
管理人は、消火作業を手伝ったとみえて、服を、煤で汚していた。
「住人が無事で、ほっとしてますよ」
と、五十五、六歳の管理人は、笑顔を見せた。
「七〇三号室の小山さんのことですがね」
「ああ、小山さんは、留守でしたよ。帰って来て、きっと、びっくりするんじゃありませんかねえ」
「小山さんは、死にましたよ」
「え？」

「ああ、わかってる。その上、全て、焼かれてしまっているからね」
「どうします？」
「まず、小山という人物のことを、考えてみようじゃないか」
と、十津川は、いった。
「あの人は、刑事としては一流でしたよ。粘り強いし、勘も鋭かったです。ただ、少しばかり、暴力的で、法律を無視するところがありましたが、それだって、仕事熱心のあまりと、いえないこともないと思います」
と、亀井が、いう。
「上司にしてみれば、使いにくい人間だった」
「そうもいえます」
「それに、警察を、疎になっている」
「ええ」
「一般の会社では、使いにくい男だよ」
と、十津川は、いった。
「ええ、その通りです」
「それなのに、誰かが、小山を傭ったんだ。しかも、大金を払った節がある」
「そうですね。スポーツ・カーも買い、二千万円の預金も、出来ていたわけです」

第二章　追跡

1

十津川は、小山が殺された理由は、彼が、警視庁を辞めてから、今日までの間にあると、断定した。

刑事が殺されると、普通、彼が担当した事件の中に、動機があると、考える。

だが、小山は、すでに、刑事を辞めていたし、もし、刑事時代のことが動機なら、彼のマンションに放火することは、全く、無意味だからである。刑事時代、彼が手掛けた事件の調書は、警視庁に保管されている。

「彼が、警察を辞めてから、三年間が、問題だな」

と、十津川は、亀井に、いった。

「しかし、三年間というと、長いですよ」

「恐らく、そうだろうと思うね」
「例えば、どんな仕事ですか？」
「例えば、そうだな――」
と、十津川は、じっと、考えていたが、
「例えば、ゆすりだよ」
しかし、彼が、ゆすりを働いていれば、三年の間に、逮捕されていると、思いますが」
「だから、彼が、ゆすりをやったんじゃないんだ。第一、彼は、ゆすりに向いていないよ。すぐ、相手を殴ったりことは、金にならないからね。とすれば、小山の仕事は、ゆすりのタネを探すことだったんじゃないかと思う」
と、十津川は、いった。
なるほど。尾行したり、相手に覚られずに調べるのは、得意だったでしょうからね」
「誰かが、それを、小山にやらせていたんだ。もちろん、非合法にね」
「ゆすられた相手は、金持ちか、有名人でしょうね。そうでなければ、小山が、大金を、貰える筈がありませんから」
「同感だね。それに、金持ちや、有名人は、表沙汰にしたくないだろうから、ゆする相手としては、絶好だ」
小山が殺されたのは、何故でしょうか？

「小山の才能に、それだけの報酬を与えたということになる。誰が、何のためだろう？　どんな仕事をしていたんだろう？」

警察をやめた人間に出来る仕事というと、そんな沢山はありませんよ。警備会社に入るとか、私立探偵の仕事をするとかでしょう」

「だが、三年間で、二千万円の定期と、七百万の普通預金が出来て、スポーツ・カーと、普通車という二台の車が持てるようになるかね？」

「まず、無理ですね。刑事時代より月給は安いんじゃありませんか」

と、亀井は、いった。

「すると、非合法の匂いがしてくるよ」

と、十津川は、いった。

「暴力団の相談役とか、水商売関係ですか？」

「いや、それなら、捜査四課が、知っている筈だ」

「そうですね。小山が、そうしたところに出入りしているという噂は、聞いていませんね」

と、亀井が、肯いた。

「では、何だと思う？」

「もっと悪い仕事でしょうか？」

亀井が、眉をひそめて、十津川に、きいた。

「偶然ということは、ありませんか？」
「偶然？」
「何か、個人的な用で行ったのを、犯人が、追いかけて来て殺した。そうだとすると、あの場所は、犯人逮捕への手掛りには、なりません」
「それは、ないな」
十津川は、断定した。
「なぜですか？」
「いいかね。小山の傭い主は、小山に、危険を感じていたんだ。小山は、元刑事だから、それを、うすうす感じていたと思うね。だから、そんな時に、呑気に、美女高原に遊びに行っていたとは、思えないよ」
「とすると、仕事でということですか？」
「そうだ。傭い主が、仕事として、行かせたんだ。そして、殺したのさ。だから、美女高原周辺には、小山の足跡の他に、犯人の足跡もある筈だよ」
「それは、向うの警察と協力して、調べましょう」
と、亀井は、いった。
まず、第一と第二の聞き込みが、徹底的に、実行された。
第二の問題については、十津川自身も、亀井と一緒に、歩き廻った。

と、亀井が、きいた。

「多分、小山の好奇心のせいでしょう。彼は、元刑事の癖が出て、傷の主のことを、いろいろと、調べ始めたに違いないから、殺されたと、マンションに、放火されたんだと、小山が、何かメモでも残していれば、困るからね」

「しかし、警部。どうやって、あすこを、小山の傷の主を、見つけ出すんです？」

と、亀井が、きいた。

2

「第一は、聞き込みだよ。金持ちや、百名山が、あすこを、よく知っていて、大金を払ったことを、喋ってしまって、流れるようだ。まず、その喋を、聞き出すことだ」

と、十津川は、いった。

「亜希子さんが、今日から、あっちこっち、他にも、何かをするつもりだ」

「亜希子さんは、警視庁をやめてから、一切の動きを、徹底的に、やることだ。彼は、女、だから、それでも、難しいに、何かを、話してくれる可能性があるよ」

「わかりました」

「第二は、なぜ、奥さんを、殺されたかを、調べる」

「彼が、就職について相談するとしたら、誰でしょうか？」

と、十津川は、きいてみた。

「そうですねえ。高校の先輩で、今、政治家になっている羽谷さんなんかを、尊敬していたんじゃありませんか」

と、村西は、いった。

十津川と、亀井は、今度は、参議院議員の羽谷誠に会いに行った。

羽谷は、会ってくれたが、機嫌が、悪かった。

羽谷は、谷川孝太郎の派閥に属しているのだが、親分の谷川が、総理にならず、自分も、大臣の椅子につけなかったので、不機嫌なのだろうと、十津川は、勝手に解釈した。

「小山君なら、知っているよ。彼が、どうかしたのかね？」

「殺されました」

と、十津川は、いった。

「殺された？　警察を辞めていたのにかね？」

「そうです。再就職のことで、先生のところに、相談に来ませんでしたか？」

十津川が、きくと、羽谷は、

「いや、来なかったよ」

と、いってから、

二人は、ふと山の高校時代の恩師に、会いに行こうと
阿西という国語の教師は、すでに、定年退職して、八王子に住んでいた。
「山吉君が、警視庁を辞めたことは知っていました。
と阿西は、いった。
「辞めたあとで、会いに来ませんでしたから」
一重が、きいた。
「そうですなあ。二、三度、来たかな？　何かの相談に来たのかも知れないが、私には、何の力もありませんからね。何もおかずに、帰ってしまうことが、
と、阿西は、微笑した。
「かえって、警視庁を辞めた話は、これまでに、しなかったんですか？」
「ええ」
「それで、これからどうするかを、話していきましたか？」
「こぼすように、暮すとか、いっていましたね。ただ、警察を辞めたことについて、阿西に、
「ここに、阿西さん、ふふ
「ええ、阪本、乾燥、ございます
「私は、ここから、何かを

「彼が、それらしいことをしていたのかね？　政治家の秘書みたいな仕事をしていたという形跡があるのかね？」

「いや、まだ、よくわかっていないのです。小山君が、先生の所へ来ていなかったのなら、それでいいのです。失礼しました」

と、十津川が、いい、亀井を促して、帰ろうとすると、羽谷が、急に、

「ちょっと、待ちたまえ」

と、とめた。

十津川たちが、もう一度、ソファに腰を下すと、羽谷は、窺うような眼になった。

「君の推理は、当っているかも知れんよ」

と、いった。

「どこがですか？」

「小山君が、私の所へ来たら、ちゃんとした仕事を世話したんだが、他の連中は、ひょっとすると、ダーティな仕事を、頼んだかも知れないということだよ」

「お心当りが、おありですか？」

「一つだけある」

「どこですか？」

「三田村さんのところだよ」

「来ていれば、頼みたいことがあったのにねえ」
「どんなことですか？」
「君たちに、話しても仕方がないんだが、谷川さんが、総裁選挙で、自分から、辞退された。どうも、何かあるような気がして仕方がないんだよ。最近、とみに、元気がなくなっているからねえ。小山君が来たら、その理由を調べて貰うことにしたかも知れん」
「そういえば、谷川さんの派閥は、冷や飯を食わされているといわれてますね」
亀井が、傍から、いった。十津川は、ひやっとしたが、羽谷は、むしろ、その通りだというように、大きく肯いた。
「どうも、今度の総裁選では、なぜ急に、谷川先生が、弱気になったのか、みんな、首をかしげているんだよ。何かあるんだな。陰謀の匂いがして仕方がない」
「もし、それが、陰謀だとすると、仕掛けたのは、誰だと、お考えですか？」
と、十津川は、きいた。
羽谷は、急に、眉をひそめて、十津川と、亀井を、見直した。
「なぜ、そんなことに、君たちが、関心を持つのかね？　政治に関心があるのかね？」
「いえ、政治に関心はありません。ただ、小山君が、ひょっとして、あなたのところで、働いていたのではないかと、思ったものですから」
と、十津川は、あわてて、いった。

と、羽谷は、いった。
「当ってみましょう」
十津川が、肯くと、
「何かわかったら、必ず、私に、知らせてくれたまえ。私も、警察に協力を惜しまんからね」
と、羽谷は、十津川と、亀井の肩を叩いた。

3

外に出ると、亀井は、眉をひそめて、
「羽谷は、われわれをけしかけて、三田村の弱点を、調べさせる気ですよ」
「わかってるよ」
と、十津川は、笑った。
それでも、八木という弁護士のことを、調べるつもりですか？
「ああ。当ってみるよ」
あの羽谷に、利用される恐れがありますよ」
だが、政治家というのは、自分の利害とか、ライバルの弱点とかに、ひどく、敏感なものでね。彼は、三田村のブレーンのことを、しっかりと、見ていると、思ったね」

「今度、総裁になられた三田村さんのことですか？」

「そうだよ。まあ、三田村さんは、若いが、立派な人だ。総裁になり、日本の首相になっても、ちゃんと、やるだろう。だが、取り巻きの中には、うさん臭い奴もいる。三田村さんは、ブレーンなどと、英語でいっているが、体質は、昔ながらの手合いでね。ライバルを、蹴落とすためには、どんな汚いことでもやりかねない。小山君は、或いは、彼等の手足として、働かされたんじゃないのかね」

羽谷は、声をひそめるようにして、いった。

「三田村さんのブレーンの誰が、小山君を、傭ったと、思われますか？」

「そうだな。まず、八木君あたりかな」

「八木さんですか？」

「八木準一郎だ。弁護士出身だが、あれこれ、策を弄するのが好きな男でね。暴力団ともつながっているという噂がある。三田村さんのところで、ダーティな面を、一手に引き受けている男だよ」

「今でも、弁護士をやっているんですか？」

「四谷に、事務所がある。弁護士だから、警察のことに詳しくても、おかしくない。小山君のことを知って、手先として、使ったとしても、おかしくないよ。どうだね？　調べてみる価値はあると思うがね」

「やりましょう」
と、亀井も、いった。
二人は、四谷にいる八木弁護士に会うために、車を走らせた。
なかなか、立派な事務所だった。
十津川は、警察手帳を見せ、所長の八木に会った。
所長室に、向い合って腰を下すと、いやでも、八木の背後の壁に飾ってある色紙が、眼に入ってくる。

八木準一郎君　総理大臣　三田村強

なかなか、上手な字だった。
「八木さんは、三田村首相と、お親しいようですね」
と、十津川は、まず、いった。
八木は、嬉しそうに、微笑して、
「法律関係で、いろいろと、相談を受けていますよ」
「今度の総裁選挙で、三田村さんを当選させるために、尽力されたと聞きましたが」
「まあ、微力をつくしたということでしょうか。私は、日本の政治は、若返りが必要だと思っ

「すると、彼のいったことは、当っていると、思われるんですか？」

「そうだよ。若い三田村が、総裁選挙に勝った裏には何かある筈だ。それを、羽谷は、三田村のブレーンが、ダーティなことを企んだと思っている。それは、当っているような気がするんだよ。今もいったように、そういうことには、政治家は敏感だし、多分、自分たちだって、ライバルを追い落とすために、汚いことを、いくらでも、やって来たと思うね。だから、当っているような気がするのさ」

「それに、小山が使われた可能性もですか？」

「そうだ。今度の総裁選は、三つ巴で、激しいものだった。札束が飛び交い、中傷が乱れ飛んだ。三人の候補の女性関係も、話題になった。その時、有能な刑事の小山が、退職した。いや、馘になっていた。少しぐらいダーティな仕事でも、金を出せばやるかも知れない。相手の弱味を探らせるには、絶好の男だよ。しかも、小山は、谷川派の羽谷代議士の知り合いだ。羽谷が、小山を傭うかも知れない。そこで、ライバルの三田村派の人間が、先廻りして、小山を傭ったあり得ることだよ」

「なるほど」

「だから、ここは、羽谷の誘いにのって、三田村のブレーンに、当ってみようというわけだよ」

と、十津川は、いった。

とんでもない。うちで、小山という男なんか傭ったことはありませんよ。ここにいる人間に聞いてみて下さい」

「いや、あなたが、個人的に、傭ったということなんです」

と、十津川がいうと、八木は、眉を寄せて、

「私が、何に、その男を、使ったというわけですか？」

「元刑事、それも、優秀な元刑事が、得意とすることにですよ。尾行、証拠集め、訊問、或いは、法律違反ですが、盗聴といったことですがね」

と、十津川は、いった。

八木の表情が、険しくなった。

「私は、そんなことをやらせたことはない。第一、小山という男など、全く、知らないんだ。妙ないいがかりは、止めて欲しいですね。次第によっては、告発しますよ」

「では、あなた以外の方で、小山元刑事を、傭っていた人を知りませんか？　高給で傭っているんですがね」

と、亀井が、いった。

「知りませんよ。そんなことは」

と、八木は、怒りを見せていい、

「忙しいので、そろそろ、帰って頂けませんかね」

ていましたからね」

「しかし、一番弱いといわれていた三田村さんが、総裁になったというのは、私たちには、驚きでしたね」

「そうですか。日本の政治も、動いているんですよ」

八木は、そんないい方をした。

「八木さんは、どんな手を使ったんですか？　三田村さんを、勝たせるのに」

と、十津川が、きくと、八木は急に、警戒する眼になって、

「なぜ、そんなことを聞くんですか？　警視庁が、総裁選に興味を持っているとは、思われないんだが」

「小山という男を、知っていますか？」

「小山？」

「そうです。この間まで、警視庁にいた人間です。優秀な刑事ですが、ちょっと問題がありましてね」

「その元刑事が、どうかしたんですか？」

「殺されました」

「ほう」

「実は、警視庁を辞めてから、八木さんの下で働いていたという噂があるんですよ」

い」

「ええ」

小山は、その代りに、八木に、金を要求するんじゃないかね？」

「あり得ますね」

「その時に、弁護士の八木が、小山を殺すかな？　まず、金で、黙らせようとするんじゃないかね？　それにだ。もし、小山の働きが、三田村を総裁選挙で勝たせるのに、多少でも役立っていれば、五、六百万ぐらい、簡単に出すんじゃないかな？」

と、十津川は、いった。

亀井は、「そうですねえ」と、考え込んだ。

「八木が、簡単に、小山を殺すのは、考えにくいですねえ」

「だが、総裁選のあと、すぐ、殺されている」

「ええ」

「だから、私は、こう考えたんだ。小山を傭ったのは、別の人間で、その結果を、八木たちが利用して、総裁選に、利用したんじゃないかとね」

と、十津川は、いった。

「その人間は、ひどく、冷酷な奴ということになりますね」

「そうだよ。多分、小山が危険な存在になったとき、金で口止めをする代りに、あっさり殺し

と、つけ加えた。

十津川は、亀井を促して、事務所を出た。

「八木は、やたらに、怒っていましたね」

と、亀井は、車に戻りながら、十津川に、いった。

「思い当ることがあるからだろうね」

と、十津川が、いった。

「八木が、小山を傭ったと思いますか？」

「可能性はある。だが、八木は、痩せても枯れても、弁護士だ。殺人までするかね？」

と、十津川は、いった。

「しかし、小山が、危険な存在になったら、消そうとするんじゃありませんか？」

と、亀井が、いう。

「小山は、警視庁を辞めた、というより馘になった男だよ」

「そうです。だからこそ、ダーティな仕事のために、彼を傭ったんでしょう」

「小山は、馘になった警察に、反感を持っていたと思うよ。彼が、やり手の刑事だったから、逆に、その反撥も強かったと思うんだ」

「私も、そう思います」

「とすれば、小山が、八木の秘密を知ったとしても、警察に、それを通報するとは、考えにく

「ええ」
「ひょっとすると――」
「ひょっとすると、何ですか？」
亀井は、前方を見つめたまま、十津川に、きいた。
「いつも、金になりそうな情報なり、物件を探して、それを、当事者に、法外な値段で売りつける組織があるのかも知れない」
「組織ですか」
「そうだよ。その組織が、総裁選の時、三田村に有利な情報を、高く、売りつけた。多分、八木弁護士を通してね」
「その組織に、小山は、傭われていたということですか？」
「ああ、そうだ。その組織は、もちろん、小山の名前なんかいわず、情報だけを売りつけた。三田村のライバルの谷川や、渡辺のスキャンダルを調べあげて、それを、売りつけたんじゃないかな。だから、八木は、小山の名前を知らなくても、当然なんだ」
「そうだとすると、厄介な相手になりそうですね」
と、亀井は、いった。
「どんな組織かわからないからな」
「もう一度、八木のところに戻って、彼に聞きますか？　どんな人間が、情報を売り込みに来

てしまったようだからね」

「どんな人間なんですか？」

と、亀井が、きいた。

十津川は、走る車の中で、考え込んだ。亀井は、十津川が、黙っている間、彼も、黙って、運転している。

「小山が、いろいろな人間に傭われていたとは考えられない。元刑事を、同じような仕事で傭う人間が、そんなに沢山いるとは、思えないからね」

と、十津川は、考えながら、いった。

「ええ」

亀井は、短く肯く。

「とすると、小山は、同じ人間に傭われていたとみていい。ところで、小山の収入だが、総裁選の前後にだけ、多くなっているわけじゃなかった」

「そうですね。その点からみても、傭い主が、八木弁護士とは、考えにくいですね」

と、亀井が、いった。

「まあ、弁護士は、裁判の時にも、弁護側に有利な証拠を手に入れようとして、私立探偵を傭ったりするが、そういう時には、ちゃんと開業している私立探偵なり、興信所を使うものだよ。小山が、そんな看板を掲げていた形跡はない」

と、本多は、首をかしげた。
「それも、金になりそうなダーティな情報ばかりをです」
「まあ、あり得ない話じゃないとは思うが。同時に、つかみどころがない話でもあるね」
本多は、そんないい方をした。
「最近、警察を辞めた人間のリストはありませんか。特に、問題を起こして辞めた人間で、やり手の刑事だった者のです」
と、十津川は、いった。
「それを、どうするのかね？」
「その組織は、小山を傭いました。彼が、役に立つと思ったからでしょう。ということは、多分、前にも、元刑事を傭って、上手くいったことがあったからだと思うのです」
十津川が、いうと、本多は肯いた。
「その元刑事を見つけ出して、調べたいというわけだね？」
「その通りです」
「わかった。すぐ、作らせよう」
と、本多は、いった。
翌日には、五名のリストが、出来あがった。
警視庁が、二名、警察庁一名、それに、千葉と、神奈川県警が、各一名である。

たのかと」

亀井が、車のスピードをゆるめて、十津川にきいた。

「今は、駄目だよ」

「なぜですか？」

「どんな汚い情報だろうが、買うのは、別に犯罪じゃない。弁護士の八木は、そのくらいのことは、十分に心得て、買ったんだろうから、何を聞いても、喋らないさ」

と、十津川は、いった。

「そうなると、どこから手をつけていいか、わかりませんね」

「もう一度、考えてみよう」

と、十津川は、いった。

4

その後、高山署の中村警部からも、新しい発見があったという連絡はない。

小山の足跡はたどれても、犯人の足跡は見つからないらしい。

十津川は、自分の考えを、本多捜査一課長に話した。

「情報を集めて、金にする組織ねえ」

と、五十二、三歳の管理人が、いった。
「いつからですか？」
と、十津川が、きいた。
「そうですねえ。もう一週間になりますかね。行先が、わからないんで、私も、困っているんですよ」
「困るって、どういうことですか？」
亀井が、きいた。
「昨日も、若い女の人が訪ねて来ましてね。しつこく、久保さんの行方を聞かれましてね。あれは、久保さんに、惚れてるんじゃありませんかね」
管理人は、笑って見せた。
「どんな女性ですか？」
「二十五、六かな、きれいな人でしたよ。必死な顔をしていましたねえ」
「名前を、いっていましたか？」
と、十津川が、きいた。
「メモを置いていきましたよ。久保さんが戻って来たら、連絡するように、いってくれってね。住所と、電話番号も、聞いたんですが、それは、久保さんが、知っているからって」
管理人は、小さなメモ用紙を持って来た。それには、ボールペンで、次のように書いてあっ

十津川は、まず、警視庁の二名に、当ってみることにした。

捜査四課の多田誠は、柔道三段、三十五歳で、やり手だったが、暴力団から、二百万円を貰って、取締りの情報を流していたのがわかり、今年の三月に、辞めている。新聞にものったので、十津川は、この事件を思い出した。

もう一人は、捜査二課の久保昌一である。三十五歳で、一応、一身上の都合で辞めているが、リストには、人妻との不倫問題を起こしたと、書かれていた。

十津川は、亀井と、この二人を、訪ねることにした。

多田の方は、再就職して、現在、大手の警備会社で、働いていることがわかった。

次は、久保の方だった。

住所は、池袋のマンションである。十一階建の豪華マンションだった。

「高いですよ、このマンションは」

と、亀井は、エレベーターで、九階にあがりながら、小声で、いった。

「何かあるかも知れないな」

と、十津川も、いったが、九〇二号室は、インターホンを鳴らしても、返事がなかった。

新聞が、ドアの郵便受からあふれて、廊下に落ちている。

二人は、仕方なく、一階の管理人室へ戻って、久保昌一のことを、聞くことにした。

「久保さんは、ずっと、お留守のようですよ」

そうだ、小山のことで、彼の住んでいたマンションへ行った時、そこの管理人が、いっていたのである。管理人が、同じような印象を持っているということは、同じような仕事をしているということではないのか。

「久保さんは、車を持っていますか？」

と、十津川は、きいてみた。

「ええ。お持ちですよ。でも、車に乗って行かれたんじゃありませんね。久保さんのマークⅡは、駐車場にありますから」

と、管理人は、いった。

十津川と、亀井は、管理人に、その車を見せて貰った。

地下の駐車場に、五、六台の車が、駐めてあった。その中に、ブルーのトヨタマークⅡが、あった。新車である。

今の段階で、久保の部屋を調べることは出来ないが、車の中をのぞくのは、違法にはならないだろう。

十津川は、管理人に懐中電灯を借り、それで、運転席を、照らしてみた。無理矢理、ドアを開けなければ、構わないだろう。

助手席に名刺が落ちていますよ」

と、亀井がいった。

た。

〈久保さん。何かあったんじゃないかと、心配しています。電話下さい。

東くみ子〉

きれいな字だった。

(不倫の相手だろうか?)

それにしては、若過ぎるかなと、十津川は、思ったりした。もっとも、二十五、六の人妻というのも、沢山いるだろうが。

「久保さんは、どんな仕事をしていたか、わかりませんか?」

と、管理人に、きいてみた。

「それが、よくわからないんですよ。きちんと背広を着て出かけて行く時もあるし、ブルゾン姿の時もありましたしね。それに、出て行く時間も、まちまちで。あれは、普通のサラリーマンじゃないと思いますよ。お聞きしても、笑っているだけでね」

と、管理人は、いった。

(普通のサラリーマンじゃない?)

どこかで、同じ言葉を聞いたなと、十津川は、思った。

「その時、加入したんですか？」

いえ、その時は、これからの説明をしてもらって、一億円の生命保険に入ってもらいたいと、お願いまして、一度目の時に、書類をお持ちして、記入して頂きました。一億円の保険で、第一回の掛け金、お振込頂きました。

と、いい、森口は、その書類を見せてくれた。

十津川が、見たいのは、久保の職業の欄だったが、そこには、自営業と、書かれてあった。

受取人は、予想どおり、東くるみで、住所も、書いてあった。

久保さんが、どこかへ、行ってますか？

と、森口が、心配そうに、きく。

いや、久保さんに会って、話を聞きたいと思っているんですが、旅行由のようでしてね。もし、こちらに連絡があったら、知らせて下さい。

と、だけ、十津川は、いった。

S生命の支店を出ると、二人は、東くるみに会いに行くことにした。

書類にあった住所は、大塚のマンションである。車を飛ばして行き、そのマンションを見つけたが、彼女も、留守だった。

隣家のお婦に聞くと、昨日から、帰っていないという。

東くるみさんは、どこかへ、お勤めなんですか？

「S生命池袋支店　営業課　森口宏　――か。保険の勧誘に来たとき、貰ったんだろう」

十津川は、名刺の文字を読んだ。

「捨てずに、車に入れておいたというのは、保険に入ってもいいと思っていたんじゃありませんか？」

「もし、そうなら、何か話しているかも知れないな」

と、十津川は、いった。

久保については、どんなことでも知りたかった。十津川と、亀井は、この保険会社の人間に、会ってみることにした。

JR池袋駅前にある支店で、名刺の森口に会った。

四十五、六歳の眼鏡をかけた、小柄な男だった。

「久保さんには、二度、お会いしています」

と、森口は、いった。

マンションの郵便受に、名刺を入れておいたら、久保の方から、電話があったのだという。

「それで、これは、脈があるなと思って、早速、伺いました」

「それは、いつ頃ですか？」

「一カ月ほど前です。生命保険に入りたいが、どんな種類があるかといわれるので、パンフレットを差しあげて、説明いたしました」

行った。

その途中、可愛い仔犬を見つけた一人が、追いかけ始めた。

青木めぐみという女子大生である。

「×××」

と、勝手な名前を呼んで、つかまえようとしたのだが、七、八メートルほど追いかけたところで、突然、立ち止まってしまった。

ボーイフレンドの脇田が、案山子みたいに突っ立っているめぐみの傍に、笑いながら近づいて来て、

「どうしたんだよ？」

と、きいた。

めぐみは、黙って、手に持っていたラケットで、草むらを指した。

脇田の顔から、笑いが、けし飛んでしまった。

そこに、若い女が、胸のあたりを血で赤く染めて、仰向けに倒れていたからだった。

二人が、ロッジの支配人に知らせ、支配人が、一一〇番して、パトカーが、駈けつけてきた。

その一台から降りて来た中村警部は、ひどく、険しい表情をしていた。前に起きた殺人事件に、何の目鼻もつかないうちに、また、新しい殺人事件が起きたからである。

二十五、六歳の背の高い女だった。コートの前がはだけ、カシミヤの白いセーターの胸のあ

と、亀井が、きいた。

「新宿にある会社で、働いているということですけど、私は、会社の名前は、知りません」

「昨日から帰っていないということですが、旅行にでも行っているんでしょうか？」

「さあ、それも、わかりませんわ」

と、隣りの主婦は、首を横に振った。

「久保も、彼女も、どこかへ行ってしまってるのか」

と、十津川は、溜息をついた。まず、久保が消え、それを心配していた東くみ子も、消えてしまったことになる。

5

三日後の十一月九日。朝。

美女高原には、すでに、初冬の感じの風が吹いていた。冷たい風である。

それでも、美女ケ池近くのテニスコートでは、早朝から、若い男女が、ラケットをふるっていた。

昨日から、傍のロッジに泊っている連中だった。

二時間近く、テニスで汗を流してから、彼らは、タオルで汗を拭きながら、ロッジへ戻って

（物盗りの犯行ではないのか）

と、思い、そうなると、身元の確認が、ぜひ、必要だなとも考えた。

林刑事が、駈け戻ってきて、

「この辺のロッジには、泊っていませんね。知らないと、いっています」

「それなら、高山市内に泊っていて、車で、ここへ来たのか」

と、中村はいい、高山署に連絡をとった。市内のホテル、旅館に、当って貰うためである。

その結果は、すぐ、わかった。

市内のIホテルで、泊り客の女性が、昨日から戻っていないといい、宿泊者カードには、東京の東くみ子と、書かれているということだった。

電話で知らされた中村は、また、東京の人間かと、思った。

十一月三日の朝、バンガローの近くで発見された男の死体も、東京の人間だった。

（この二つの事件は、関係があるのだろうか？）

中村は、それを考え、部下に、現場周辺の聞き込みを指示する一方、警視庁の十津川にも、知らせることにした。

中村が、ロッジの電話を借りて、十津川に連絡をとると、

「東くみ子ですって！」

と、十津川は、いきなり、大きな声を出した。

たりが、赤く染っている。

一緒に来た検死官が、しばらく、死体を診ていたが、

「死んだのは、昨夜の午後九時から十二時の間だろうね」

と、中村に、いった。

「外傷は？」

「ないね」

「というと、いきなり刺されたか」

と、中村は、呟いてから、部下の林刑事たちに、

「この辺のロッジにでも、泊っていたと思われるから、それを調べてみてくれ」

と、指示した。

そのあと、中村は、改めて、死体と、向い合った。

（美人だな）

と、思う。スカートのポケットを調べたが、何も入っていない。

五、六メートル離れた場所に、黒い皮のハンドバッグが、落ちていた。ふたが開いていて、傍に、中身が、ぶちまけてある。だが、財布などは、捨てられたままで、七万三千円ほどが、そのまま入っていた。

ただ、身元がわかるようなものは、見つからなかった。

「そうです」
「現場の聞き込みで、何かありましたか？」
「今までに、わかったのは、彼女が、八日だけでなく、七日にも、行っていることだけです。七日に、彼女を、タクシーで運んだ運転手が、見つかっていますから」
と、中村は、いった。
「その運転手に会えますか？」
「明日、ご紹介しましょう」
と、中村は、約束した。
翌朝、十津川と、亀井は、中村の連れて来てくれた運転手のタクシーに乗り、美女高原に向った。
その車の中で、東くみ子のことを聞いてみた。
「Ｉホテルに呼ばれましてね。女の人を乗せたんですよ。最初から、美女高原へ行ってくれといわれました」
と、運転手は、車を走らせながら、十津川たちに、話してくれた。
「美女高原の何処で、彼女を降ろしたのかね？」
十津川が、きいた。
「美女ケ池の傍ですよ」

その勢いに中村の方が、びっくりしてしまった。
「ご存知の女ですか？」
「こちらで探していた女なんですよ」
「前に、近くで殺されていた小山淳一郎と、関係のある女ですか？」
「それは、わかりませんが、ひょっとすると、手掛りになるかも知れないと思って、探していた女性なんです。詳しいことは、そちらへ行って、説明します」
と、十津川は、いった。
十津川は、亀井刑事を連れて、その日のうちに、高山署に、やって来た。
十津川と、中村は、再会のあいさつを交わしてから、お互いの情報を交換し合った。
「彼女は、市内のIホテルに、十一月六日から、泊っていました。八日に、外出して、戻って来ないので、心配していたということです」
と、中村は、いった。
「六日から、彼女は、高山へ来て、何をしていたのか、わかりますか」
と、十津川が、きいた。
「今、それを、調べているところです。ホテルの話では、毎日、出かけていたといいますから、何かを調べていたんじゃないか、何かを、探していたんじゃないかと、思っているんです」
「殺されていたのは、美女高原だったわけですね？」

と、十津川が、亀井にきいた。吐く息が白くなる。

「二つ考えられますね。恋人の久保が、ここへ来ているという噂を聞いたからか、それとも、ここで殺された小山のことを調べに来たかです」

「第一の場合は、考えにくいね。もし、久保が、この美女高原にいるということなら、高山市内で、いったんホテルにチェック・インして、その翌日ということはせず、まっすぐ、ここへ来たんじゃないかな。だから、後者の場合だと思うよ」

と、十津川は、いった。

「そうすると、久保が、日頃、小山のことを、彼女に話していたということになるんじゃありませんか？」

「それさ」

と、十津川は、自然に、大きな声になった。

十津川は、続けて、

「もしカメさんの考えが、当っているとすれば、久保と、小山は、同じ組織に傭われていたことになってくる。そして、小山の方は、どうだったか知らないが、久保は、小山が、同じ仕事をしていると、知っていたんだと思うね。そして、小山のことを、東くみ子に話した。彼女は、それを覚えていて、久保が、消えてしまったあと、小山に会って、彼のことを聞きたいと思っていたんじゃないかな」

「じゃあ、そこで、私たちも降ろしてくれ」
と、十津川は、いった。
「他に、彼女が何かいわなかったかね？」
亀井が、運転手に、きいた。
「そうですねえ。高山市内から、美女高原まで、あまり交通の便がよくありませんからね。そんなことを話してたら、レンタ・カーでも借りようかみたいなことを、いってましたよ」
「レンタ・カーをね」
「市内から、美女高原へ行く時は、タクシーがすぐ拾えますが、帰りのタクシーを拾うのが、大変ですからね。今日は、お待ちしていましょうか？」
「いいよ、今日は、帰って」
と、十津川が、いった。
二人は、美女ケ池の近くで、タクシーを降りた。
冬場の高原の池は、ひっそりと、静まり返っている。先日、来た時は、釣人がいたのだが、今日は、その姿もない。あの時よりも、一層、風が冷たくなっているからだろう。
十津川と、亀井は、風の当らない場所を選んで、そこから、池の面を見つめ、池の畔にあるロッジを見た。
「東くみ子は、なぜ、ここへ来たと思うね？」

事件について、いろいろと、聞いたそうです」
「やっぱり、そうですか」
十津川は、納得した顔になった。そうでなければ、おかしいと、思うのだ。
「恐らく、被害者は、他の人たちにも、殺人事件について、聞いて廻ったと思いますから、引き続き聞き込みをやってみます」
と、中村は、いった。
「私たちは、高山市内で、レンタ・カーの営業所を当ってみます。東くみ子が、レンタ・カーを借りた可能性があるので」
十津川が、いうと、中村は、
「すると、運転免許証は、犯人が盗んで行ったことになりますね？」
「身元を隠すためと、或いは、彼女が、レンタ・カーを借りていたことを、知られたくなかったからだと思います」
と、十津川は、いった。
十津川と、亀井の二人は、しばらく美女高原にいてから、丁度、市内に戻るタクシーがあったので、それに、乗った。
二人は、東くみ子が泊ったというIホテルにチェック・インしてから、電話で、片っ端から、市内のレンタ・カーの営業所に、当ってみた。

「ところが、その小山が、美女高原で、殺されていることを、知った――」
「そうだ。ひょっとすると、恋人の久保にも、同じ運命が待ち受けているんじゃないかと、くみ子は、考えたと思うよ。そして、美女高原へ行けば、何かわかるかも知れないと考えて、ここへやって来たんだろう」
と、十津川は、いった。
「彼女を殺したのは、同じ犯人ですかね？」
「多分ね。小山を殺した人間が、東くみ子を、危険な存在だと考えて、刺殺したんだと思うね」
「正面から、胸を刺されていて、他に、外傷はないそうですから、油断しているところを、いきなり、やられたんだと思いますね」
「そうだね。犯人と、話をしていたのかも知れない。そして、相手を信用していたんだ」
と、十津川が、いった時、中村警部が、声をかけながら、近づいて来た。
「彼女のことで、少しわかったことがあります」
と、中村は、声を弾ませて、いった。
「どんなことですか？」
「あそこのロッジの従業員で、昨日休んでいた者がいましてね。今日は、来ていて、被害者と、話をしたというのです。被害者は、前日にも、ここに来ていまして、その従業員に、例の殺人

「それは、警察に、頼んだ方がいいですよ」
と、十津川は、すすめておいて、営業所を出た。
「問題の車は、犯人が、乗って行ったんじゃありませんか？」
と、亀井が、いった。
「そうだろうね。他には、ちょっと、考えられないよ」
と、十津川も、いった。
もし、そうだとすると、犯人は、美女高原に、自分の車では、行かなかったことになる。タクシーで行ったか、或いは、被害者東くみ子のレンタ・カーに同乗して行ったのだろう。
東くみ子が、殺されたのは、八日の午後九時過ぎだという。
犯人にしてみれば、美女高原からの足がなかったろうから、被害者のレンタ・カーで、逃げるより仕方がなかったのかも知れない。
「犯人が、タクシーで、美女高原に行ったとは、考えにくいな」
十津川は、いった。
「なぜですか？」
と、亀井が、きく。
「犯人は、最初から、東くみ子を殺す気で、ナイフを持って、美女高原に行ったと、思われるからだよ。そうだとすると、人情として、タクシーを使って、運転手に顔を見られるのは、嫌

その結果、高山駅近くの営業所が、東くみ子に、車を貸したことがわかった。

十津川と亀井は、すぐ、その営業所に、出かけて行った。

日産系の営業所で、東くみ子には、白のブルーバードを、七日の午後三時に、貸したという。

七日の午前中に、くみ子は、タクシーで、美女高原へ行っているから、市内に戻ってから、レンタ・カーを、借りたのだろう。

「彼女は、何日の予定で、借りたんですか？」

と、十津川は、担当者に、きいた。

「一応、四十八時間です」

「すると、もうその時間は、過ぎていますね」

「それで困っているんですよ。ニュースで知ったんですが、あの人は、美女高原で殺されてしまったというし、お貸ししたブルーバードが、今、何処にあるか、わからないんですよ」

と、担当者が、いった。

「すると、美女高原には、なかったんですか？」

「ニュースを見たんで、すぐ、行ってみたんですが、見つかりませんでした。それで、市内のIホテルに、泊っていらっしゃると聞いたので、ホテルにも、当ってみたんですが、あそこにも、車はありませんでした。警察に電話して、探して貰おうかと、考えているんですよ」

と、担当者は、本当に、困惑した顔で、いった。

二人は、その足で、高山警察署に行き、美女高原から帰って来た中村に、自分たちの考えを、伝えた。

中村も、乗り気になって、

「すぐ、ブルーバードの手配をしましょう。それから、高山市内から、美女高原にかけて、被害者か、そのブルーバードを、見た者はいないか、聞き込みをやらせます。もし、彼女と一緒にいた人間がわかれば、それが、犯人ということになりますからね」

と、声を弾ませた。

「前の小山淳一郎殺しについては、その後、何も、わかりませんか？」

と、亀井が、きいた。

中村は、急に、難しい顔になって、

「残念ながら、ほとんど、進展はありません。いくら聞き込みをやっても、被害者が、誰かと一緒だったという証拠は、つかめないんです」

と、いった。

「確か、小山は、高山市内の旅館に四日間いたんでしたね？」

「そうです。十月三十日に来て、十一月二日までいました。小山は、三十日は、雨の中を出かけ、三十一日と一日も、高山市内や下呂温泉を、元気に見物して廻っています」

「そして、一日の午後、旅館気付で、小山に、速達が来たんでしたね？」

だと思うんだよ」

「その気持は、わかりますね」

「とすると、残るのは、犯人が、東くみ子のレンタ・カーに、一緒に、乗って行ったというケースだよ」

と十津川は、いった。

「別の見方をすれば、八日には、犯人が、彼女と、接触したということになりますね。彼女の方が、相手を犯人とは知らずに、接触したということも、考えられますが」

「カメさんのその考えは、正しいと思うね。犯人は、美女高原で、初めて、東くみ子と出会ったんじゃなくて、その前に出会って、彼女の車で、現場に行ったんだ。だからこそ、彼女は、油断して、無警戒でいたんだと、思うからね」

「と、すると、犯人と東くみ子が一緒のところを、高山市内から、美女高原までのどこかで、誰かに、見られている可能性がありますね」

亀井は、眼を輝かせて、いった。

「もう一つ、期待できるのは、問題のレンタ・カーが、何処で、見つかるかということだよ。犯人が、そのレンタ・カーで、美女高原から逃げたことは、まず、間違いない。車が見つかった場所から、犯人の足取りを追えるかも知れないよ」

と、十津川は、いった。

「まるで、犯人がやってくるのを、待っていたみたいですね」
と、十津川が、いう。
「そうなんです。考えてみると、小山は、まるで、殺されるために、高山にやって来たみたいなものですよ」
と、中村は、いった。
確かに、その通りだと、十津川も思った。
ある組織に、小山は、傭われていた。その組織の指示で、彼は、高山にやって来た。自分が、殺されるとも知らずにである。
高山署におかれた捜査本部を出たところで、十津川は、亀井に、
「小山は、ただ、高山に行けといわれて、行くかな？」
と、きいた。
「どういうことですか？」
「小山が、殺されたのは、彼が、元刑事の本能で、組織のことを、調べ出したためだと、推理した」
「そうです」
「それが、危険なことは、小山だって、知っていた筈だろう？」
「もちろん、知っていたと思いますよ。彼は、抜け目のない男ですから」

「そうです。しかし、その手紙は、灰皿で焼却されていました。差出人の名前はなかったと、旅館の者がいっているので、誰からの手紙か、わからんのです」

「小山が焼却したのは、そう指示されていたからかも知れませんね」

「われわれも、そう思っています」

「そのあと、小山は、仲居さんに、美女高原のことを聞いた――」

「そうです。バンガローがあるかとも、聞いています」

「そして、十一月二日の午後四時に、タクシーを呼び、それに乗って、美女高原へ行ったというわけですね？」

「その通りです。問題の速達が、焼却されずに残っていれば、何か、手掛りがつかめるかも知れないと、思うんですが」

中村は、口惜しそうに、いった。

「小山は、なぜ、二日間、意味もなく、ぶらぶら、市内見物をしていたんでしょう？」

と、亀井が、きいた。

「そこが、私にも、わからんのですよ」

と、中村は、困惑した表情で、

「市内の聞き込みをやりましたが、間違いなく小山は、ぶらぶら市内見物をしているんです。喫茶店で、一時間余り、ぼんやり過ごしたりもしています」

「ええ」

「もし、これな、当っているとすると、小山を尾行していた人間は、同じ旅館に泊った可能性があるわね」

「それを、確かめてみましょう」

と、亀井は、いった。

二人は、小山が泊ったという旅館に行き、そこの女将に会った。

小山が、泊った時のことを聞くと、女将は、

「予約はなさっていませんでしたわ。なんでも、お連りのあづま旅館さんが一杯だったので、うちへ来たとか、おっしゃっていましたわ。それに、あづま旅館さんの玄関が見える部屋がいい、と、おっしゃって――」

「それは、間違いありませんね？」

「ええ、ですから、二階の端のお部屋に、ご案内しましたわ」

と、女将は、いった。

小山を尾行して来た人間は、連りのあづま旅館にいたらしい。

二人は、女将に礼をいい、すぐ、あづま旅館に、行ってみた。

警察手帳を見せ、十月三十日に、チェック・インした客の名前を教えて欲しいと、頼んだ。

旅館の主人は、その日の宿泊者名簿を、見せてくれた。

「とすると、ただ、高山に行けといわれたら、警戒するんじゃないかね？」

「そうですね。私が、小山の立場でも、やはりくちに、高山へ行けといわれれば、警戒します」

「だが、小山は、警戒しなかったんだ」

「何かの仕事を、小山に命じたんじゃありませんか？　いつものように、金になる仕事をです」

と、亀井は、いった。

「どんな仕事だと思うね？」

と、十津川が、きく。

亀井は、しばらく考えていたが、

「ある人間の尾行を頼まれたというのは、どうでしょうか？」

「尾行か」

「東京から、ある人間を尾行してくれと、頼まれる。報酬は莫大です。小山は、喜んで、その仕事を引き受けたんじゃないでしょうか？　その人間は、新幹線で、名古屋へ行き、高山本線で、高山へ来て、市内の旅館に入った。尾行して来た小山は、結果として、高山に、来てしまったことになります」

「面白いね。小山は、旅館に入り、東京にいる報酬の人間に、報告する。相手は、速達で指示を送るから、その通りに動いてくれという」

第三章　消えた男

1

「そうですねえ」
と、旅館の主人は、しばらく考えていたが、
「年齢は、四十歳代だと思いましたね。落ち着いた人でしたよ。物腰も丁寧で、高山には、前から、来たいと思っていたと、おっしゃっていましたね」
「顔は、覚えていますか？」
と、十津川は、きいた。
「どの程度にといわれると困りますが、また会えば、わかりますね」
「ご主人以外にも、彼に会った人間はいるわけでしょう？」
「ええ。うちで働いている従業員も、会っていますよ」

この日、チェック・インした客は、三人だった。カップルが一組と、男が一人である。

カップルは、住所が、大阪になっていて、男は、東京の住所だった。

その男の名前は、木田清人となっている。

カップルは、一週間、滞在していたが、木田の方は、小山が殺された十一月二日に、出発していた。

「この木田という客のことを、何でもいいから、話して下さい」

と、十津川は、いった。

にある公衆電話を、お使いになっていましたね。たまたま、それを見たので、部屋の電話でも、市街に掛けますよと、申しあげたんですが」

「だが、それでも、外の公衆電話を、使っていたということですか？」

「そうなんですよ。そのあと、もう一度、外の公衆電話で、お掛けになっているのを、見ましたね」

と、旅館の主人は、いった。

「二日後、彼は、出発して行ったんですが、それは、予定通りだったんですか？　それとも、急に、出発して行ったんですか？」

と、十津川は、きいた。

「最初、二日間ということだったんですが、途中で、三日間ということになりました。高山が、気に入ったので、一日、延ばしたんだと、おっしゃっていましたね」

「公衆電話で、何処かへ掛けたあと、一日、延ばすと、いったんですか？」

「さあ、それは、どんな電話をなさったのか、わかりませんから。とにかく、二泊三日で、お帰りになりました」

「美女高原で、死体が発見されたことがありましたね。その前日に、出発したんでしたね？」

十津川は、確認するように、きいた。

「そうです」

「それでは、あとで、似顔絵を作るのに、協力して下さい」
「あのお客さんが、何か、したんですか？　いい方だと、思っていたんですが」
「今のところ、ただ、どんな人間だったか、それを知りたいだけです。ここに着いてから、どんな様子だったか、教えて欲しいのですよ」
と、亀井が、頼んだ。
「お着きになった日も、翌日も、市内の見物に、お出かけになりましたよ」
「見物のあと、何かいっていましたか？」
「以前に、京都にお住みになっていたことがあるとかで、京都の良さが、よく残っている町だねと、おっしゃっていましたよ」
「京都のね。外から、電話が掛ってきたことは、ありませんか？」
と、十津川が、きいた。
「いや、それは、なかったですが、木田さんの方から、外へは、お掛けになっていましたよ」
「何処へですか？」
「さあ、そこまでは――」
「しかし、記録は、残っているわけでしょう？」
と、亀井が、眉を寄せて、きいた。
「お部屋の電話を、お使いになったのなら、記録に残りますが、なぜか、あの方は、うちの横

「どんな風にですか？」
「時々、隣りを、見ていらっしゃったんですよ。それだけですけどね」
と、相手は、いった。
このあと、旅館の主人と、女子従業員の二人に協力して貰って、木田という男の似顔絵を作ることにした。
その作業の最中に、女子従業員が、ふと、
「あの方、頭は、かつらだと思いますわ」
と、いった。
亀井が、眼を光らせて、
「それ、間違いありませんか？」
と、彼女を見、旅館の主人を見た。
「そういえば、髪の毛が、妙に黒かったですねえ」
と、旅館の主人も、いった。

2

木田の似顔絵が、出来あがった。

「出発する時の様子は、どうでした？」
と、亀井が、きく。旅館の主人は、当惑した顔で、
「どうといわれますと？」
「何か心配そうだったとか、ニコニコしていたとかですが」
「普通でしたよ。でも、多少、緊張しておられたかも知れません」
「どうして、そう思われるんですか？」
「会計の時、簡単な計算を間違われましたから。二万八千四百円ということで、三万円を出されたんです。それで、千六百円のお釣りを差しあげたんですが、二千六百円じゃないかと、しつこく、いわれましてね。説明しましたら、納得して下さったんですが、何か、他のことを、考えられていたような気がしましたね」
と、旅館の主人は、いうのだ。
十津川には、その時の状態が、はっきりとはつかめないのだが、相手が、何か他のことを考えていたようだというのは、多分、本当だろう。
「他に、何か、木田が、気にしていたことは、ありませんか？」
と、亀井が、きいた。
相手は、また、ちょっと考えていたが、
「そうですねえ。隣りの旅館のことを、気にしていらっしゃったみたいですよ」

「暴力団に関係があるでしょうか？」
「殺しに、馴れているからかね？」
「そんな感じがするんですが、この男自体は、暴力団員という顔立ちではありませんね」
「とにかく、東京に戻ったら、四課に見て貰うよ。暴力団員なら、すぐ、わかるだろう」
と、十津川は、いった。
「もう一つ、小山さんを殺した犯人は、なぜ、殺人の現場に、この高山と、美女高原を選んだかが、知りたいと、思いますね」
「犯人に、土地カンがあったかな」
「それとも、犯人が、アリバイを作るのに便利だったのかも知れません」
「なるほどね。その場合も、犯人は、高山と美女高原について、よく知っていたことになる」
と、十津川は、いった。
飛騨高山は、旅人にとって、魅力的な土地である。小京都といわれているし、近くに、白川郷があるし、下呂温泉もある。
だが、美女高原まで行く人は、少ないのではないか。十津川にしても、高山は、よく知っているが、美女高原は、初めて聞く地名だった。前に、高山に来たときも、美女高原の名前は、耳にしなかった。車で、二、三十分で行けるのにである。
逆にいえば、それだけ、美女高原が、殺人を犯すには、都合がいい場所ということでもある

中年の落ち着いた顔立ちである。どちらかといえば、美男子の方だろう。鼻は高く、色白で、俳優のKに似ていると、女子従業員はいった。Kは、渋い中年ということで、人気がある。確かに、似ている。

身長は、一七三センチくらい。痩せた感じだったともいう。そうした証言を、メモし、十津川は、似顔絵に、添付することにした。

「この男は、いったい、何だったんですかね？　単に、小山さんをおびき出すエサだったんでしょうか？　それとも、殺しに、手を貸していたんでしょうか？」

亀井が、似顔絵を見ながら、十津川に、きいた。

「カメさんは、どう思うんだ？」

十津川は、逆に、きいた。

「単なるエサにしては、油断のならない顔をしていますね。それに、もし、単なるエサにしても、この男は、自分が、どんな役割りを持っているか、知っていた筈です。多分、小山さんが、殺されることも、知っていたと思います。そうなると、手を下さなくても、殺人の共犯ですよ」

と、亀井は、いった。

「確かに、カメさんのいう通りだ。この男の素性がわかれば、問題のグループの姿も、ある程度、浮んでくるかも知れないな」

と、十津川は、いった。

高山署でも、十津川たちの作った似顔絵をコピーして、高山市内の聞き込みを、行ってくれた。その結果を、すぐ、十津川に、知らせてよこした。

問題の男は、二日間にわたって、市内見物をしたと考えられ、そのうち、上三之町の有名な喫茶店で、長時間、時間を潰したことが、わかったという。

この店は、アンティックなことで、観光客に親しまれており、彼は、この店が気に入ったのか、二日間、一時間から、二時間近く、コーヒーを飲み、ケーキを食べていた。

次に、彼が、認められたのは、市内を走る人力車である。観光客用に走っている人力車に、彼は乗っている。梶棒を握ったのは、三林という男だったが、彼の証言によると、彼をおろしたあと、もう一人の男が、千円札をくれて、何処を廻り、乗っていた男が、どんな様子だったか、しつこく聞いたという。どうやら、質問した男は、殺された小山らしい。

人力車の三林は、学生時代、東京にいたので、走りながら、問題の男と東京のことを話したという。その時、男は、自慢げに、現役で、国立のT大に合格したといったということだった。

十津川は、この会話を、重視した。

用心深く、行動していても、ひょっとしたことで、本音を、洩らすものだからだ。それに、相手は、二度と会わぬだろう人力車の引き手である。ポロリと、本当のことを、いってしまった可能性があった。

十津川と、亀井は、すぐ、T大の学生課に飛んでいった。

だろう。

観光地として有名な高山なら、警戒心を起こさずに、誘い出すことができる。そして、その近くには、自然が豊富で、他人に見られずに、殺人ができる場所があるのだ。特に、今の季節は、あの高原は、閑散としている。若い女性たちが、歓声をあげているテニスコートの傍に、ひっそりとした、人の気配のない森が広がっている。しかも、名前は、美女高原と、魅力的だ。

「カメさんは、美女高原という名前を、前から知っていたかね？」

と、十津川は、きいた。

「いえ。全く、知りませんでした」

「今度、来てみて、どんな感想を持ったね？」

「そうですねえ。十一月ということもあったでしょうが、魅力的な名前の割りに、寂しい場所だと思いました」

「犯人も、同じことを考えて、あそこで、小山を、殺したのかも知れないな」

と、十津川は、いった。

翌日、十津川と、亀井は、東京に帰り、捜査四課に、木田の似顔絵を見て貰った。

しかし、暴力団の人間にはいないという返事だった。十津川は、予想していたことだったから、別に、失望はしなかった。似顔絵の男は、一見して、暴力団員とは、思えなかったのだ。

とにかく、一つずつ、可能性を潰していけば、必ず、木田という男の身元が、割れてくるだろう。

と、十津川は、微笑した。人間は、偽名を使う場合、全く架空の名前を考えることは、まれで、自分の名前から、一字とったり、友人の名前を借りることが多い。この考えに従えば、木田清という友人がいて、それからの連想で、木田清人とつけたということは、十分に、納得できるのだ。

「この人の消息は、わかりますか？」

と、十津川は、早川勇の写真を、職員に示した。

「調べてみましょう」

と、相手は、いい、コンピューターにかけてくれた。

「卒業後、N銀行本店に就職していますね。五年後、同じ系列のN商事に行っています。その後のことは、入っていませんから、今でも、N商事にいるんじゃありませんか？」

と、職員は、いった。住所は、渋谷区内のマンションになっていて、電話番号も、教えられた。

十津川は、部屋にあった電話を借りて、そのナンバーにかけてみた。しかし、案の定、通じない。

十津川は、早川勇を含めた、何人かの同窓生の住所と、勤務先を教えて貰い、礼をいって、T大を出た。

十津川は、そこで、似顔絵を見せ、四十二、三歳という年齢を、いった。
「木田と名乗っていますが、これは、多分、偽名だと、思っています」
「四十二、三歳というと、二十年ほど前に卒業ということになりますね」
と、職員は、いいながら、その前後、三年の卒業生名簿を、出して来てくれた。
千名を越す人数である。十津川と、亀井は、名簿にのっている写真を、一人ずつ、見ていった。有難いことに、すでに、大人の顔立ちになっているから、四十代になっても、それほど、変ってはいないだろう。
職員が、コーヒーをいれてくれた。それを、飲みながらの作業だった。
「警部。これじゃありませんか」
と、亀井が、急に、手を止めて、十津川を、呼んだ。
一枚の写真に若い男の顔が、写っている。
「似ているね」
と、十津川も、肯いた。そこに書かれている名前は、木田ではなく、早川勇だった。
「面白いことに、同期生の中に、木田という名前が、ありますよ」
と、亀井は、いった。なるほど、同じ名簿に、木田清という名前があった。顔は、全く違っている。
「面白いね」

いたずらしようとしましてね。抵抗されたので、殴りつけ、負傷させてしまったんです。相手が怒って、訴えましてね」

「それで、馘ですか？」

「ええ。うちのような会社では、信用が第一ですから」

「その時、彼は、独身だったのですか？」

「いや、結婚していました。子供もいましたよ。なんでも、夫婦ゲンカをして、奥さんが、子供を連れて、実家に帰っていたようです。それで、むかむかしていたんでしょうが、その後、離婚したと聞いています」

と、中野は、いった。

「ここを辞めてから、何をしているか、ご存知ですか？」

「同期の仲間で、心配しているんですが、わかりません。ただ、友人の一人が、二年前の春頃、早川に、会ったといっていましたね。なんでも、その時、都内の興信所で働いていると、いっていたそうです」

「興信所ですか？」

「ええ、小さな事務所らしいですがね」

と、中野は、いった。

十津川は、彼に、似顔絵を見せた。中野はじっと見ていたが、小さく笑って、

3

十津川は、念のために、早川がいたというN商事に、廻ってみた。
思った通り、早川は、すでに、辞めていた。四年前である。
十津川たちは、早川の同僚で、現在営業第三課長の中野という男と、会った。
「非常に優秀な男でしたよ。恐らく、あのまま勤めていたら、私より先に課長になっていたと思います」
と、中野は、いった。
「すると、何かあって、辞めたんですか？」
と、十津川は、きいた。
「いわゆる不祥事を起こしたんです。まあ、気の迷いでしょうね」
「どんなことですか？」
「いわなければいけませんか？」
「いって貰いたいですね」
「これは、新聞にも出てしまったので、構わないでしょう。酔っていたからだと思いますが、彼は、夜、自宅マンションのエレベーターの中で、同じマンションに住む、二十代のＯＬに、

「今いったように、興信所で働いているが、給料が安いので、独立したいといったことです。それから、離婚したことも、いっていましたね」
「その後、連絡はありませんか？」
「今年の夏に、電話がありましたよ」
「どんな電話ですか？」
と、亀井が、きいた。
「それが――」
と、木田は、微笑して、
「やたらに、景気のいい話でしたね。ハワイに、別荘を買いたいと思っている。買ったら、招待するみたいなことを、いってましたね」
「地下鉄で会った時は、興信所を辞めたいと、いっていたんでしょう？」
「そうですよ。どうなったのかと思いましてね。宝くじにでも当ったのかって聞いたら、笑っていましたね。その後、連絡は、ありません」
「住所とか、電話番号を、聞きましたか？」
と、亀井は、きいた。
「ええ。聞きましたよ」
「そしたら？」

「髪の毛は、もっとうすかったですよ」
「すると、かつらをかぶっていると、思われますか？」
「急に、こんなに、ふさふさすることは、あり得ないでしょう？」
「そうですね」
と、十津川も、微笑した。
次に、十津川たちは、木田に会うことにした。
彼は、現在、通産省の課長だった。彼は、十津川から、話を聞くと、苦笑して、
「私の名前を、使ったんですか」
「一字だけ、付け加えていますがね。現在、早川さんが、何をしているか、わかりますか？」
と、十津川は、きいた。
「神田の興信所にいたのは、知っているんですよ」
「何という興信所ですか？」
「ＪＲの駅前にある興信所です。確か、雑居ビルの三階でしたよ。ただ、早く、独立したいとは、いっていましたね」
「いつ、会われたんですか？」
「去年の正月でした。十日頃でしたかね。偶然、地下鉄の中で会ったんです」
「その時、どんな話をされたんですか？」

「所長に聞かれると、まずいことですか？」
と、十津川は、コーヒーを頼んでから、山田に言った。山田は、疲れたような顔で、
「まあ、そんなところです」
「あなたは、早川さんのことを、よく知ってるんですか？」
「お互いに、あの事務所を辞めたいと思っていましたからね」
山田は、そんなことをいう。なるほど、所長には、聞かせられないことだろう。
「給料が安いからですか？」
と、亀井が、興味を持って、きいた。
「歩合制でしてね。八十パーセントは、事務所に取られるんですよ。バカらしいから、早川と、二人で、いつも、早く辞めたいなと、いっていたんです。僕は、いまだに、辞められずにいますがね」
山田は、自嘲的な笑いを口元に浮べた。
「早川さんは、辞めたんですね？」
「そうです」
「もっと、いい仕事が見つかったということですね？」
と、十津川が、きいた。
「そうです」

「教えてくれないんですよ。それで、心配になりました。妙な仕事に手を出しているんじゃないかと、思いましてね」

と、木田は、いった。

十津川と、亀井は、その足で、JR神田駅前にあるという興信所に、廻ってみた。

木田のいった通り、雑居ビルの三階の窓ガラスに、「中央興信所」と、書かれていた。

所員、四、五人の事務所である。十津川たちは、所長に会って、話を聞くことにした。五十代の所長は、元、神奈川県警で働いていたということで、十津川に、気持よく、話してくれた。

「早川君は、去年の暮にやめました。突然でしたね」

「今、何をしているか、ご存知ですか？」

と、十津川は、きいた。

「私は、知りませんが、山田君が、知っているようです」

と、所長はいい、山田という所員を呼んでくれた。

色の浅黒い、というよりも、どす黒い感じの顔をした男だった。年齢は、五十歳くらいだろうか。

山田は、ちらりと、所長に眼をやってから、

「外で話したいんですがね」

と、十津川に、いった。

十津川は、彼を、ビルの一階にある喫茶店へ連れて行った。

は、百万単位だと、いっていましたね」
「つまり、ゆすりですか？」
十津川が、ずばりと、きいた。山田は、眉をひそめて、
「そんなに露骨にはいいませんでしたがね」
「だが、そういう仕事だと、あなたは、思われたんでしょう？」
「まあ、そうです」
「他に、何を、いっていましたか？」
「僕は、その時、大丈夫なのかと、聞きました。明らかに、法律に触れる仕事と思ったからです。そうしたら、早川は、笑って、大きな組織で、絶対に、安全なんだと、いっていましたね。それに、警察なんか――」
と、いいかけて、山田は、あわてて、口をつぐんだ。十津川は、苦笑して、
「警察なんか、絶対に、手を出せないと、いったんですか？」
「まあ、そうです」
「なるほどね。その時、誰か、個人の名前を口に出しませんでしたか？　その組織の一人とか、或いは、金を出させた有名人の名前ですが」
と、十津川は、きいた。
「しかし、それは――」

「今、彼が、どんな仕事をしているか、ご存知ですか？」
「だいたいのことは、知っていますよ」
と、山田はいい、煙草を取り出して、火をつけた。
「どんな仕事ですか？」
「実は、僕も、早川に、誘われたんです。面白くて、金になる仕事だといって」
「なるほど」
「僕が、OKを出せば、仕事の内容を詳しく話してくれたんだと思いますよ。ただ、どうも、法律に触れるような仕事らしいので、僕は、意気地がないから、二の足を踏んでしまいましてね。急に、早川は、僕から、遠ざかってしまいましたよ。連絡も、とれなくなったんです」
「電話番号を、知っていたんですか？」
「ええ。教えてくれたんですよ。もし、OKする気になったら、連絡してくれって。断ったあと、もう一度、電話したら、もう、その電話は使われていないということになっていたんですよ」
山田は、肩をすくめるようにして、いった。
「それで、どんな仕事だと、あなたに、いったんですか？」
と、亀井が、きいた。
「金のある有名人から、金を出させる仕事だといっていましたね。有名人の中には、政財界の人間も入っている。この間は、君も知っている政治家から、何千万もの金を引き出した。報酬

山田は、急に、青ざめた顔になって、十津川を見た。
「大丈夫です。何も、洩らしませんよ」
と、十津川は、約束した。

4

収穫はあった。
早川勇という実名がわかったこともあるし、ゆすられていた二人の名前が、明らかになったことも、嬉しい。
「谷川孝太郎は、今、外遊に出てしまっていますよ」
と、帰りの車の中で、亀井が、いった。
「すると、まず、女優の千場かおりに会ってみることにするか」
と、十津川は、いった。
かおりの所属しているプロダクションに問い合せたところ、現在、Nテレビに出演中ということなので、そちらへ、廻ってみた。
クイズ番組の録画だった。マネージャーに話を通し、局内の喫茶室で待った。
一時間近く待たされてから、かおりが、マネージャーと一緒に、入って来た。不安気な表情

「怖いんですか？」

と、十津川は、きいた。山田の顔に、ふと、怯えの表情が浮んだからだった。

「別に、怖くはないですよ」

むっとした顔で、山田が、いう。

「それでは、口止めされたということですか？」

「その時、早川が、こういったんです。おれが喋ったことが、わかると、おれの命が危くなるから、絶対に、黙っていてくれってですよ」

「われわれから、洩れることは、ありません。だから、話してくれませんか」

と、十津川は、いった。

山田は、しばらく、迷っていたが、

「彼は、本当かどうかわかりませんが、二人の名前を出しましたよ。政治家の谷川孝太郎と、女優の千場かおりです」

「谷川孝太郎と、千場かおりですか」

十津川は、亀井と、顔を見合せた。谷川孝太郎については、やはりという気持があった。今年の総裁選で、突然、谷川がおりた時から、何かあると、思っていたのである。

「僕が話したことは、絶対に、内緒にして下さい。早川が危険なだけじゃなくて、僕も、危いですからね」

「私は、子供じゃないわよ」
と、かおりは、マネージャーを、睨んだ。
マネージャーが、あわてて、喫茶室を、飛び出して行った。
かおりは、それを、見送ってから、じっと、十津川を見て、
「さあ、何でしょうか？」
と、きいた。
「われわれは、今、ある組織のことを、調べています。有名人を、ゆすり、仲間を殺すようなグループです」
「それが、私と、どんな関係がありまして？」
と、かおりが、きく。
「あなたが、その組織にゆすられたことは、わかっているんです」
「とんでもない。そんなの嘘ですわ」
かおりは、大げさに、首を振って見せた。
十津川は、そんなかおりの顔を、見すえるようにして、
「われわれは、その組織を潰したいのですよ。あなたが、どんなことをタネにゆすられたかは、全く、興味がないんです。従って、それは聞きません。ゆすった相手のことを、話して下さればいいんです。協力して頂けませんか」

をしているのは、十津川と亀井が、刑事だからだろう。

十津川は、改めて、自己紹介をしてから、

「正直に、話して欲しいことがありましてね」

と、いった。

かおりは、三十二、三歳だろうか。年齢はよくわからない。四、五年前、売れに売れて、どのチャンネルを回しても、彼女がヒロインのドラマが流れていたものだった。CMにも、よく出ていた。最近は、ドラマでよりも、スキャンダルで、話題を賑わすことが多いが、それでも、有名女優であることに、変りはない。

「どんなことでしょうか？　まさか、刑事さんが、私のプライバシィに興味をお持ちとも思えませんけど」

と、かおりは、笑顔でいい、マネージャーに、

「おなかがすいたわ。いつものお弁当を持ってくるように、いっておいて」

と、頼んだ。

マネージャーが、動かずにいると、かおりは、

「早く頼んで来てよ！」

と、怒ったような声を出した。

「しかし、ボクがいた方がいいんじゃないかと思って」

約束ですから、聞かないで下さい」
「ええ。聞きませんよ。それから、どうなったんですか？」
「封筒の中には、その中の一枚の写真が、入っていましたわ。全部で五枚、一枚一千万円で買えといわれたんです。警察にいえば、マスコミに公表することも、書いてありました」
「それで、買ったんですね？」
「ええ。買いましたわ」
かおりは、肯いた。
問題は、その支払いですが、どんな方法を、とったんですか？」
と、亀井が、きいた。
かおりが、答えようとした時、マネージャーが戻って来た。彼が、何か話しかけるのを、かおりは、手で制して、
「あと、三十分、席を外しててよ」
と、いい、追い払った。
「申しわけありません」
と、十津川が、いった。
かおりは、怒ったような顔で、話を続けた。
「誰にも相談できないんで、ずいぶん、苦しみましたわ。でも、私は、負けるのが嫌いなんで

「知りませんわ。他の方と、間違えているんじゃありません？」
「千場さん」
「――――」
「協力して頂けないと、あなたに、警察まで来て頂くことになってしまいますよ。そうなると、マスコミに、嗅ぎつかれますが」
「刑事さんが、脅迫なさるんですか？」
「いや、協力をお願いしているんです」
と、十津川は、いった。
しばらく、重苦しい沈黙が、続いた。かおりは、頭の中で、必死に、計算しているに違いなかった。警察に協力した方がトクかどうかをである。
「私のプライバシィには、触れないと、約束して下さる？」
と、かおりが、きいた。十津川は、肯いた。いい徴候だと思った。
「最初、今年の四月の十日に、手紙が来たんです」
と、かおりは、いった。
「どんな手紙ですか？」
「あるテレビ局の名前があったので、出演依頼かなと思ったんですけど、大違いでした。ある大きな事件に、私が関係している証拠写真を持っているというのです。その事件については、

「どうしたらいいんだと、聞きましたよ、男は。だから、私は、いってやりましたわ。ネガをくれるのは、もちろんだが、あんたの写真を撮る。それに、五千万円を渡すときのやりとりを、テープにとる。この二つを要求したんです」

と、かおりは、いった。

「それは、いい要求ですが、相手は、それを、呑みましたか？」

十津川は、半信半疑で、きいた。

「男は、驚いたみたいで、また電話するといって、いったん、電話を切りましたわ。翌日、何の連絡もなくて、私は、怯えました。怒った男が、ネガをマスコミに廻すんじゃないか、そうなったら、もう終りだと思ったんです。大人しく、五千万円払えば良かったのかと反省しました」

「しかし、また、連絡して来たんですね？」

「ええ。なぜか、私の要求を呑むといいましたわ。そして、私は、五千万円をバッグに入れて、男に会いに行きました。男とは、八王子の郊外で、会いましたわ。まず、声で、電話の主に間違いないことを確かめてから、彼の写真を撮りました。五千万円の話をして、それを、テープにも、とりましたわ」

「その時の男の様子は、どうでした？」

「ニヤニヤ笑っていましたわ。多分、五枚の写真をコピーにとってあるから、大丈夫だと思っていたんだと、思いますわ」

す。こんなことで、今までに築いた女優としての地位を、棒に振ってたまるかと、思ったんですよ。だから、五千万円は払うけど、二度と、脅かされないようにしたいと、思ったんです」

「それは、正しい処置の方法だと思いますね」

と、十津川は、いった。それなら、脅迫した相手の顔を見ている可能性もあると思ったからである。

「そのあと、相手は、電話して来たんです。私は、五千万は、払うけど、保証を要求しましたわ。絶対に、二度と、脅迫されないという保証ですわ」

「相手の声は、男でしたか？」

「ええ。中年の男の声でした」

「あなたが、保証を求めたら、男は、何といいましたか？」

「最初は、笑って、取り合おうとしませんでしたわ。とにかく、五千万円払えというんです。何かを、要求できる立場にいないんだともいわれましたわ。でも、私は、負けたら駄目だと思って、必死で、強く出ましたわ。もし、こちらの要求が入れられなければ、五千万円は払わないし、警察にいうと、いったんです。男は、ネガも渡すから、いいじゃないかと、いいました。でも、それじゃあ、安心できませんわ。何枚コピーしたかわかりませんもの」

「それで、結局、相手は、どうしたんですか？」

と、亀井が、きいた。

名前を、確認させただけとは、思えないんですがね」

と、きいた。

「ええ。相手のことを、沢山知っていればいるほど、安心の保証になると思ったんです。それで、頼んだ私立探偵に、お金を沢山渡して、なんでもいいから、男のことを調べて、報告してくれといいましたわ。もちろん、その理由は、いわずにですけれど」

「その報告書を、見せて貰えませんか」

と、十津川は、いった。

「どうするんですか？」

「早川という男のことを、少しでもよく知りたいからですよ」

「でも、彼が捕ったら、私のことが、わかってしまいますわ。協力できません」

「あなたのことは、秘密にすると、約束しますよ。われわれが追っているのは、殺人事件なんです。あなたが、過去に犯した件には、関心がありません」

と、十津川は、いった。これは、本心だった。

それが、かおりにもわかったとみえて、その日の夜、彼女のマンションで、問題の報告書を、見せてくれた。

それは、早川勇という男に関する身上調査であり、素行調査でもあった。

身上調査の方は、興味がなかった。彼が、どこの生れで、T大を卒業後、N銀行に入り、次

「あなたが、警察に訴えることはないと、確信していたんでしょうね」
「ええ。そう思いますわ」
「男は、名乗りましたか？」
「私が、聞いたら、山田太郎といってましたけど、そんなの、偽名に決ってます。私は、男の名前を知りたかったから、前もって、私立探偵を傭っておいて、私と別れたあと、男を、尾行して貰いましたわ」
「危いことをしましたね。尾行に気付かれたら、あなたも、危かったと思いますよ」
と、亀井が、いった。
「ええ。でも、おかげで、男の本当の名前が、わかりましたわ」
「早川ですか？」
十津川がいうと、かおりは、びっくりした表情になって、
「なぜ、知ってるんですか？」
「やはり、早川ですか？」
「ええ。でも、なぜ、知ってるんですか？」
「別の事件で、彼を追いかけているからです」
と、十津川は、いい、例の似顔絵を見せて、確認してから、
「早川について、あなたは、他にも、いろいろと、調べたんじゃありませんか？　私立探偵に、

十津川と、亀井は、かおりと別れると、その足で、中野のマンションに、行ってみた。
しかし、早川は、すでに、引越してしまっていたし、管理人に聞いても、よくわからない人だったという返事しか戻って来なかった。
翌日、十津川は、亀井を、熱海に行かせ、自分は、S銀行中野支店に、出かけた。
警察手帳を見せ、支店長に、四月十六日のことを、聞いた。
「あの男の方なら、覚えていますよ。何しろ、現金を、四千五百万円お持ちになって、振り込まれたんですから」
と、支店長は、いった。
五千万円を手に入れ、早川の取り分は、その一割ということだったのだろうか。
十津川は、その振込伝票の写しを見せて貰った。
振込人は、木田になっている。早川は、この頃から、木田という偽名を使っていたらしい。
振込先は、新宿西口にあるEビル三〇二の「財団法人・ヒューマン協会」になっていた。
十津川は、車で、この協会に行ってみることにした。
Eビルは、あった。しかし、その三階に、もう、財団法人・ヒューマン協会は、なくなっていた。
同じ三階に、事務所を持っている人間に、聞いてみた。
「ああ、そんな会社がありましたよ。職員は、三人か四人でしたね。何をやってるのか、よくわからなかったなあ」

に、N商事に移り、問題を起こして、退職した。そうしたことは、十津川のすでに知っていることだったからである。

十津川が、興味を持ったのは、早川が、五千万円を受け取ったあとの一週間の、いわゆる素行調査の方だった。

そこには、早川の一週間の行動が、克明に、記載されていた。

四月十五日から、二十一日までの尾行記録である。

十五日は、車で、八王子から、中野の自宅マンションに帰る。ニュー中野コーポ六〇八号室。

十六日の午後一時、大きなスーツケースをさげて、車に乗り、近くのS銀行中野支店に行く。

同日、夜、新宿のクラブ「めまい」に行き、遊ぶ。

十七日、午後、新宿のF自動車販売店へ行き、スポーツ・カーを購入する。それまで乗っていた中古車は、廃車にする模様。

十九日。スポーツ・カーが届き、ご機嫌で、乗り廻す。夜は、また、クラブ「めまい」で遊ぶ。

二十日、早朝から、スポーツ・カーに乗り、熱海の旅館「しおみ」に行く。温泉が好きらしい。

二十一日も、同旅館に宿泊。この日の午後二時に、五十歳ぐらいの男が、早川に会いに来て、一時間ほど、旅館にいて、帰る。名前不明。身長一六〇センチくらいで、痩せた男である。

これが、調査の要約だった。

でしたか？」

「そうですねえ。いつも三人で、たまに、一人来るのがいましたね。そいつが、社長だったのかも知れません。五十歳くらいで、眼つきが鋭くて、威厳がありましたよ。あの男が、印象に残っていますね。他の三人が、その男が来ると、びりびりしていましたから」

「顔を、覚えていますか？」

「もちろん、忘れられない顔ですからね」

「名前はわかりませんか？　他の社員は、何と呼んでいましたか？」

と、十津川は、きいた。

「社員は、社長か、会長と呼んでいましたね。確か、会長だったかな。名前は、わかりませんね」

「では、似顔絵作りに、協力して下さい」

と、十津川は、頼んだ。

また、一枚の似顔絵が、生れた。確かに、眼の鋭い、というより、険しい男である。身長は一六〇センチだというから、この年代の男としては、中背といったところか。

次に、十津川は、早川が購入したスポーツ・カーのことを、調べることにした。

国産のスポーツ・カーで、N社のものだというので、中野のN社の販売店へ、廻ってみた。

今年の四月に購入した人間の中に、間違いなく、早川の名前が、のっていた。車のナンバー

と、相手は、いう。

「ヒューマン協会は、いつ、引越して行ったんですか？」

と、十津川は、きいた。

「十一月になって、すぐですよ。突然、引越してしまったんです。正直にいって、驚きましたよ」

と、いう。

（小山が、美女高原で殺される直前ではないのか？）

と、十津川は、思った。

彼等は、自分たちが使っていた小山を、殺さなければならなくなった。多分、小山が、組織のことを、調べ始めたからだろう。殺せば、当然、警察が、捜査に乗り出してくる。いつかは、組織の存在に気付き、捜査の手が、伸びてくる。それを見越して、このビルから、姿を消してしまったのだ。

三人か、四人の人が働いていたといいましたね？

と、十津川は、きいた。

「そうですよ。みんな、妙に静かな連中でしたね。殆ど喋らないし、廊下で会っても、あいさつもしませんしね。気味の悪い連中だなと、思っていたんですよ。あいつらが、何かやったんですか？」

会って、話を聞きたいと思っているだけですよ。彼等のうち、特徴のある人間は、いません

松濤町の私邸に、会いに出かけた。

保守党の大物にしては、さほど、大きな邸ではない。谷川自身も、庶民性を売り物にしているのだが、邸の中は、贈り物と思われる陶器や、絵画で、飾られていた。いずれも、高価な感じのものばかりだった。

谷川は、和服で現われた。

「まあ、楽にしなさい」

と、谷川は、笑顔で、十津川たちに、椅子をすすめた。

「今日、お帰りだそうですね」

と、十津川は、まず、そんな、話し方から始めた。

谷川は、十津川が、何の用で来たのか、それを探るように、見つめながら、

「外の世界は、激しい勢いで変化しているのでねえ。それを、把握していないと、日本の進路を誤ってしまうからね」

と、いった。

「先の総裁選では、谷川先生が、選ばれると思っていたんですが、意外な結果でしたね」

「あれは、私や、渡辺君が、この辺で、わが党も若い世代にと考えて、若い三田村君を推薦したんだよ。党のため、日本のためを思ってね」

「その時に、いろいろな確執があったように、伺いましたが――」

も、登録されている。車体の色は赤。

十津川は、このナンバーを、各警察署に知らせた。見つけ次第、連絡してくれるように、頼むことにした。

熱海に行った亀井からも、夜になって、電話が入った。

「早川は、こちらでは、リラックスして、楽しんでいたようです。到着した日の夜は、芸者を呼んで散財しています」

と、亀井が、羨ましげに、いった。

「五百万の報酬を手に入れたんだから、当り前だろう。問題は、翌日、会いに来た男だがね。どんな男か、わかったかね？」

と、十津川は、きいた。

「年齢は、五十歳くらい。どちらかといえば、小さい感じですが、眼つきが鋭くて、怖かったと、旅館の主人は、いっています。名前は、わかりません」

「それが、連中のリーダー格だと思う。君の泊った旅館に、ファクシミリがあるかね？」

「ありますが」

「こちらで作った似顔絵があるから、それで、確認してみてくれ。これから、送るよ」

と、十津川は、いった。

次の日、十津川は、谷川孝太郎が、外遊から戻ったと知って、若い西本刑事を連れて、渋谷

と、十津川は、いった。
「二人とも知らんよ。不愉快だ。帰りたまえ」
と、いって、谷川は、席を立ってしまった。

5

二人は、外に出た。
「谷川が、嘘をついていると、思われますか？」
と、車に戻ってから、西本が、十津川に、きいた。
「正直にいうと、わからないな。死んだ小山や、早川たちは、リーダーの命令で、谷川孝太郎や、渡辺拳のことを調べた。恐らく、その私生活の部分をだろうね。今は、私生活も、政治家にとって、致命傷になる時代だからね。問題は、つかんだものを、どちらに、売ったかだな」
「と、いいますと？」
「当の谷川や、渡辺に売った方が、高く売れるか。それとも、対抗馬の三田村側に売った方が、儲かるか、どちらに決めたかだよ。結果的に、三田村が、総裁になったところをみると、そちらに、売ったと考えられるんだが、早川は、谷川をゆすったと、いっていたようだからね」
「ええ」

「十津川君」
「はい」
「君は、総裁選のことを話しに来たんじゃあるまい。何の用で来たのかね？」
と、谷川は、眉をひそめて、十津川を見た。
「実は、谷川先生に、見て頂きたいものがあって伺ったのです」
と、十津川は、いい、早川と、例のリーダーの似顔絵を、谷川の前に置いた。
「その二人に、お会いになったことは、ありませんか？」
と、十津川は、きいた。
「この二人が、どうかしたのかね？」
「有名人、この中には、政財界人も入っているのですが、その秘密をつかんで、脅迫している組織があるのです。その二人も、組織の人間です。ひょっとして、総裁選に絡んで、その二人が、先生を、ゆすりに来たのではないかと、思いましてね」
と、十津川は、いった。
谷川の顔が、赧くなった。怒りが、眼に表われていた。
「君は、私が、ゆすられていたというのかね？　こんなチンピラみたいな男に」
「そうはいっておりません。ただ、その二人にお会いになったことがないかと、思いまして。片方の男は、先生に会ったようなことを、口にしているのです」

「ただのあいさつで、谷川さんが、文句をいってくるかね？」
「例の事件で、谷川先生に、協力をお願いしに行ったんですが」
と、十津川は、いった。
「谷川さんが、関係している証拠でもあるのかね？」
「確証は、ありません」
「それなら、いきなり訪ねて行くのは、無礼じゃないか。お怒りになるのが、当り前だ。君は、自分の身分というものを考えたまえ」
「身分ですか？」
「そうだ。今後は、私の許可を得るようにしたまえ」
と、三上は、いった。
「わかりました」
と、十津川は肯いた。
自分の部屋に戻ると、熱海から、亀井が、帰っていた。
「例の似顔絵ですが、旅館の主人に見せたところ、間違いなく、訪ねて来た早川の客だそうです」
と、亀井は、いった。
「早川と、何を話していたかわかるかね？」

「組織としては、三田村に、売りつけたのかも知れないが、個人が、もっと金が欲しくて、コピーしたものを、谷川に、売りつけたのかも知れない。そう思ったので、谷川に、会ってみたんだがね」

と、十津川は、いった。

「反応は、どうでした？」

「谷川が、怒ったからね」

「だから、ゆすられたと？」

「あの老人は、不愉快な記憶を持っていることは、間違いないと、思うね。しかし、正直には、話してくれないだろう」

と、十津川は、肩をすくめた。

捜査本部に戻ると、すぐ、三上刑事部長に、呼ばれた。

（もう来たか）

と、覚悟して、部長に会うと、案の定、谷川から、抗議が来ていると、いわれた。

「総監も、心配しておられるんだ。なぜ、谷川さんに会いに行くのを、私に、いわなかったのかね？」

と、三上は、いう。

「ただのあいさつですから」

と、十津川は、いった。

「なぜですか？」

「探偵とか、刑事は、私もそうだが、謎があると、それを解明したいという職業病みたいなものを持っているんだ。そんな連中を傭えば、役に立つだろうが、同時に、自分を傭った人間のことを、知ろうとする。小山も、それで、殺されたのさ。他の人間も、同じ衝動にかられるだろうから、組織は、絶えず、危険にさらされるわけだよ」

と、十津川は、いった。

「とすれば、その中の一人を捕えられれば、いも蔓式に、全員を逮捕できる可能性がありますね」

と、亀井は、いった。

「それが怖いから、彼等は、いち早く、小山の口を封じたんだ」

と、十津川は、いった。

二日して、練馬区内の派出所から、問題のスポーツ・カーを発見したという連絡が入った。

十津川は、亀井の他、西本と日下の二人を連れて、練馬区東大泉に駈けつけた。

七階建のマンションの近くにある派出所に顔を出すと、そこの警官が、緊張した顔で、

「あのマンションの駐車場に、同じナンバーのスポーツ・カーが、とまっています」

「持主は？」

「それは、聞いてみたんですが、わかりませんでした。問題の男は、用心深く、振る舞っていたようで、早川が、浮かれて、芸者を呼んだりしたのとは、対照的だったみたいです」
「リーダーと、使われている人間の違いということかな」
と、十津川は、いった。
「連中の人数は、何人くらいなんですか？」
と、亀井が、きいた。
「事務所には、三人か四人の人間がいたというが、これは、指示を出すリーダーと、事務をやる人間だけだと思っている。その指示を受けて、有名人の秘密を嗅ぎ廻る人間が、何人いるのかはわからないね。使い捨てみたいにしていたとすれば、人数は、多いと思うね」
「私立探偵や、興信所の人間、それに、元警察官といった人間を、傭っているようですね」
「ああ、そうだ。いわば、調査のプロを集めているんだ。今の世の中は、マスコミが発達していて、秘密が金になる時代だからね。みんなが、スキャンダルを怖がれば、怖がるほど、連中は、楽に、金儲けが出来るんだ」
と、十津川は、いった。
「しかも、殺人をやるわけじゃありませんから、気安く、出来るんじゃありませんか」
「ああ。だが、今度は、自分たちを守るために、殺人をやってしまった。ミスをしたんだ。いや最初から、こうなるような組織だったのかも知れないな」

十津川たちが、なぎ倒される感じで、地面に転がった。
倒れた十津川の周囲に、粉々になったガラスの破片が、降ってきた。
後ずさりしながら、前方を見た。スポーツ・カーが、炎に包まれている。
「逃げろ！」
と、亀井が、叫んでいた。
四人の刑事は、駐車場から、必死で、離れようとした。ガソリンに引火して、二度目の爆発が起きた。
派出所の警官二人も、飛んできた。
「大丈夫ですか？」
と、声をかけてくる。
「私は、大丈夫だ。早く、消防を呼んでくれ」
「例の男は、どうなりました？」
「死んだと思うよ。とにかく、消防だ！」
と、十津川は、怒鳴った。
駐車場では、傍にとめてあった二台の車も、煙があがっていた。これでは、もはや、早川を助け出すことは、無理だった。
消防車が、やってきた。

「管理人の話では、中年の男だそうです。名前は、早川じゃありませんが、そちらでいう人相に合致しています」

と、警官は、いった。

「何階だ？」

と、亀井が、きいた。

「五〇六号室です。今、男は、部屋にいる筈です」

「よし。行こう」

と、十津川は、いった。

四人が、マンションの前へ進んで行ったとき、早川が、玄関から出て来て、駐車場に入って行くのが見えた。

早川が、スポーツ・カーに乗る。

「逃がすな！」

と、十津川が、叫んだ。

運転席に座った早川の顔に、狼狽の色が走るのが見えた。

あわてて、車をスタートさせようとする。

その途端だった。

耳をつんざく爆発音と共に、火柱が、立ちのぼった。

と、十津川は、三人の部下を励ました。
もう一度、徹底的に、部屋の中が、調べ直された。
三十分ほどした時、西本が、
「これは、何ですかね？」
と、十津川を、振り返った。
西本が、つまんでいるのは、厚いボール紙で作った奇妙な形をした破片だった。
青と、白に、塗りわけられている。
「ジグソー・パズルの破片じゃないか」
と、十津川は、いった。
「しかし、見つかったのは、これだけですよ。他の部分は、見つからないんです」
「裏に何か書いてあるぞ」
と、横から、亀井が、声をかけた。
その小さなボール紙の裏には、次の文字が、書かれていた。

〈――は、警〉

これだけだった。

消火が始まると、十津川たちも、傍に近づいた。ひょっとして、早川が、助かっていたらと、思ったからである。

だが、炎が消えたとき、十津川たちが見つけたのは、黒く焦げた死体だった。もはや、この男に、何かを聞き出すわけにはいかないのだ。

十津川と、亀井たちは合図をして、マンションの五階に、あがって行った。早川には、何も聞けなくなったが、彼の部屋には、何か、自分たちに話しかけてくる物が、あるかも知れないのだ。

鍵を叩きこわして、五〇六号室に入った。

2DKの部屋である。

テレビも、洋ダンスも、ベッドも、全てが真新しかった。それが、かえって、束の間の宿という感じだった。

十津川たちは、彼等の組織がわかるものを探した。

押入れをのぞき込み、洋ダンスの中身をぶちまけ、ベッドの下まで、探してみた。が、これといったものは、見つからない。

「ありませんね」

と、亀井が、疲れたような声を出した。

「いや、何かある筈だ。直接、連中の組織を明らかにするものでなくてもいいんだ。手掛りになるものでもいい」

第四章　ジグソー・パズル

1

十津川は、捜査本部に持ち帰った破片を、机の上に置いた。

〈――は、警〉

これを、どう読むかである。

これがジグソー・パズルの一片であることは間違いなかった。

多分、完成したものを、壁にでも掛けてあったのだろう。青と白に塗られているところを見ると、完成されたものは、海の景色といったものかも知れない。

早川は、その裏に、何か大事なことを、書き込んでおいたのではないのか。

「他の部分（ピース）を探してみてくれ」

と、十津川は、いった。だが、いくら、探しても、他の部分は、見つからなかった。

と、十津川は、いった。

二人は、可能性のある文章を、書き並べた。

1　Aは、警察官上りである
2　Aは、警察と関係がある
3　Aは、警察にマークされている
4　リーダーは、警察官上りである
5　リーダーは、警察にコネがある
6　ヒューマン協会は、警察に関係がある

この他に、いろいろなバラエティが、考えられる。例えば、「警察にマークされている」という言葉は、「リーダー」にも、「ヒューマン協会」にも、結びつくのである。

「しかし、早川たちは、警察にマークされていることは、知っていた筈だから、この文章は、あり得ないね」

と、十津川は、いった。

「Aという個人名か、リーダーが、警察官上りというのは、どうでしょうか？　これも、小山さんだって、うちにいたわけですから、警察官上りというのは、別に、秘密にはなっていない

早川を爆殺した人間は、それを、持ち去ろうとした。

だが、逃げようとしたとき、そのパズルが、ばらばらになってしまった。犯人は、必死になって、散らばった破片（ピース）を拾ったのだろうが、この一片だけを、見落としてしまったのだろう。

その点、早川が、ジグソー・パズルの裏に書いておいたのは、正解だったのだ。彼も、自分が、消されるのではないかという恐れを持っていて、ジグソー・パズルの裏に、書き残しておいたのではないか。

もし、そうならば、これは、一種のダイイング・メッセージの破片ということになる。

亀井も、破片を、のぞき込んだ。

「――は、のところには、個人名が、入るんでしょうね」

と、亀井が、いった。

「多分ね。だが、そうとばかりは、断定できないよ。『この組織のリーダーは』かも知れないし、『このヒューマン協会は』かも知れない」

と、十津川は、いってから、

「一番、大事なのは、『警』の方だな。これが、『警察』の警だとすると、いやでも、注目せざるを得ないね」

「警察ですか」

「どんな言葉が、想像されるか、考えてみようじゃないか」

〈A――は、警察とコネを持っている〉
〈リーダーは、警視庁の――と、親しくしている〉
〈ヒューマン協会は、警視庁の中にも、会員がいる〉

警視庁が、警察庁になるかも知れない。
「もっと、具体的な文章だったかも知れませんね」
と、亀井が、いった。
「具体的というと、どういうことかね？」
「例えば、警視庁捜査×課の誰と、個人名が書いてあったことも、考えられます」
「そうだな。そうだとすると、犯人が、早川を殺して、持ち去ろうとした理由も、わかってくるね」
と、十津川も、いった。
「もし、具体的な名前が、書いてあったとすると、われわれにとっても、大変なことですね」
亀井は、真剣な表情で、いった。
十津川も、表情を、かたくした。もし、「ヒューマン協会は、警視庁捜査一課の×××も会員である」とでも、書いてあると、それが、事実とすれば、容易ならないことになってくるのだ。

と、思いますが」

亀井が、いった。

十津川は、肯いて、

「カメさんのいう通りだ。リーダーが、警察官上りだとしても、そのことを、秘密にしているとは思えないし、むしろ、特別な技術があるということで、自慢にしているかも知れないからね」

「しかし、警部。この『警』は、私は、警察だと思うのです。『――は、警戒すべし』などというのでは、何のインパクトもありませんから、犯人が、持ち去ろうとはしないと思うのですよ」

「同感だね。何といっても、早川が、自分が万一の時、誰かに知らせたいと思って、書きつけておいた言葉だと思えるからね」

「組織にとって、公にされては、困ることだったことは、間違いありませんね」

「と、すると、どんな言葉になるのかな」

十津川は、考え込んだ。

二人は、さまざまな言葉を考え、書きつけていったが、これはというものだけを、残してみた。

残ったのは、次の文章だった。

「ありません」
「繋っているとしてだが、下の方の職員じゃないね。それなら、大きな衝撃にはならないし、連中にとっても、さほどプラスではないからな」
と、本多は、いった。
「そうです。どこどこの派出所の警察官の一人が、繋っていても、確かに、不祥事ではありますが、連中が、必死になって、隠そうとすることとは、思えません」
「すると、警察のかなり上の方か？」
「そうなりますね。だから、早川も、書き留めておいたんでしょうし、連中も、隠そうとするんです」
「まずいな」
と、本多は、いった。
「連中から、その人物に、金が渡されている可能性もあります」
「一緒に、部長に、会いに行ってくれ」
と、本多は、いった。自分一人では、処理しかねると、考えたのだろう。
二人は、三上刑事部長に、会った。
三上は、黙って、十津川の話を聞き、ジグソー・パズルの破片を見ていたが、
「君の勝手な想像じゃないのかね？　警察という字があっても、警察とは、限らんだろう？」

2

十津川は、問題の破片を持って、本多捜査一課長に、会った。
十津川が、自分と、亀井の心配を告げると、本多も、当惑した顔になって、
「それが、当っていれば、警察にとっても、大変なことだな」
「そうです。連中が、警察のどこかと繋(つな)っているとすると、捜査もやりにくくなります」
「その破片のことは、しばらく、伏せておいた方がいいね」
「私も、そのつもりです。マスコミが、どんな想像をめぐらすかも知れませんし、捜査に当る刑事たちも、動揺する恐れがあります」
と、十津川は、いった。
「問題は、連中と、警察のどこかが繋っているとして、そのどこかを、どうやって、探し出すかだな」
と、本多は、いった。
「或(ある)いは、警察の誰かということですね」
十津川は、付け加えた。
「何か思い当ることはないかね？」

います。われわれより先に、マスコミに嗅ぎつけられたら、何を書かれるか、わかりません」
「それは、わかるんだが――」
「お願いします」
と、十津川は、頭を下げた。
「何とか、調べてみるがね」
あまり期待しないで欲しいと、言外に匂わせるいい方を、三上はした。
それでも、十津川は、満足して、部長室を出た。冒険嫌いの三上にしてみれば、精一杯の約束に思えたからである。
二日後、十津川は、三上に呼ばれた。
三上は、険しい表情で、十津川を迎えると、
「私としては、あまり嬉しくない話だ」
「わかります」
「それから、今から話すことは、絶対に、内密にしておいて貰いたい。証拠が出るまではだ」
と、三上は、強い眼で、十津川を見た。
「当然です。約束します」
と、十津川は、いった。それでも、三上は、しばらく、迷っているようだったが、
「監察部に協力して貰って、何人かを調べてみた」

と、いった。

「もちろん、そうです。しかし、警戒せよといった言葉だったとすれば、連中は、早川を殺してまで、隠そうとはしないと、思うのですが」

「しかし、想像だけで、動き廻ったりすれば、いたずらに疑心暗鬼に、襲われて、混乱を招くだけだよ」

三上は、慎重ないい方をした。

「そうです。慎重にやらなければなりませんが、警察の上層部の誰かが、連中と、繋っているとすると、私や、十津川君の手には負えません。それで、部長に、調べて頂きたいと思ったのです」

と、本多が、いった。

三上は、当惑した顔で、

「私に、スパイを、やれというのかね？」

「そんなことは、いっていません」

「しかし、同じことだろう？」

「部長」

と、十津川は、言葉を強めて、

「もし、推測が当っているとすれば、一刻も早く、問題の人物を、見つけ出す必要があると思

で、払える筈のない部屋代だよ」
「そうですね。私でも、二十八万円の部屋代は払えません」
「だが、滝沢署長が、君たちの調べている連中と、繋っているかどうかは、わからん。証拠はないし、私は、関係がないと、信じている」
「私も、信じたいと思います」
「私が、調べたところでは、この滝沢署長だけだ」
と、三上は、いった。
「ありがとうございます」
「これが、彼の経歴だ」
と、三上は、滝沢博の略歴をメモしたものを、十津川に、渡してくれた。
滝沢博は、滝沢健一郎の一人息子で、現役で、国立大学に入り、卒業後、警視庁に就職した。二十八歳で、城西署の署長になり、今年で二年目を迎えている。間違いなく、エリート・コースを歩いている。父親が、刑事部長までいっているから、いわゆる血統もいい。ただの秀才でもない。大学時代、空手の選手として、国体にも出ているのだ。
身長一八〇センチ。写真で見ると、なかなかの美男子である。
「羨ましいですね」
と、亀井が、いった。

「はい」
「これまでにも、要注意といわれてきた人間だ」
「はい」
「城西署の滝沢署長を知っているかね？」
「知っています。確か、三年前に退職された滝沢刑事部長のお子さんでしたね」
「そうだ。私の前任者の一人息子だよ。三十歳だ」
「優秀な男だという評判は聞いています」
「退職した滝沢さんは、現在、ワールド建設の管理部長をやっておられる。サラリーマンだよ。それに、滝沢家は、別に、資産家というわけじゃない。滝沢さんは、退職金で、今までの借家を買い取ったそうだが、三十坪足らずの小さい家だし、ローンを設定したので、大変だといわれたことがある」
「はい」
「それなのに、息子の城西署長は、かなりぜいたくな生活をしているという噂がある」
「なるほど」
「監察が調べたところ、滝沢署長は、独身で、銀座のクラブ『麻』のナンバー・ワンのホステスとつき合っている。それに、国産だが、スポーツ・カーを、乗り廻している。また、現在、彼が住んでいるのは、九階建の高級マンションだが、部屋代は、月二十八万円だ。署長の月給

この店の杏子というホステスに、会うためである。
「麻」は、雑居ビルの二階にあって、豪華な造りで、いかにも高そうな店だった。
二人は、小柄なホステスに案内されて、奥のテーブルに着いた。すすめられるままに、レミーの水割りを呑み、まずいクッキーを口に運びながら、
「この店に、杏子さんという美人が、いるそうだね」
と、テーブルについているヒロコというホステスに、聞いた。
「彼女、今日は、まだ来てないわね」
「どんな人かな？」
「スタイルが良くて、美人だけど」
と、ヒロコは、いってから、急に声をひそめて、
「根性は、悪いわよ」
「ほう」
「それに、彼女に惚れた男は、みんな碌な死に方をしないの」
「本当かね？」
亀井が、真顔できくと、ヒロコは、クスクス笑って、
「それは、嘘だけど、何となく、危険な匂いのする人ね。それがいいっていうお客さんもいるけど――ああ、彼女、来たわ」

亀井が、真顔でいったので、十津川は、苦笑した。
「天が二物を与えることもあるのさ」
「どうやって、調べますか？　慎重にやらざるを得ませんが」
「ああ、そうだ。われわれが、滝沢署長を調べていることを、マスコミが嗅ぎつけたら、必ず、大々的に報道されるからね」
「どこからやりますか？　尾行も難しいでしょう？」
「今夜、久しぶりに、銀座に飲みに行かないか？」
と、十津川が、笑顔で、いった。
「例のクラブですか？」
「ああ、滝沢署長が、つき合ってるホステスを見てみたいんだよ」
「しかし、銀座は、高いですよ」
「うちの奥さんに出して貰うよ。うちの奥さんは、資産家の娘でね」
と、十津川は、いった。

3

午後八時を回ってから、十津川は、亀井を連れて、銀座の「麻」というクラブに出かけた。

「あんたサラリーマンでしょ？」
「わかるかね？」
「サラリーマンじゃ、二百万どころか、二十万だって、無理なんじゃないの」
と、ヒロコは、笑った。
「駄目か」
と、十津川は、わざと、大げさに、肩をすくめて見せてから、
「それにしても、あの江上という人は、月に二百万も、こういう店で使えるなんて、いったい、何をしているのかな？　羨ましいね」
「なんでも、お父さんが、大変な金持ちで、使い切れないような莫大な財産を、引き継いだんですって。銀行の利息だけでも、月々、何百万も、入ってくるらしいわ」
「生れついての金持ちねえ」
「世の中って、不公平だわ。そう思うでしょう？」
「同感だねえ。しかし、あの江上さんは、利息で食ってるわけじゃないんだろう？　何か、商売をやってると思うんだけどね」
「どうして？」
「その会社に入ろうかなと思ってね。今の会社は、給料が安いから」
と、十津川は、いった。

背の高い、二十五、六歳の女が、顔を出した。胸の大きく開いたドレスが、挑発的だった。

彼女は、まっすぐに、五十五、六歳の小太りの客のテーブルに、行った。

「今、彼女と一緒にいる男の人は、ここへ、よく来るの？」

と、十津川は、小声で、きいた。

ヒロコは、ちらりと、向うのテーブルに、眼をやって、

「なぜ？」

「あんな年齢でも、杏子さんと親しくなれるんなら、おれもと思ってね。いやに、親しそうにしてるじゃないか」

十津川が、いうと、ヒロコは、笑って、

「あの人と、張り合う気なの？」

「駄目かね？」

「あんたお金持ち？」

「多少はね」

「多少じゃ駄目ね。あの人はね、江上さんていうんだけど、一月に、二百万は使ってるし、それも、現金で、きれいに払ってるわ。他のホステスにも、チップを弾むのよ。そのくらいのこと、あんたに出来る？」

「月二百万ねえ」

「大変な散財だね」
十津川が、いった時、江上が、立ち上った。
「もう帰るのかな？」
と、亀井が、いうと、ヒロコが、
「お金を沢山使って、短い時間でお帰りになるのが、イキで、喜ばれるの」
「それでは、われわれも、引き揚げよう。お金は、沢山使えなかったがね」
と、十津川は、いった。
外に出ると、江上が、ビルの前で、車を待っているのが見えた。近くに、車を駐めておけないので、自分の車を、遠い場所に駐めておいたのだろう。
「タクシーを拾ってきてくれ」
と、十津川は、亀井に、頼んだ。
江上の前に、茶色のロールス・ロイスが、とまり、運転手が、うやうやしく、ドアを開ける。
亀井も、タクシーを拾ってきた。
十津川も、乗り込んで、
「あのロールスを、つけてくれ」
と、運転手に、いった。
「向うの車は、怖い人が乗ってるんじゃないんですか？　そうだと、嫌だね」

「何やってるって、いってたかなあ」
と、ヒロコは、妙に真剣な顔になって、考えていたが、
「そうだわ。貸しビルをやってるって聞いたことがあるわ」
「貸しビル？」
「ええ。ビルを沢山持っていて、何もしなくても、お金が、どんどん入ってくるみたい」
「やれやれ、利息は入るし、ビルを貸して、また、お金が入るのか」
亀井が、溜息をついた。
その時、急に、向うのテーブルで、ホステスたちが、華やかな笑い声を立てた。
ヒロコも、「ちょっと、待ってて」といって、立ち上ると、勝手に、江上のところへ行ってしまった。
二、三分いて、戻ってくると、上気した顔で、
「よかったア」
「何が、よかったんだね？」
と、十津川が、きいた。
「江上さんに、チップを貰ったの」
「しかし、君は、向うのテーブルじゃなかったじゃないか」
「それでもいいのよ。江上さんは、全員に、くれるのよ。気前よくね」

署長にあいさつしてから、問題の邸の持主について、聞いた。
「あの邸は、昔は、財閥の会長さんが、別宅として建てたんだと、聞いています、裏口が、多摩川に面していて、舟遊びが出来るように、設計されたと聞いています」
「それで、今は？」
「その会長さんが亡くなって、売り出され、今は、江上貢太郎という人のものになっていると聞いています」
「江上というのは、どういう人物ですかね？」
「詳しいことは知りませんが、何かの社長で、大変な資産家だと聞いています」
「家族構成は、どうなっているんですか？」
「奥さんが、おられますよ。ご主人に比べると、ずいぶん若い奥さんですが」
と、いって、署長は、笑った。
どうやら、江上が、何をやっているのかは、わからないらしい。刑事事件を起こしていなければ、個人の経歴を、警察が調べる理由もないから、わからなくて、当然だろう。
「ここに、紳士録がありますか？」
と、十津川は、きき、若い職員が、署長室に持って来てくれた「日本紳士録」のページを繰ってみた。
一流企業の課長以上が、全て、載っているというものだった。

運転手が、ロールスを見ながらいう。亀井が、その眼の前に、警察手帳を、突きつけた。
運転手は、黙って、ハンドルを握るようになった。
ロールスは、新宿に出ると、今度は、甲州街道に入った。時速六十キロほどで、ゆうゆうと走って行く。
午後十時を過ぎていて、車の数も、さほど多くない。
「向うは、尾行に気付いているかも知れませんよ」
と、亀井が、小声で、いった。
「それでも、いいさ」
と、十津川は、笑った。
江上の車が着いたのは、調布市の外れ、多摩川に近い邸だった。豪邸という感じではなく、竹垣で囲んだ和風の落ち着いた構えである。
ロールスは、音もなく、邸内に滑り込んでしまった。
十津川は、門から七、八メートル離れたところで、タクシーを、とめた。
竹垣の奥から、監視カメラがのぞいていたからである。
「調布の警察へ行ってくれ」
と、十津川は、運転手にいった。
調布署に着くと、十津川と亀井は、タクシーをおりて、署内に入って行った。

必要がある」
と、十津川は、いった。
「わかりました」
と、亀井は、肯いた。

4

この日から、亀井たちが、調布の江上邸の監視を始めた。
門に面した場所に、覆面パトカーを一台、そして、裏口に、一台が、配置された。
夜間に、客の出入りがある場合に備えて、亀井たちは、暗視装置つきのカメラも、用意した。
二十四時間の監視である。
だが、いっこうに、訪れる人間がいない。
捜査本部で、連絡を受けていて、十津川は、次第に、不安になってきた。
今度の事件と、全く関係のない人間を、監視しているのではないかという不安だった。
城西署長の滝沢博をマークしたのだが、この滝沢自体、あの連中と、本当に、関係があるかどうか、確証はないのだ。
その滝沢と関係があると思われるホステスの杏子。

だが、江上貢太郎の名前は、載っていなかった。いや、載ってはいたのだが、その江上貢太郎は、年齢も違うし、外交官になっているのである。

署長は、他の紳士録や、人名辞典も、持って来させた。

しかし、あの江上は、どの辞典にも、載っていなかった。

「どういうことですかね？」

と、亀井が、首をかしげた。

「つまり、社会の表舞台には、出て来ていない人間ということだろう。最近、多い現象だよ。金があり、力も持っているが、公には、隠れている人物だ」

「地上げ屋みたいなものですか？」

「まあ、そうかも知れないが、あの江上が、犯罪者なら、もっと、暗い世界にいることになる」

と、十津川は、いった。

「どうしますか？　あの家を、監視しますか？」

「そうだな。どんな人物が出入りするか、知りたいね」

「やってみましょう」

と、亀井がいった。

「裏口は、多摩川で、昔は、舟遊びが出来たといっていたから、裏口にも、刑事を置いておく

江上の邸を監視して、四日目の夜、スポーツ・カーが、一台、門の前で、とまった。
国産のスポーツ・カーである。
男が一人、車から降りて、門についているインターホンを、押した。
しかし、江上は、外出中で、男は、舌打ちをして、車に戻った。
そのあと、スポーツ・カーは、ゆっくりと、多摩川の河原に向って、動いて行った。
亀井たちも、そのあとを、覆面パトカーで、尾行した。
スポーツ・カーは、土手の下の道路でとまり、男と女が、車から降りた。
二人は、土手へ登って行った。
亀井は、パトカーをとめ、二人を見つめた。
土手の上に、若い男と女が、シルエットになって、浮んでいる。二人とも、背が高い。
亀井は、スポーツ・カーのプレートナンバーを、無線電話で、十津川に、知らせた。
「その車の持主は、わかってるよ。城西署長の滝沢博だ」
と、十津川が、いった。
亀井は、眼を光らせて、
「やはり、滝沢署長は、江上と、繋っていたんですね」
「暗視装置で、女の顔は、わからないか？」
と、十津川が、きいた。

その杏子の客である江上となると、次第に、関係が薄くなっていくのが、当然なのだ。いや、無関係の可能性も強くなってくるのだ。

江上自身は、毎日、夜になると、ロールス・ロイスで、出かけて行く。行くのは、決って、銀座のクラブ「麻」だった。

常連だというヒロコの話は、本当だったのだ。確かに、これなら、一カ月で、二百万は、使うだろう。しかし、これでは、金持ちが、銀座のクラブで、豪遊しているだけのことである。

十津川が、知りたいのは、この江上という男が、例の連中と、どんな関係なのかということである。そして、滝沢城西署長との関係なのだ。

岐阜県警の捜査も、その後、進展を見せていないようで、何の連絡もして来ない。

(参ったな)

と、十津川は、思う。

こうしている間、あの連中が、何もしていないということは、考えられない。

小山と早川の口を封じ、安心して、恐喝という、金になる仕事を続けているかも知れないのである。

(今の捜査が、少しでも、解決に近づいているのならいいんだが)

と、十津川は、思っていた。

遠回りでもいいが、全く関係のない方向に進んでいたら、時間の無駄なのだ。

て、スピードをあげていった。
「止まれ」
と、亀井が、運転している西本刑事に、いった。
西本は、ブレーキを踏んでから、
「なぜ、尾行を中止するんですか？」
「向うさんは、尾行に気付いてるからだよ」
「そうでしょうか？」
「江上邸へ行くのを中止したのが、その証拠だ。多分、さっき、自動車電話が掛って、注意しろといわれたんだろう」
「われわれが、あの邸を監視していることに、連中は、気付いていたんでしょうか？」
「だろうね」
「毎日、車を変えたり、場所を移動したり、注意していたんですがね」
「向うにも、元警察官がいるだろうから、仕方がないさ」
と、亀井は、いってから、無線電話を使って、十津川と、連絡を取った。
「尾行に気付かれました。滝沢署長と女は、江上邸には寄らずに、逃げました」
「写真は、撮ったか？」
「三十六枚撮りを一本、写しました」

「銀座のホステスの杏子だと思います。現在、二人とも、こちらに背を向けているので、はっきりしませんが」

と、亀井は、いった。

「そこで、二人は何をしてるんだ？」

と、十津川が、きく。

「恋人同士のように、寄り添っていますが、何を喋っているのか、わかりません。江上が、帰宅するまで、ここで、時間潰しをしているのかも知れません」

と、亀井は、いったが、その時、急に、土手の上の二人が、動いた。

男が、はねるように、車に戻っていく。

「自動車電話が、鳴ったみたいです」

と、亀井は、いった。

女も、車に戻っていく。

どんな電話なのか、亀井のいる場所からは聞こえない。

男は、電話を切り、スポーツ・カーは、急に動き出した。江上邸に戻るのかと思ったが、車は、反対方向に、走って行く。

亀井も、覆面パトカーで、追跡した。

スポーツ・カーは、ぐるりと、大廻りして、甲州街道に戻った。そのまま、新宿方向に向っ

に、杏子を指名している。男二人は、彼女を張り合っているわけです。それなのに、女をつれて、ライバルのところに、押しかけるのは、おかしいんじゃないかと、思いまして」

と、日下が、いった。

「だから、どちらかが、嘘なのさ」

「と、いいますと？」

「滝沢が、杏子に惚れている。これが本当なら、江上は、彼女には、惚れていない。逆のケースもあるが、つまり、三角関係は、見せかけだということだよ」

と、十津川は、いった。

「しかし、江上は、ひんぱんに、クラブ『麻』に、行ってるわけでしょう？　行けば、必ず杏子を指名する。彼女に惚れているとしか考えられませんがね」

日下は、十津川を見、亀井を見た。

「恐らく、若い滝沢が、杏子に惚れているんだと思うよ。そうだとすれば、江上が、彼女に近づいているのは、彼女を、利用するためだ」

と、十津川は、いった。

「利用って、どんな風にですか？」

「例えば、滝沢との連絡係。連絡場所として、銀座のクラブを利用していたということも、考えられるよ。その上、お互いが、女を挟んでライバル関係に見られていれば、江上と、滝沢が、

「それならいい。帰って来てくれ」
「江上邸の監視は、もう必要ありませんか？」
と、亀井が、きいた。
「カメさんの感じでは、監視していることに、気付かれているんだろう？」
「そうです」
「それでは、これ以上の監視は、無駄だよ。ボロを出さないし、滝沢署長だって、もう、姿を見せないだろう。裏口を張っている日下刑事たちにも連絡して、引き揚げさせる」
と、十津川は、いった。
亀井たちが、捜査本部に引き揚げ、続いて、日下と清水の二人も、戻って来た。
亀井の撮ってきた写真が、さっそく、現像され、引き伸ばされた。
暗視装置つきのカメラだから、滝沢と、杏子の顔も、はっきりと、写っていた。
「滝沢署長と、江上とが繋っていることが、確認されただけでも、収穫だよ」
と、十津川は、いった。
「江上のところに、ホステスの杏子を連れて行こうとしたというのは、どうも、おかしいですね」
と、日下が、いう。
「そうでしょう。滝沢は、ホステスの杏子に、熱をあげている。江上の方も、クラブに行く度

江上が、どれだけの税金を払っているのか、税務署には、自分の職業を、何と申告しているのか、それを、知りたかったからである。

だが、税務署に出されている申告書には、無職となっていて、預金利息の収入六百万足らずしか、申告されていなかった。

十津川は、坂井という担当者に、会って、いろいろと、聞いてみた。

「確かに、利息の収入だけで、あれだけの生活をしていくのは、無理だという気はします。それで、国税で、査察したことがあるんですよ。ロールス・ロイスなんかも、購入していますからね」

「それで、何かつかめたんですか？」

「つかめていれば、追徴していますよ」

と、坂井は、苦笑した。

「江上さんは、どう説明しているんですか？」

「調布のあの邸と、土地を担保にして、銀行から借金をして、それで、車を買ったりしているといっていますね。確かに、銀行から、借金をしています」

「預金もあるんですね？」

「ええ。一億何千万かの預金があります。それと同じくらいの借金をしているんです」

「よくわかりませんね。当然、他の収入もあると、思わざるを得ないんじゃありませんか？

親しいなんて、誰も考えない。そう読んだのかも知れないね」

「二人は、お互いに、利用し合っているということですかね？」

亀井が、考えながら、きいた。

「もちろん、そうだろう。滝沢は、江上から、金を貰っているんだろうし、江上の方は、滝沢の地位を利用しているんだと思うね」

と、十津川は、いってから、

「一番知りたいのは、江上貢太郎が、何者かということだな。紳士録には出ていないし、クラブのホステスは、父親の代からの財産家で、貸しビル業をやっているというが、それが、本当とは、思えない」

「やはり、江上は、例のグループのリーダーでしょうか？」

と、西本が、きいた。

「と、思うが、あくまでも、想像でしかないし、推測で、逮捕は、出来ないよ。まして、現職の城西署長が、繋っているとなると、余程、慎重にやらなければならないからね」

十津川が、重い口調で、いった。

慎重にやらなければならないと同時に、この件が、マスコミに感付かれる前に、素早く、解決する必要もあるのだ。最近、警察の不祥事が、相ついでいるから、尚更である。

十津川は、江上という男を知るために、調布税務署へも行ってみた。

「江上本人に、会ってみよう」
と、十津川は、亀井に、いった。
二人は、調布にある江上邸を、訪ねた。
江上の方は、十津川たちが、来ることを、予想していた感じで、にこやかに、迎え、奥の和室に招じ入れた。
中庭に面した部屋で、鳥のさえずりが聞こえてくる。
三十五、六歳の女性が、お茶をすすめてくれた。
（これが、江上の若い奥さんか）
と、十津川は、思いながら、和服姿の江上に、
「突然、伺って、申しわけありません」
と、まず、あいさつした。
江上は、妙に、他人を射すくめるような眼で、十津川と亀井を見て、
「確か、銀座のクラブにも、おられましたね。私のことを、何か調べていらっしゃるんですか？」
と、きいた。
（気付いていたのか）
と、十津川は、内心、苦笑しながら、

第一、利息の収入だけでは、銀行の借金を、返せないでしょう？」

「だから、赤字申告ですよ」

と、坂井は、苦笑した。

「毎日のように、銀座のクラブで、飲んでいるのを、知っていますか？」

「ええ。それも、全部、借金をしてだと、いっていますね」

「しかし、その話が本当だとすると、江上さんは、遠からず、破産しますね」

「本人も、破産するだろうと、いっていましたよ」

「おかしいですね」

「しかし、いくら調べても、つかめないんですよ」

と、坂井は、いってから、十津川に向って、

「警察は、江上貢太郎の何を調べているんですか？」

「今のところ、そちらと同じで、江上貢太郎が、どんな仕事をしているのかということです」

「それで、何かつかめたんですか？」

「つかめないので、こちらに、聞きに来たんですよ」

と、十津川は、いった。

国税の査察でもつかめないとすると、やはり、公（おおやけ）に出来ない仕事と考えざるを、得なかった。

「あなた方が、熱心に話されるので、私も、興味を示さないと、失礼かと思っただけのことですよ」

「岐阜の美女高原で殺された小山という元警察官と、関係があったのではないかと思われる会社だからです」

と、十津川は、いった。

「しかし、私とは、何の関係もありませんね」

「江上さんは、よく、銀座のクラブ『麻』へ行かれますが、そこの杏子というホステスと、親しくされていますね」

「親しいというのは、正しくありませんよ。私は、女性は好きだし、あの店のママも、ホステスも好きですよ。特定のホステスが、特別に好きということも、ありませんね」

「城西警察署の滝沢という署長は、ご存知ですか？」

と、十津川が、きいた。

その瞬間、江上の表情が、動いたような気がした。

「警察に、知り合いはいませんが――」

「しかし、滝沢署長が、ここを訪ねて来たのを、われわれは、目撃しているんですよ。丁度、江上さんが、留守で、彼は、車で帰って行きましたが」

「あなた方が、なぜ、それを、目撃されたんですか？　まさか、この家を、監視していたんじ

「岐阜の美女高原で起きた殺人事件が、きっかけでしてね。東京でも、それに関係のある事件が起きました。岐阜の事件では、元警察官が、殺されました」

「その事件と、私が、関係があると、思われるんですか？」

江上は、無表情に、きいた。

「殺されたのは、小山という男なんですが、ご存知ありませんか？」

「いや、全く知りませんね」

「ヒューマン協会というのは、どうですか？　ご存知ないですか？」

「どんな仕事をやっている会社ですか？」

「一応、輸入品の販売みたいなことをしていることになっていますが、実体は、不明です」

「警察でも、わからないことがあるんですか？　日本の警察は、世界一優秀だと、思っていましたがね」

江上は、皮肉な眼つきをした。

「いくら警察でも、強制的に捜査は出来ませんのでね」

「そのヒューマン協会を、なぜ、警察は、マークしたわけですか？」

と、江上が、きく。

「興味が、おありですか？」

今度は、亀井が、ちょっと皮肉な聞き方をした。江上は、肩をすくめて、

と、江上が、いった。

「何がですか？」

「今いったように、私は、警察に、知り合いはありません。だが、何か用があって、城西署の署長さんが、私に会いに来たとしても、それが、犯罪になるんでしょうか？　警部さんに、あれこれいわれなければ、いかんのですかね？」

江上が、反撃してきた。

十津川は、首を小さく横に振って、

「別に、そんなことは、申しあげていませんよ。たまたま、滝沢署長を見かけたので、何の用があったかなと、思っただけです」

「私は、親が、莫大な遺産を残してくれたおかげで、余裕があります。いろいろな催しや団体に、寄附をして来ました。礼状も、貰っていますよ。その話を聞いて、突然、訪ねて見える方もいるんです。ひょっとすると、城西署の署長さんは、そうした用件で、来られたのかも知れませんね」

「寄附を、頼みにですか？」

「そうです。例えば、その署長さんの友人が、何かのボランティア活動をしていたとします。日本では、そういう仕事は、恵まれませんし、金を出そうという人間が、少ないですからね。資金に困って、署長さんに相談した。署長さんにしても、月給は安いから、友人の頼みに応え

やないでしょうね？　個人の家を、警察が監視しているとなると、これは、問題ですよ。大きくいえば、憲法に、抵触しかねない。違いますか？」

と、江上は、いった。

（こちらが監視していたのを、知っているくせに）

と、十津川は、内心、苦笑しながら、

「いや、偶然です。多摩川に、たまたま、夜釣りに来た刑事がいましてね。顔見知りの滝沢署長を、見かけたわけです。その時、滝沢署長は、若い女性と一緒だったそうです。顔立ちから見て、『麻』のホステスの杏子さんのように、思えるんですがね」

「ほう。そうですか」

「滝沢署長は、何の用で、江上さんに会いに来たんでしょうか？」

と、十津川は、きいた。

「さあ、私は、その方を知りませんのでね。何ともいえませんね」

「しかし、滝沢署長は、明らかに、江上さんを訪ねて来ているんですよ。城西署の署長が、わざわざ、訪ねて来たのには、何か、特別の用があると、思わざるを得ませんがね」

十津川は、食いさがった。

江上の顔が、赤くなった。

「どうも、よくわかりませんね」

「と、いうより、われわれが、マークしていることを、知らせるためだろう」
「滝沢署長は、どうするでしょう？」
「彼が、少しでも、悪に加担しているとすれば、少しは、あわてるだろうね。われわれが、何処まで知っているか、気になるだろう。それを、知ろうとするんじゃないかね」
「それで、江上か、滝沢署長が、ボロを出してくれれば、いいんですがね」
と、亀井が、いった。
「江上は、簡単には、ボロは出さないだろう。そんな、生易しい人間には見えない。むしろ、崩れ易いのは、若い城西署の滝沢署長の方だが、ただ、危険も、こちらの方が、大きいね」
と、十津川は、いった。
二人は、パトカーを、スタートさせ、捜査本部に向った。
「滝沢署長が、危険というのは、どういうことですか？」
と、運転しながら、亀井が、きいた。
「滝沢は、署長だ。権力を握っている。部下も、何人もいる。警察では、上司の命令には、服従するように、教えられているから、滝沢の命令のままに、部下の刑事が、動くだろうからね。下手をすると、悲劇が、起こりかねないよ」
「武器も、持っていますからね」
「ああ。だから、慎重の上にも、慎重に行動したいが、同時に、今度の事件は、一刻も早く解

られない。その時、私のことを聞いて、相談に見えたんじゃないですかね」
「面白い話ですね」
「クラブ『麻』の杏子が、一緒だったといいましたね？」
「そうです」
「それなら、間違いありませんよ。彼女は、私が、あの店で、気前よく、金を使っているのを知っていますからね。私に頼めば、何とかなると思って、署長さんを、連れて来たんじゃありませんか。私も、お会いすれば良かったかも知れませんな」
と、江上は、いった。

5

江上の邸を出て、パトカーに戻る途中で、亀井は、腹立たしげに、
「とぼけた男ですね」
と、いった。
「今頃、江上は、滝沢署長に、電話していると思うね」
十津川が、苦笑しながら、いった。
「口裏を、合せるためですか？」

そして、最後に、「ヒューマン協会」と、書いた。

「今までに、事件に関係があると思われる人間は、ここに書いた連中だ。ヒューマン協会では、三人から四人の職員が働いていたと思われるから、その人間も、プラスしなければならない。このヒューマン協会の会長と思われる人間の似顔絵は、ここにあるが、江上とは、別人と、考えられる」

と、十津川は、自分の頭の中で、事件を反芻しながら、亀井たちに、いった。

「江上は、ヒューマン協会に、関係していると、思われますか？」

と、日下刑事が、きく。

「恐らくね。ただし、江上は、金を出しているだけで、スポンサーになっているんだと思う。もちろん、ゆすりの利益は、江上のふところにも、入っている筈だ。それで、江上は、ぜいたくに、暮しているわけだよ」

「久保昌一が、心配ですね。今まで、行方がわからないとなると、すでに、殺されている可能性が、強くなりますが」

と、亀井が、いった。

「そうだな。連中は、危険な存在になった人間は、容赦なく殺しているからね。小山、早川、そして、東くみ子とだ」

決したい。滝沢署長が関係しているとすれば、尚更だ」

と、十津川は、いった。

十津川は、改めて、捜査会議を、開いた。

捜査範囲が広がっていくので、もう一度、最初から、組み立て直す必要に、迫られたのである。

十津川は、まず、黒板に、今までに殺された三人の名前を、書いた。

小山淳一郎
東くみ子
早川勇

続いて、十津川は、次の四人の名前を書いた。

久保昌一
江上貢太郎
滝沢城西署長
杏子（クラブ「麻」のホステス）

亀井が、いまいましげに、いった。

「今の世の中は、後暗いところのある人間が多いし、そういう奴に限って、金を持ってるからね」

と、十津川は、いった。

脅迫された人間が、すぐ、警察に届けてくれれば、事件の解決も早いのだが、こういう被害者は、届け出ない。

普通の事件では、犯人を探すのが大変だが、今度の事件では、ゆすりの被害者を探すのが難しい。

美女高原で、小山が殺されてなければ、連中が、ゆすりをやっていることも、気付かなかったに違いないのである。

「連中は、どのくらいの組織なんでしょうか？」

と、日下が、きく。

「少なくとも、数人はいるんじゃないかな」

と、亀井が、いった。

「その中、二人減っています。そして、三人目も、すでに、殺されている可能性が強いわけですよ」

日下が、言葉を、続けた。

十津川は、唇を噛んだ。
すでに、三人の男女が殺されているのに、犯人を、一人も、逮捕できずにいるのだ。
「ヒューマン協会ですが」
と、西本が、十津川を見て、いった。
「何だね？」
「なぜ、そんなものを、連中は、作ったんでしょうか？」
と、西本が、きく。
「それは、連絡などで、便利だったからだろう。集っていても、不審に思われないからね」
「それなら、連中は、また、何処かに、似たようなものを作りますね」
「作る可能性があるね」
と、十津川も、いった。
「各警察署に連絡して、連中が、また、新しい会社を作るのを、監視したらどうでしょうか？」
と、西本が、いった。
「いいだろう。連絡しておこう」
と、十津川も、肯いた。
「こうしている間も、連中は、誰かを、脅迫しているんでしょうね」

と、十津川は、呟いた。
最近、警視庁を辞めた元刑事ということで、二人の名前が、あがっていた。
その一人、久保昌一は、行方不明になってしまっている。
もう一人が、捜査四課にいた多田誠である。
多田は、現在、大手の警備会社で働いていることがわかったので、除外していたのだ。
だが、多田は、暴力団から、二百万円を貰って警視庁を、馘になったという過去がある。
つまり、金に弱いのだ。こうした情報は、もう、滝沢から、知らされているだろう。
連中が、三人の補充を考えた場合、まず、最初に、白羽の矢を立てるのは、多田誠だろう。
「会いに行こう」
と、十津川は、立ち上った。

6

十津川と、亀井は、深夜に近かったが、多田の住む、阿佐谷のマンションに出かけた。
多田は、警視庁を馘首された時、離婚している。いや、奥さんが、逃げ出したのだ。
やもめ暮しということも、連中にとっては、つけ目だろう。金と、もう一つ、女というエサで、釣れるからだ。

「何が、いいたいんだ？」
と、十津川が、きいた。
「久保が、すでに、殺されているとします。小山も、久保も、警察で働いていましたから、調査のプロです。早川も、興信所で働いていたから、プロとみていいでしょう」
「それで？」
「連中は、三人のプロを失ったわけです。彼等が、十人だったとしても、三十パーセントの戦力のマイナスです。しかし、ゆすりを企業化した連中が、規模を縮小して、入ってくる金が、少なくてもいいと、思うでしょうか？」
「つまり、連中は、三人の穴を補充しようとするんじゃないかといいたいんだな？」
「そうです。それも、何も出来ない人間を補充したのでは、命取りになります。従って、また、三人に負けないプロを、仲間に入れようとする筈です」
「警察で、捜査の第一線で働いていた人間か？」
「そうです。城西署の滝沢署長が、連中と繋っているとすると、辞めた警察官の情報は、滝沢署長から、得ていたと、思います」
「続けたまえ」
「連中は、また、同じ形で、新人を、組み込むと思うのです」
「多田誠か」

と、十津川は、おだやかにいった。
「何の用だ？」
「大事な話なので、中に入れて貰えませんか」
と、十津川は、いった。
多田は、首をすくめ、二人を、中に入れた。
椅子に腰を下すと、テーブルの灰皿に、ケントの吸殻と、マイルドセブンの吸殻が、山になっていた。
マイルドセブンは、箱が、テーブルにあるから、多田のものだろう。
十津川は、ケントの吸殻を、一本、そっと、ポケットに、かくした。
多田は、キッチンから、缶ビールを三本持ってきて、二本を、無造作に十津川と亀井の前に置き、自分は、うまそうに、飲んだ。
「今、大変な事件を、捜査しているんですよ」
と、十津川は、いった。
「おれは、もう、警察とは関係ないんだ。繰り返すがね」
「だが、関係ないではすまなくなるかも知れないんですよ」
「どうしてだ？」
「われわれが追っているのは、ゆすりを職業にしているグループでね。彼等は、警察を辞めた

多田のマンションの前まで来て、十津川は、ふと、足を止めた。
亀井の腕を引っ張って、物陰に、かくれた。
「どうしたんですか？」
と、亀井が、小声で、きく。
「今、出て来た痩せた男がいるだろう」
「ええ。今、車に乗った男ですね」
「例のヒューマン協会の会長の似顔絵に似ていたような気がしたんだよ」
「そういえば、五十歳ぐらいで、身長も、合っていますね。まさか？」
「捕えても、どうにもならんよ。それより、このマンションに住む多田の勧誘に来たのかも知れない。それに、車のナンバーは覚えたから、所有主は、わかるよ」
と、十津川は、いった。
二人は、五階の多田の部屋に、あがって行った。
五〇一号室のベルを鳴らす。部屋の中で、
「誰だア。こんな遅く」という怒ったような声が聞こえて、ドアが、開いた。
十津川が、警察手帳を見せた。とたんに、多田の顔が、ゆがんだ。
「もう、おれは、警察を、辞めたんだぜ」
「わかっていますよ」

連中が、勧誘に来たら、われわれに、知らせて欲しいのですよ。われわれに、協力して貰いたいのですよ」

「帰ってくれ！」

突然、多田が、怒鳴った。

「あなただって、一度は、警察に籍を置いた人間じゃないか」

と、亀井が、いうと、多田は、更に激昂して、

「警察は、おれを馘にしたんだぞ！　なぜ、協力しなければいけないんだ！」

と、叫んだ。

「わかりました」

と、十津川は、亀井を促して、腰を上げた。

玄関のところで、多田を振り返って、

「冷静になったら、よく考えて下さい。そして、われわれに、連絡して下さい」

と、十津川は、いった。

人間を、仲間に引き入れて、ゆすりのネタ探しをさせているんです。そして、必要がなくなると、容赦なく、殺してしまう。あなたも知っていると思いますが、捜査一課に、小山という刑事がいたんだが、連中に、殺されてしまいました」

「――――」

急に、多田が、黙ってしまった。

（やはり、連中が、もう、勧誘に来たのか）

と、十津川は、思いながら、

「連中は、優秀な捜査のプロが、欲しいんです。しかも、何か事件を起こして、警察を辞めた人間です。あなたは、その二つの条件を満たしている」

「――――」

「連中は、高収入を約束して、勧誘しますが、行先は、地獄です。ひょっとして、もう、勧誘に来たんじゃありませんか？」

と、十津川は、きいた。

多田は、一瞬、狼狽した表情になって、

「今の話は、初耳だよ」

「今もいったように、一課の元刑事の小山は、殺され、二課にいた久保昌一も、殺されたのではないかと、思われています。あなたに、その二の舞いをして欲しくないのです。いや、もし、

「マンションの入口で会った男が、ヒューマン協会の会長というのは、間違いないのかね？」
「よく似ていましたから、十中八九、間違いないと思います」
「すると、多田を、勧誘に来たことは、十分に考えられるね？」
「はい」
「それなら、君も、多田を監視すべきだと、思うかね？」
と、三上は、きいた。
「いえ。それには、反対です」
十津川が、いうと、三上は、首をかしげて、
「それは、なぜだね？」
「まず、第一に、連中が、捜査のプロの集りだということがあります。われわれが、多田を監視すれば、それは、すぐ、連中に気付かれると思います。連中は、多田から、素早く、離れていくでしょう。そうなれば、また、連中とのつながりを、失ってしまいます」
と、十津川は、いった。
「多田を、監視しなければ、うまくいくのかね？」
「正直にいって、わかりません。多田が、連中の中に組み込まれて、われわれの前から、姿を消してしまうことも、十分に、考えられます。しかし、ごく僅かですが、彼がわれわれに協力してくれる可能性も、残っています」

第五章　小さな罠

1

「多田の行動を監視しましょう」
と、捜査会議で、亀井が、提案した。
「なぜだね？」
三上刑事部長が、きいた。
「今日、会った時の印象では、多田には、連中から、誘いの手が、伸びています。私と、十津川警部が、彼のマンションの入口で会った男は、連中の一人で、ヒューマン協会の会長だと思います。従って、多田を監視していれば、連中に近づける筈です」
亀井が、確信を持って、いった。
三上刑事部長は、十津川に、眼をやって、

亀井の考えを支持する声も強かったが、結局、十津川の方針が、採用された。
それは、十津川の考えがいいからというよりも、今度の事件に、現役の署長が関係しているらしいことへの配慮からという方が、近いだろう。
大げさに動き廻って、マスコミに嗅ぎつかれるのを、刑事部長も、その上の人間も、一番、恐れているからである。

2

待ちの捜査というのは、辛い。特に、今度のように、待っていても、可能性は、何パーセントという小ささでは、なおさらである。
十津川は、多田についての捜査も、全て、止めさせた。
多田は、現在、警備会社で働いており、その勤務状態や、女性関係も、知りたいのだが、その捜査も、しないことに決めた。ひたすら、こちらが、多田を、信用していると、思わせるためだった。
多田のマンションから持ち帰ったケントの吸殻でわかったのは、これを吸った人間の血液型は、O型だということだった。
警察の記録によれば、多田の血液型は、A型だから、彼が吸ったものではない。

「しかし、多田は、警察を馘になった男だよ。警察を、恨んでいる筈だよ」

と、三上が、いう。

「そうです。しかし、警察に入ったということは、多田が、もともと、正義感の持主だったことを示しています。自分を馘にした警察を、恨んではいるでしょうが、まだ、彼の正義感は、残っていると、私は、信じたいのです」

「わずかに残った多田の正義感に、期待しようというわけかね？」

「そうです。もし、われわれが、多田を監視すれば、彼の警察に対する不信感は、より大きくなって、協力を期待することは、全く、不可能になります。だから、私は、監視をせず、彼の信用を得たいと思うのです」

と、十津川は、いった。

「期待どおりにいけばいいがね」

「恐らく、可能性は、二、三パーセントしかないと思いますが、もし、監視して、多田を怒らせれば、彼の協力の可能性は、ゼロになってしまいます」

「君は、奇蹟を信じようというわけだね？　つまり、多田が、電話してきて、協力すると申し出る奇蹟を」

「そうです。また、多田にも、自尊心がある筈です。それにも賭けたいと、思うのです」

と、十津川は、いった。

期待して、受話器をつかむ。だが、多田からではなく、現場に着いた亀井からの最初の報告だった。

「今、晴海に着きました。海に沈んでいた車の中に、死体が入っていたようです。長いこと、水につかっていて、ふくらんでいますが、間違いなく、久保昌一ですよ」

「殺人か？」

「今のところ、わかりません。外傷は、あまりありません。車は、白のスカイラインで、これから、持主を、調べることにします」

と、亀井が、いったとき、他の電話が鳴った。

「また、連絡してくれ」

と、十津川は、いっておいて、鳴っている受話器を取った。

「こちら、捜査本部ですが」

と、十津川は、いった。

だが、相手は、何もいわない。

「もしもし、こちら、捜査本部ですが」

と、十津川は、繰り返した。

それでも、相手は、何もいわない。が、電話を切る気配もなかった。

十津川の胸に、期待が生れた。

多田の監視は、やらない代りに、城西署の滝沢署長の方には、監視をつけた。それも、マスコミにわからないようにである。

丸一日がたち、二日目になっても、多田からは、何の連絡もなかった。

十津川の煙草の数だけが、やたらに、多くなった。

多田は、すでに、あのマンションから消えてしまったかも知れないが、それを、調べることもしなかった。

多田は、警察にいた人間である。刑事が、自分の周辺を調べ出せば、すぐ、気付くに違いないからである。

三日目になっても、多田の声は、聞けなかった。

その代りというわけではないのだろうが、東京湾で、久保昌一の死体が、発見された。

「カメさん、すぐ、行ってくれ。私は、多田から電話があるといけないので、残っている」

と、十津川は、亀井に、いった。

「警部は、まだ、多田が、協力するのを、期待していらっしゃるんですか？」

「少しでも可能性があれば、期待して、待っているよ」

と、十津川は、いった。

亀井たちが出かけてしまい、がらんとした捜査本部で、十津川は、ひとりで、じっと、待った。

電話が、鳴る。

「そういえば、刑事の感じとは、違っていたんだが――」
「多田さん。われわれに、協力してくれませんか。警察に協力してくれとはいわない。あなたと同じように、警察を辞めた人間が、連中に、利用され、そのあげくに、殺されている。その仇をとるのを、手伝って貰いたいんですよ」
「おれには、関係ない」
「ついさっき、久保昌一さんの死体が、東京湾で、見つかりましたよ」
「――」
「二課にいた久保さんです。連中に殺されたことは、間違いないと思っています」
「久保が――？」
「知っていたんですか？」
「いや、知らん！」
と、多田は、強い、怒ったような声で、いった。
「お願いします。力を貸して下さい」
と、十津川は、いった。が、多田は、
「また、電話するかも知れん」
と、いっただけで、電話を切ってしまった。
十津川は、受話器を置き、小さな溜息をついた。

「多田さんじゃありませんか？　私は、十津川です。多田さんですね？」
「ああ」
と、相手が、やっと、短く、いった。
「よかった！」
十津川は、本音で、喜びを表わした。
「――――」
「あなたの電話を、じっと、待っていたんですよ」
「おれを、監視しながらか？」
「いや、監視しろという声もあったんですが、止めました」
「しかし、おれは、監視されているぞ。それを中止しろといいたくて、電話したんだ」
と、多田は、声を荒げた。
「それは、われわれじゃない。あなたに会った日の捜査会議で、あなたの監視も、尾行もしないことを決めたんですよ。あなたは、別に、今度の事件の容疑者じゃありませんからね」
十津川は、ゆっくりと、いった。
「それなら、おれを、監視しているのは、誰なんだ？」
「恐らく、例のゆすりの組織の人間でしょう。連中にとって、あなたは、必要だが、同時に、信用がおけるかどうか、調べているんだと思いますよ」

「引き続き、聞き込みだな。ところで、多田から、電話があったよ」
と、十津川はいい、どんな電話だったかを、説明した。
「警部の推理が、当ったわけですね」
と、亀井も、眼を輝かせた。
「いや、まだ、彼が、われわれに協力してくれるかどうか、わからんよ」
十津川は、慎重ないい方をした。
「しかし、その気が、少しでもあるからこそ、電話して来たんだと思いますよ。監視されている文句だけで、電話して来ないと思いますね」
「カメさんは、そう思うか？」
「ええ」
「それが、当っていれば、嬉しいがね」
と、十津川は、いった。
翌日、多田から、何の連絡もなかった。
（やはり、無理だったか？）
と、十津川は、失望した。
今の時代は、正義という言葉より、金の方が力があり、魅力的なのかも知れない。
次の日の夕方、諦めて、帰りかけた時、電話が鳴った。

（ともかく、多田が、電話してきたのだ）

と、自分にいい聞かせた。

幸いなのは、連中が、多田を勧誘しながら、監視をつけているらしいことである。そのことが、多田の自尊心を傷つけてくれれば、何とかなるのではないか。

亀井が、捜査本部に、帰って来た。

「死体は、解剖のために、K大病院に運びました。検死官の話では、死後、三週間程度はたっているようです」

と、亀井は、いった。

「車の持主は、わかったのかね？」

「わかりましたが、盗難届が出ていました。殺人とすれば、盗難車に、久保を乗せて、東京湾に、沈めたことになりますね」

「所持品は？」

「二万三千円入りの財布、腕時計は、身につけていましたが、その他は、何もありません。運転免許証、CDカードといった、身元を証明するものは、持っていませんでしたが、あの死体は、間違いなく、久保昌一です」

「車が、落ちるのを見た人間は？」

「今のところ、目撃者は、見つかっていません」

「いや、いわなかった。OKすれば、教えると、いっていたよ」
「その他、何かいいましたか？」
「二つ、いったな。OKすれば、その場で現金百万円と、新車をくれるそうだ。もう一つは、一度、仲間に入ったら、抜けることは、許されないらしい」
「OKは、電話をかけて、いうわけですか？」
「いや、向うから、電話してくると、いっていたよ」
「では、電話して来たらOKして下さい」
と、十津川は、いった。
「そして、おれは、警察のスパイになるわけか」
多田は、声を落として、いった。
「前にも話しましたが、警察を辞めた人間が、何人も、連中に利用されたあげく、殺されています。その仇を、一緒に、とって貰いたいんですよ」
「警察を放り出された人間のだろう？」
と、多田は、いい直した。
十津川は、受話器を持ったまま、苦笑した。確かに、その通りなのだ。
「私の知りたいのは、彼等のリーダーです。江上貢太郎という名前が、浮んでいますが、証拠がありません」

十津川が、受話器を取る。
「おれだ」
と、今度は、いきなり、多田が、いった。
十津川は、亀井に向って、眼で合図してから、
「電話を待っていたんですよ。われわれに、力を貸して下さい」
「監視されている。尾行もついている。あんたに会ったら、おれは、殺されるよ」
「わかりました。この電話は、盗聴されていませんね？」
「わからないが、他に、連絡の方法がないんだ」
「じゃあ、電話で、話し合いましょう。連中が、あなたに、仲間に入れと、いって来たんですね？」
「ああ。金になる仕事があると、いって来た」
「私と亀井刑事が訪ねた日に、その男は、来たんじゃありませんか？」
「ああ、そうだ」
「名前は、わかりますか？」
「いや、名前は、いわなかった。大金が手に入る仕事がある。多少の危険があるが、やってみないかといっただけだ。警察の経験を生かせる仕事だとも、いってたよ」
「仕事の内容はいいませんでしたか？」

「いや、このマンションでは、危険だ。連中は、おれを試すために、何でもするだろうから、見つかる恐れがある。今からいう場所へ、送ってくれ」
と、多田はいい、世田谷区内の番地と、宮下雅子という名前を、告げた。
「ここに、送ればいいんですね？」
「そうだ。あんたの署名入りの契約書にして欲しい」
「わかりました。すぐ、送ります」
「それがついたら、やる。誓うよ」
と、多田は、いった。

3

十津川は、すぐ、三上刑事部長に、多田のことを話した。
「それで、君の書いた契約書を、送るつもりかね？」
と、三上が、きいた。
「送ります。書きましたので、眼を通して頂けませんか」
十津川は便箋に書いた契約書を、三上刑事部長に、見せた。

「江上って、何者なんだ？」

「それがわからない。調布市に大きな邸を構えていて、とにかく、資産家です。父親から引き継いだといわれるが、本当のところは、わからないんですよ。私は、多分、彼が、連中のリーダーだと、思っていますが、証拠がありません」

「その証拠を、おれに、つかめというわけだな？」

「出来ればですが、あなたを、危険にさらしたくない。無茶はしないで欲しいんですよ」

「心にもないことを、いいなさんな」

と、多田が、笑った。

「いや、本心で、いっています。あなたに、辛い仕事をして貰う以上、あなたを、危険な目にあわせたくはありません」

「いいわけは、いらないよ。それより、おれは、保障が欲しい。スパイをするために、悪事に手を染めるんだから、逮捕されて、有罪にされて、また、刑務所に入るんじゃ合わないからね」

「それは、大丈夫です。私が、あなたに頼んだことを、証言しますよ」

「証言じゃ駄目だ。いざというとき、いわなかったといわれれば、それで、終りだからな。文書にして欲しい」

と、多田は、いう。

「いいですよ。どうします。会うのは、危険だし、郵便で、送りますか？」

「だから、多田も、信用するんです」
「多田が、最初から、その気がなくて、君のサインの入った、こうした文書を手に入れるために、スパイを引き受ける素ぶりを見せているということは、考えられないかね？」
と、三上が、きいた。
「考えられます」
と、十津川は、正直に、いった。
「それでも、これを、送るのかね？」
「そうしたいのです」
「万一の時の責任は、君がとるというわけか？」
「そのつもりで、署名しています」
「私が駄目だといっても、送るんだろう？」
「はい」
「それなら、ＯＫを出すより仕方がないな」
と、三上は、いった。
十津川は、それを、亀井にも見せ、書留速達で、多田の指定した宮下雅子という女宛に、送った。
あとは、また、待つだけである。十津川は、こちらから、決して、催促しないことにした。
多田の気持が、ゆれるのが、怖かったからである。

〈契約書

私、捜査一課の十津川省三は、警視庁を代表して、多田誠と、今回の事件について、次のように、契約する。

多田誠は、十津川の要請を受けて、事件の犯人たちに近づき、彼等の内情を探り、彼等の有罪の証拠を手に入れること。そのために行う行為は、罰せられないことの二点である。

警視庁捜査一課

十津川省三㊞〉

「宛名は、多田誠になります」

と、十津川が、いい添えた。

三上は、もう一度、読み返してから、

「これが、連中に、悪用されることはないだろうね？」

と、十津川を、見た。

「わかりません」

「じゃあ、危険じゃないか」

「かも知れませんが、これを渡さないと、多田は、動きませんよ。彼だって、犯罪者になりかねない危険を犯すわけですから」

「しかし、現職の警部が、こういう書類を書くというのはねえ」

翌日の夜おそく、待望していた多田からの電話が掛った。
「書類は、受け取ったよ」
と、多田は、いった。
「それで、連中から、連絡がありましたか？」
「電話があった。明日、会うことになっている」
「場所は、何処ですか？」
「わからない。迎えに来ると、いっている。多分、何処かに連れて行かれるんだろうが、尾行はしないでくれよ」
「わかっています。何もしません。あなたに、委せます」
「それだけだ」
と、多田は、いってから、
「この会話は、テープにとっておくんだろう？」
「いけなければ、止めますが」
「いや、とっておいてくれ。あとで、そのテープが、おれを助けてくれるからな」
多田は、それだけいって、電話を切った。
また、二日たった。
多田の電話が、入る。

久保昌一の方は、解剖結果が、報告されてきた。

一番気になっていた死因は、溺死ではないことが、わかった。久保の肺の中に、ほとんど、海水が入っていないと、報告されてきたからである。

死因は、窒息だった。が、のどを締められた形跡はない。

恐らく、抑えつけておいて、口と鼻をふさいで、窒息させたのだろう。そうしておいてから、盗んだ車に乗せて、東京湾に、沈めたに違いない。

死亡推定時刻は、三週間前の夜となっていた。

三週間前というと、美女高原で、東くみ子が殺される前である。

連中は、久保を殺し、彼を探している東くみ子の口を封じたのだ。

（それにしても、なぜ、美女高原なのだろうか？）

と、十津川は、考えた。

最初は、木田こと早川勇が、小山を美女高原に誘い出して、殺した。多分、早川が、この辺りの地理に詳しくて、動くのが、楽だったからだろう。二人目は、東くみ子だが、彼女は、小山が、美女高原で殺されたのを知って、行ってみたのだろうか？　美女高原へ行けば、恋人の久保の消息がつかめると思ったのか？

もし、彼女が何かわかると思ったとすれば、それは、なぜなのだろうか？　ただ単に、小山が、美女高原で、殺されているためだろうか？

調べ、写真を撮れとね。どうやら、この男は、叩けば、ホコリの出る人間らしい。連中は、だから、狙いをつけたんだと思うね」

「なるほどね」

「これは、安藤が、ポロリと洩らしたんだが、おれの他に、平山の電話を盗聴している奴もいるそうだ。何としてでも、平山の秘密をつかむ気なんだろう」

と、多田は、いった。

「明日から、平山社長の尾行を始めるわけですね？」

「今夜、車が来たよ。尾行用の車だ。また、連絡する」

といい、多田は、電話を切った。

十津川は、平山健太郎が、どんな男なのか、ひそかに、調べてみることにした。

平山は、現在、四十二歳で、彼の父が、平山繊維株式会社を設立していることが、わかった。

平山繊維株式会社は、従業員二百人余りの中堅の会社だったが、父の死後、社長になった平山は、これからは、高級指向の時代と読み、フランスの有名デザイナーのデザインした下着の販売を始めた。

何万円という下着が、飛ぶように売れ、支店が、全国に増えていった。

「とにかく、リッチな生活をしています」

と、調査に当った西本刑事が、羨ましげに、十津川に、報告した。

「連中と、契約したよ。百万円の現金を貰った」
「相手は、江上でしたか？」
「いや、この間、来た男だ。安藤と名乗っているが、多分、偽名だな」
「何処で、話し合ったんですか？」
「わからない。車に乗ったら、目隠しされて連れて行かれた。大きな家だった。あんたのいう江上という男の邸かも知れないが、わからないよ」
「安藤という男の他に、誰か、立ち合いましたか？」
「いや。彼だけだ。しかし、部屋の外から、監視されている感じはしたよ。きっと、部屋の何処かに、隠しカメラがあったんだと思うね」
「何をやれと、いわれたんですか？」
と、十津川は、きいた。
「一人の男の名前と、顔写真を示されたよ。平山健太郎という男だ」
「どんな男ですか？」
「聞かされた話では、平山繊維という会社の社長だ。五、六年前から、高級下着の製造、販売で、儲けているらしい。年商五百億から六百億といっている」
「その社長の何を調べろと、いわれたんですか？」
「全てだ。社長を尾行し、彼が会う人間は、全て、チェックしろといわれた。氏名と、肩書を

「死を予感していたんでしょう。受取人は、東くみ子ですが、彼女も死んでしまっています」
「可哀そうに」
と、十津川は、いった。他に、いうべき言葉は見つからなかったのだ。
その後、多田から、連絡のない日が、続いた。
平山の秘密が、なかなか、つかめないからなのか、それとも、多田が、電話できない状況に置かれているのか、わからなかった。
多田に、電話を掛けて、それを確かめたい衝動にかられたが、十津川は、じっと、おさえた。多田に対して、君を信じると、いってあるからだった。こちらが、不安がっているとわかれば、多田の方も、不安になってしまうに違いないのだ。
七日目に、やっと、多田から、電話が、入った。
「平山社長をゆする材料が揃ったよ」
と、多田は、いった。
「それは、女性関係ですか？」
「そうだ」
「しかし、女性関係が派手でも、それだけでは、脅迫のタネにはならんでしょう？　下手をすると、脅迫で、警察に、訴えられてしまうんじゃありませんか？」
と、十津川は、きいた。

「どんなに、リッチなんだ？」

「自宅は、成城ですが、ハワイ、パリなどに別荘を持ち、夏は、大型クルーザーを乗り廻し、自家用ヘリも、持っています」

「そんなに、高級下着というのは、売れるのかね？」

「すごいらしいですよ。奥さん連中は、旦那には、二着三万円の背広を買っても、自分は、五万、六万の下着を買う時代だそうですから」

「それで、何か弱味のありそうな男かね？」

「まだ、わかりませんが、いろいろと、噂があります。女性関係が派手だとか、脱税をしているらしいとか。それも、調べますか？」

と、西本が、きいた。

「いや、もう、何もしなくていい。われわれが、調べているとわかると、連中は、警戒して、止めてしまうだろうからね。折角、罠にかけようとしたのが、失敗してしまう。放っておこう」

と、十津川は、いった。

「東京湾で死んでいた久保ですが、今日、彼の生命保険が、おりたそうです」

と、いったのは、亀井だった。

十津川は、「ああ」と、肯いて、

「久保は、一億円の生命保険に入っていたんだったね」

平山は、尾崎に、金を渡している」

「それをタネに、連中が、平山社長を、ゆするわけですか」

「ああ。一億や、二億では、すまさないだろうな」

と、多田は、いった。

「いつ、やるんですか？」

と、十津川は、きいた。

「わからない。おれが、それに参加できるかどうかもわからない」

と、多田は、いう。

「わかったら、すぐ、連絡して下さい」

と、十津川は、いった。

その翌日、中野のマンションで、若い男が一人、死んだのを、十津川は、知らされた。

その男の名前は、尾崎勇である。

普通なら、元暴力団員の死に、大きな関心は、払わないのだが、多田の電話の直後だったから、十津川は、注目した。

尾崎は、酔って、五階のベランダから落ちたということだった。

アル中に近かったということから、事故死と見られたが、十津川は、そうは思わなかった。

連中が、事故死に見せかけて、殺したに違いないと、十津川は、思ったのだ。

「それだけならな。おれは、指示どおり、毎日、平山を尾行し、彼が会う人間を、全て、チェックしていった。若い女、これは、下着のモデルが多いんだが、これと、よく、ホテルに出かけたが、それだけじゃあ、大金は、ゆすれない。その中に、一人、妙な男と、会っているのを見つけた」

「どんな男ですか？」

「実は、おれの知っている男でね。元暴力団員の尾崎勇という男だよ。平山の会う相手は、浮気相手の美人か、財界人か、或いは、政治家で、この尾崎だけが、異質だった。それを報告したら、連中は、この男の電話を、盗聴することにした」

「それで、何が、わかったんですか？」

「なかなか面白いことが、わかったよ。平山は、三年前に、再婚しているんだが、これが、完全に、相手の資産目当てのものだった。事業を拡大するのに、どうしても、大金が、必要だったからしい。中村コンツェルンの次女で、出戻りの女性と再婚したんだよ。ところが、その時、平山には、女がいた。三人いたんだが、その中の二人とは、金を渡して別れたんだが、一人、どうしても、別れるのが嫌だといい張ったらしい。そこで、彼女の始末を、今いった尾崎に頼んだんだ」

「なるほど、面白いですね」

「尾崎の電話で、彼が、三百万で請け負って、女を殺したとわかったんだよ。その後も、時々、

と、多田が、電話してきたからである。
「尾崎が、殺されましたね」
と、十津川は、いった。
「ああ、こちらが、平山社長に、小あたりしたとき、尾崎の名前が出たらしい。何億円かが、支払われるらしいが、尾崎を消してやることも、その中に入っているんじゃないかね」
多田は、そんないい方をした。
「いつ、取引きをするんですか？　平山が、銀行に振り込むんですか？」
「そうなら、おれの出番なんかないさ。銀行で振り込むと、書類が、残ってしまうから、現金だ。だから、おれも、手伝わされるんだよ」
「何億もの金を、現金でですか？」
「そうだ」
「いつ、何処で、平山から、受け取るんですか？」
「わからない。だが、明日か、明後日だな。場所も、間際になって、教えてくれるらしい」
「指示は、例の安藤という男から、来るんですか？」
「だいたいはね。女から電話がある場合もある。安藤の代りだといって、掛けてくるよ」
「彼女は、名前は、いいましたか？」
「杏子といっている」

動機も、わかっている。

小悪党の尾崎を消して、そのゆすりを引き継ぐ気なのだ。いや、尾崎を消したことも、金にする気かも知れない。あっさりと、尾崎を消してしまったことで、平山社長が、一層、怯えるに違いないからである。

だが、連中は、ひそかに、平山をゆするだろう。マスコミにも、警察にも知られずにだ。

もし、多田が、裏切れば、十津川たちは、完全に、置いていかれてしまう。いや、多田が裏切らないまでも、連中が、多田を、ゆすりの行動から外すかも知れない。そうなれば、同じことだった。

多田に期待をかけて、十津川は、尾崎の死を、深く追わないことにした。もし、彼の死に疑問を持って、警察が動けば、連中が、肝心の脅迫を中止してしまう恐れがあったからである。

十津川は、もちろん、尾崎の死を、事故死とは、思わない。連中が、消したのだ。しかし、意見を聞かれたとき、彼は、

「事故死と、思います」

と、嘘をついた。

事件について、十津川が、心にもないことをいったのは、初めてである。

翌日になって、それが、実を結んだ。

「いよいよ、取引きが始まる」

っているからね。そうなれば、連中は、取引きを止めてしまう」
「江上を監視したらどうでしょうか？」
と、亀井が、いう。
「江上か」
「もともと、われわれは、江上をマークしているんですから、監視に気付かれても、向うは、何も思わないでしょう。平山にも、多田にも、監視をつけていませんからね」
「よし。二人、行かせよう」
と、十津川は、いった。だが、果して、それが、効果があるかどうか不明だった。

4

それから翌朝にかけて、江上邸の監視に当った二人の刑事から、一時間ごとに連絡があったが、全て、動きはないというものばかりである。
夜が明けた。
十津川は、じっと、多田からの電話を待った。だが、昼を過ぎても、連絡はない。たちまち、夕方になり、夜に入った。だが同じである。
江上邸の方も、いぜんとして、動きがない。

「それなら、多分、銀座のクラブのホステスです。この前お話しした江上という男の愛人だと思われる女ですよ」
「なるほどね」
「まだ、江上に、会いませんか？」
「ああ、会ってない」
「出来れば、ゆすりに、江上が関係している証拠をつかみたいと思っているんですがね」
「何とかしたいが、わからんね。それに、いきなり、連中が、迎えに来て、連れて行かれるんじゃないかと思っている。そうだとすると、そちらに、前もって、連絡できないよ」
と、多田は、いった。
「しかし、あなたを監視していれば、連中に怪しまれますからね。どう対処したらいいのか」
「何とか、連絡するようにするよ」
と、多田は、いった。
その言葉を信用していいかどうかわからなかったが、今のところ、他に、方法は、なかった。動きがとれないのだ。動いて、連中を警戒させては、まずいからである。
「しかし、何もしないのも、芸がありませんね」
と、亀井が、口惜しそうに、いった。
「だが、多田のまわりも、平山社長の周辺も、監視したりできないよ。すぐ、警戒されるに決

「なぜ、私に、電話を？」
「何かあったら、十津川さんに電話しろといわれて、電話番号を、教えられていましたから」
と、相手は、いう。
「今、彼の部屋にいるんですね？」
「ええ」
「メモは、一つもない？」
「ええ」
「じゃあ、メモを残す時間がなかったか、じっと監視されているので、メモに書けなかったかですね。しかし、何か残している筈です」
「でも、何もありません」
「あなたは、よく、その部屋へ行くんですか？」
「時々ですけど」
「じゃあ、部屋の中の様子は、よくわかっていますね？」
「ええ」
「どこか、いつもと違ったところはないか、よく見て下さい」
と、十津川は、いった。すぐにでも、多田のマンションに行き、自分の眼で彼の部屋を見たいのだが、そんなことをしていては、時間を、ロスしてしまう。

午後九時五分に、電話が入った。が、多田からではなく、若い女の声だった。
「十津川さんですか？」
と、その女は、きいてから、
「多田さんは、出かけました」
「あなたは？」
「多田さんに、頼まれたんです」
「そうか。宮下雅子さんですね？」
「――――」
「いいでしょう。どんな伝言か、教えて下さい」
「それが、よくわからないんです」
「わからないって？」
「昨日、彼から電話があって、明日、マンションの窓にカーテンがしてあったら、すぐ、部屋に入ってみてくれと、いわれました。あの人、面倒くさがりで、カーテンなんか閉めないんですよ」
「それで、今日、カーテンが、閉まっていたんですね？」
「ええ。夜になって、閉まりました。それで、マンションに入ったんです。彼は、もういませんでした。何か伝言があったらと思って、探したんですけど、メモみたいなものもなくて――」

「それだ！」

と、思わず、十津川は、大声を出して、

「地図の何処に刺さっていますか？　正確に、いって下さい」

「新宿西口の中央公園に、刺さっていますわ」

と、彼女が、いった。

「ありがとう」

と、十津川は、いい、電話を切ると、亀井を振り向いた。

「新宿、中央公園」

と、短く、いった。

二人は覆面パトカーに乗って、新宿に急行した。

わざと、他のパトカーには、待機させておいた。

中央公園に着いた。が、それらしい車も、人間もいなかった。取引きは、すんでしまったのだろう。

「遅かったですね」

と、亀井は、舌打ちした。

「多田は、何億円もの現金だといっていた。とすると、平山は、車で運んで来て、受け取る方も、車を使ったと思う。とすれば、公園の中ではなくて、公園の前を通っている道路の上でだ

多田が、いなくなったということは、取引きが、始まったことを意味している。何よりも、時間が、大切なのだ。

「どこにも、違うところはありませんわ」

と、女が、いう。

「そんなことは、ない。どこか、妙なところがある筈ですよ。ちゃんと、調べて下さい。隅から隅までです」

十津川は、語気を強めて、いった。

「そういっても、タンスも、机も、本棚も、いつものところにありますわ」

「絵とか、写真なんかは、ないんですか？」

「そういうものに、趣味のない人ですから。趣味といえば、ダーツぐらいです」

「ダーツ？　的に向って、矢を、手で飛ばすやつですか？」

「ええ。あの人、うまいんです――あら？」

と、急に、雅子が、声をあげた。

「どうしたんですか？」

「ダーツが、一本変なところに、刺さっているんです」

「どこにですか？」

「東京の地図にですわ」

「何か書いてあるのか？」
「いや、中に紙片が入っています」
と、亀井はいい、缶の中から、小さく折りたたんだ紙片を取り出して、十津川に渡した。
名刺大の紙に、字が書いてあった。それを折りたたんで、ビールの空缶に、詰め込んであった。

〈金は、江上邸へ。　多〉

それだけの文字が、殴り書きしてある。
「多田のメッセージだよ」
と、十津川が、嬉しそうに、いった。
「何と書いてあります？」
「金は、江上邸へと書いてある」
「調布の江上邸のことでしょうか？」
「他に考えられないよ。ただ、日時が、書いてないな」
と、十津川は、いった。
二人は、パトカーに戻ると、すぐ、無線電話で、江上邸の監視に当っている若い二人の刑事に、連絡をとった。

ったと思うね」
「同感です」
「それに、夜でも、車から車に、札束を、移したとは、思われないね。目立つからね」
「ということは、恐らく、車ごと、連中は、受け取ったんじゃありませんか」
と、亀井が、いった。
多分、そうだろうと、十津川も、思った。
「多田も、その車に乗っていたに違いない」
「ええ」
「彼が、何か、伝言を残しておいてくれたとすると、有難いんだがね」
二人は、車から降り、公園を取り巻く道路を、懐中電灯で照らしながら、丁寧に、見ていった。
煙草の吸殻、缶ビールの空缶、ガム、百円ライターなどが、落ちていた。十津川は、そんなものでも、いちいち、手に取った。多田が、どんなものに、サインをしていったか、わからないからだ。
中腰になって歩くのは、やたらに疲れる。ひと休みしようと、十津川が、亀井に声をかけたとき、彼が、一つの缶ビールの缶を手にして、
「これは、何かありますよ」
と、声高に、いった。

山本刑事が、小さく振り返って、
「昨夜から、今まで、誰も、邸から出ていません」
「何億という金を、車で運んでくるぞ」
「平山社長をゆすった金ですか？」
と、ハンドルに手を置いたまま、中根刑事が、きいた。
「そうだ。連中の仕事の一つだよ」
と、亀井が、答えた。
十津川は、腕時計に眼をやった。ゆっくりと、秒針が回っていく。
なかなか、車の音が聞こえず、かすかに、雨音が聞こえるだけである。
十二時を過ぎた。が、同じだった。
「どうなってるんだろう？　新宿で、取引きがすんだあと、まっすぐ、車で運んでくれば、とっくに、着いている筈なんだがね」
十津川が、いら立ちを隠さずに、いった。
午前一時、二時と、経過して行く。
待機している他のパトカーから、無線電話が入ってくる。彼等も、いらだっているのだ。
夜明けが、近づく。
十津川は、見つかるのを恐れて、自分たちの車と、山本たちの車を、江上邸から、十二、三

「車が、江上邸に入らなかったかね？」
と、十津川は、きいた。
「いえ。今日は、一台も、車はやって来ません」
「そのうちに、車が行くと思うから、しっかり、見張っていてくれ」
と、十津川は、指示を与えた。
十津川も、調布に行くことにした。
西本たちが乗っている筈のパトカーを、全部、調布に集めるようにも、伝えた。
小雨が降り出した。
他のパトカーは、江上邸を、遠巻きにして、待機させておき、十津川は、亀井と、邸の近くまで、車を進めた。
すでに、午後十一時に近い。
江上邸の周辺は、ひっそりと、静まり返っていた。
十津川と亀井は、車から降りて、一日中、監視に当っていた若手の刑事二人の車まで、歩いて行った。
そのリア・シートに乗り込む。
「江上は、邸の中にいるんだろうか？」
と、十津川は、きいた。

だろう。

だが、連中の中には、同じように、警官上りの人間が、いた。彼等が、それを見破った。だから、わざと、空缶を、そのままにしておいた。多田のメモにつられて、十津川たちが、江上邸に集るのを見越してである。

もし、そうなら、罠にかけたつもりでいたのに、逆に、罠にはめられたことになってしまうのではないか。

それに、多田の生命だって危い。連中は、裏切り者や、少しでも危険な人間は、容赦なく、消してしまうからだ。

十津川は、そうした不安を、亀井に、話してみた。

亀井も、顔に、動揺の色を見せた。

「こうしている間に、連中は、大金をどこかに隠してしまうかも知れませんね」

「そして、多田が、消されてしまうかも知れない」

「どうしますか？　これから、江上の邸に乗り込んで、彼を訊問しても、何も喋らんでしょう」

「今日は、ウイーク・デイだったね」

「そうです」

「何億円もの現金を、銀行に持って行って、預金すれば、目立つな」

メートルまで退げ、物陰に、隠れさせた。

とうとう、明るくなってしまった。

「明るい時に、運び込む気かな？」

十津川が、首をかしげると、亀井が、

「意外に、まっぴる間に、運ぶつもりかも知れませんよ」

と、いった。

江上は、警察が、自分の家を監視しているのを知っている筈である。

だが、手に入れた何億円もの現金は、自分の眼で、確認したいのだろう。それで、夜運び込めば、怪しまれるので、逆に、昼間にしたのか。

（それとも――）

急に、十津川は、不安を覚えた。

多田が、警察のスパイをしているのが、バレたのではないかという不安だった。

連中は、いわば、プロの集団である。神経をぴりぴりさせて、動き廻っているだろう。それに、仲間に入ってすぐの多田に対しては、警戒心を持っている筈である。

それで、気付かれたのではないのか。

新宿で、多田は、現金を江上邸に運ぶと知り、それを、紙片に書いて、缶ビールの空缶に入れて、捨てておいた。彼は、警察にいたから、十津川が、それを拾い取るだろうと、考えたの

ぜ、美女高原なのかという疑問があってね」
「多田も、美女高原へ連れて行って、殺すと思われるんですか？」
「もちろん、何処で殺されるかわからないよ。やみくもに探しても仕方がないから、賭けてみるんだ。西本刑事を連れて行く。カメさんは、金の行方を、追ってくれ」
十津川は、それだけいい、西本とは、東京駅で落ち合うことにして、亀井と、別れた。
東京駅で、午後四時に、西本刑事と会い、新幹線で、名古屋に向った。
「多田が、本当に、危いんですか？」
と、車内で、西本が、きいた。
「時間が、たち過ぎているからね。スパイをやっていたのが、わかってしまったと、思わざるを得ないんだよ」
と、十津川は、いった。
「それで、美女高原ですか？」
「ああ、そうだ。他に思いつかなくてね」
「まるで、美女高原を、連中の処刑場みたいに考えておられるんですね」
と、西本が、いう。
「処刑場か」
と、十津川は、苦笑した。が、すぐ、考える表情になってしまった。

「各銀行に、問い合せてみますか？」
「午後三時を過ぎても、連中が、ここに現われなかったら、調べてみてくれ」
と、十津川は、いった。
彼の不安が適中して、江上邸には、いっこうに、訪れる車も、人間も、現われなかった。
（やられたな）
と、十津川は、思わざるを得なかった。
「すぐ、各銀行に問い合せてみてくれ」
と、十津川は、亀井に、いってから、
「私は、美女高原に行ってくる」
「なぜ、あそこに？」
と、亀井が、きくのへ、十津川は、
「多田が、心配だからだよ」
「しかし、早川は、自宅マンションの駐車場で殺されていますし、久保は、東京湾に、沈められていますが」
「わかっている。だがね、二人の人間が、美女高原で、殺されているんだ。早川と久保の場合は、自然だが、小山と東くみ子の場合は、なぜ、あんなに遠くまでという疑問が残る。ただ単に、人の気配のない、静かな場所というのなら、東京の近くにだって、いくらもあるのに、な

来てくれていた。

彼に会うのは、何日ぶりだろうか。その間に、事件は、大きく動いている。

「お電話があったので、刑事を二人、美女高原にやって、調べていますが、事件の報告は、来ていません」

と、中村は、いった。

十津川と、西本は、中村の用意してくれた車に乗った。

「美女高原のロッジに、部屋をとっておきましたが、これから、すぐ、行かれますか？」

と、中村が、きく。

「もちろん、一刻も早く、美女高原に行きたいですね」

と、十津川は、いった。

パトカーは、高山市内を抜け、夜の道を、美女高原に向った。

「間もなく、あの辺りに、初雪があります」

と、助手席から、中村が、いった。そういえば、紅葉も、すでに、盛りを過ぎて、道路には、落葉が積み重っているのが、ヘッドライトの中で、見えた。

「ロッジも、ほとんど、客がおりません」

中村が、付け足した。

見覚えのある池と、そのほとりのロッジが、見えてきた。

美しい池があり、山々が見え、テニスコートでは、若者の歓声が聞こえている。どう見ても、処刑場という殺伐なひびきは感じられない場所である。

従って、連中が、仲間を処刑する場所として、美女高原を選んだとは、思えないのだ。だが、小山を、美女高原に誘い出して、殺しているし、東くみ子もである。

東くみ子の場合は、自分から出かけたと思われるのだが、彼女が、美女高原に行ったのは、そこに、何かあると、考えたからだろう。恋人の久保から、美女高原という名前を聞いていたのかも知れない。

名古屋に、一八時一四分に着く。もう、周囲は、暗くなっていた。

駅のコンコースで、夕食をとる間に、十津川は、東京の亀井に、電話をかけた。

「銀行を、全部、当ってみましたが、今日、何億という大金を、預金に来た人間は、いないということです。今、外国銀行に当っているところです」

と、亀井は、いう。

「何とかして、突き止めてくれ」

と、十津川は、いった。

夕食をすませると、十津川と西本は、一九時四〇分発の「ひだ15号」に乗り込んだ。名古屋発では、最終の高山行である。

高山に着いたのは、二一時五八分だった。十時近いのに、高山署の若い中村警部が、迎えに

「わかっています」
「それでも、ここで、殺人が行われると、いわれるんですか？」
「すでに、行われて、この美女高原のどこかに死体が、隠されているかも知れません」
「しかし、なぜ、美女高原なんですか？　私から見れば、この周辺は、殺人のような血なまぐさい犯行には、全く、ふさわしくありませんよ」
「確かに、美しい場所ではありますがね」
「それに、今頃の美女高原は、ご覧のように、観光客は、ほとんどいません。他所者がやってくれば、目立ちますよ。そういう場所に、わざわざ連れて来て、殺すんでしょう？　その理由が、わからないんですがね」
と、中村は、いった。
「その通りです」
と、十津川は、肯いた。びっくりした顔の中村に向って、十津川は、続けて、
「だから、なぜ、美女高原なのかと、考えるんですよ。それがわかればいいと、私も、この西本刑事も、思っているんですが」
と、いった。
その夜は、ゆっくりと眠り、翌朝、十津川と西本は、朝食をすませてから、出かけることにした。

中村に案内されて、中に入ると、高山署の二人の刑事が、十津川たちを迎えた。
「まだ、何も見つかりません」
と、刑事の一人が、中村に、報告した。
ロビーで、改めて、二人の刑事たちから、くわしい話を聞くことになった。
ロッジの客室係が、コーヒーと、缶ビールを出してくれた。ガスストーブが、すでに、赤く燃えている。
二人の刑事は、美女高原の地図を示し、自分たちが、調べた区域を、赤のサインペンで、消していった。
「また、聞き込みもやりましたが、昨日から今日にかけて、県外の車を、美女高原で見たという目撃者は、出ませんでした」
と、刑事の一人が、いう。
中村は、二人の刑事の話が終ると、十津川を見て、
「本当に、この美女高原で、新しい殺人が行われると、考えておられるんですか？」
半信半疑の表情で、きいた。
「私は、そう確信しています」
と、十津川は、いった。
「しかし、今のところ、怪しい人物も、車も、目撃されていないのです」

「西条？　初めて聞く名前だな」
「人相などを聞くと、どうも、安藤と名乗った男と、同一人のように思えます」
「なるほどね、それで、今までに、スイス銀行に、いくらぐらいの預金があるんだ？」
「そこまでは、教えてくれません」
と、亀井は、いってから、
「一時間ほど前、宮下雅子という女性から警部に電話がありました」
「多田の恋人だよ」
「彼女がいうには、多田から、全く連絡がないので、探して下さいということです」
「こちらでもまだ、見つかっていないんだ」
と、十津川は、いった。
「私の方は、西条恒夫という男を、徹底的に、調べてみようと思っています」
「江上と、どんな関係か、それも知りたいね」
と、十津川が、いった時、ドアをノックする音が聞こえた。
西本が開けると、中村が、興奮した表情で、立っている。
「何かあったらしい」
と、いって、十津川は、電話を切って、中村に、眼を向けた。
「池から、死体があがりました。中年の男の死体です」

吐く息が、白くなる寒さだった。確かに、中村警部のいう通り、間もなく、初雪が降ってくるような気がする。

ロッジで、自転車を借り、それで、走り廻ることにした。

「中村警部は、われわれの話を信用していないようですね」

と、西本が、並んで、自転車を走らせながら、十津川に、いった。

「私が、彼だって、同じさ。突然、美女高原で、また、殺人があるといわれてもね」

と、十津川は、答えた。

前に、小山の死体が見つかった場所や、東くみ子が、殺されていた場所を、見て廻った。が、多田の死体は、なかった。

他のバンガローも、のぞいて見る。が、同じだった。

午前中は、何も見つからなかった。

ロッジに帰り、十津川は、東京の亀井に、電話を入れた。

「スイス銀行の東京支店に、昨日、日本円にして五億円の預金があったことがわかりました。現金です」

と、亀井が、いった。

「そのお金を、持って行ったのは、誰なんだ？」

「西条恒夫という男で、前から、同じ銀行に、口座を持っています」

と、十津川は、いった。
「そうでしょうか？」
「多田は、われわれのために、動いていたんだ。それだけに、絶えず、それが、バレるんじゃないかと、警戒していた筈だ。そんな男が、東京から、大人しく、ここへ、連れて来られる筈がないよ」
「すると、東京か、ここへの途中かで、殺されたということになりますか？」
と、西本が、きく。
「そうとしか、思えないよ」
と、十津川がいうと、中村が、二人の話を、小耳に挟んだとみえて、
「しかし、なぜ、わざわざ死体を、ここまで運んで来て、この池に放り込む必要があるんですか？　途中で、いくらでも、捨てる場所は、あったんじゃありませんかね」
「そうなんです。なぜか、犯人は、この美女高原に、拘っているんですよ」
「まさか、美女高原に、恨みがあるんじゃないでしょうね？」
「そういうことではないと、思っているんですがね」
と、十津川は、いった。
連中と、美女高原の間に、何があるのだろうか？
十津川は、やはり、それを知りたかった。

と、中村が、いった。

十津川と、西本は、すぐ、部屋を飛び出した。

ロッジの前に、美女ケ池があるのだが、ロッジの入口とは、反対側の岸だった。

そこに、池から引き揚げられた男の死体が、置かれていた。

「多田だ」

と、十津川は、いった。

やはり、彼は、殺されていたのだと、思った。

「くびを、ロープで締められています」

と、中村が、いった。

その言葉通り、多田の太いのどに、黒いロープが、巻きついていた。

多田の顔は、苦痛にゆがんでいる。眼をむいたまま、死んでいるのだ。

十津川は、手を伸ばして、その眼をふさいで、やった。

「くびを締めて殺してから、池に放り込んだんですね」

と、中村が、いう。

「ここへ連れて来て、殺したんでしょうか？」

西本が、周囲を見廻した。静まり返った空気が、かえって、異様である。

「いや、多田が、東京からここまで、大人しく連れて来られたとは、思われないね」

（とすると、続けて、美女高原で殺しているのは、江上の指示ではないことになる）

十津川は、立ち止って、煙草に火をつける。近くにあったベンチに腰を下した。

リーダーの指示ではないとすると、あとは、二つしかない。

処刑人の意志か、被害者の意志かの二つである。

被害者の意志ということが、考えられるだろうか？

象は、死期を感じると、象の墓場と呼ばれる場所に寄ってくると、いわれる。猫でも、死を感じると、暗い場所に行くことがある。

それと同じなのだろうか？

（それも、違うな）

と、十津川は、すぐに、否定した。

一人目が、偶然、美女高原に逃げることはあるかも知れないが、二人目が、同じ場所に逃げるというのは、不自然である。

それに、小山は、美女高原には、何の知識もなかったと思われるのだ。普通、人間は、逃げるとき、知っている場所を選ぶものである。逃げやすいからだ。

（とすると、処刑人が、美女高原を選んだという結論になる）

と、十津川は、思った。

リーダーの江上から、誰々を消せと、命令される。

第六章　再検討

1

十津川は、夕暮の近づく美女ケ池に出た。
ゆっくりと、池の傍を歩きながら、同じ疑問を、考え続けた。
なぜ、美女高原で、殺すのかということだった。
リーダーの江上が、美女高原へ連れて行って殺せと、命じたのだろうか？
（違うな）
と、十津川は、思った。
そんなことをすれば、目立って仕方がないからだ。いやでも、同一事件と警察に、覚られてしまう。
そんな馬鹿な真似を、犯人が、する筈がない。

十津川は、ロッジに戻り、県警の中村警部に会った。
「調べて貰いたいことがあります」
と、十津川は、いった。
「目撃者探しなら、やっていますが」
と、中村は、いう。
「それも、お願いしたいと思いますが、私がやって欲しいのは、ここ数年間に、美女高原で起きた事件のことです。解決している事件も、未解決の事件も、知りたいのですよ」
と、十津川は、いった。
「ここのところ、やたらに殺人がありますが、もともと、この周辺は、静かで、めったに、事件の起きないところですが」
中村は、ぶぜんとした顔で、いった。
「それなら、事件の数も少しでしょう。全部、知りたいんです。今度の一連の事件の前です」
「数年間ですか？」
「一応、五年間にして下さい」
「すぐ、その間の事件の調書を、運ばせますよ」
と、中村は、約束した。
一時間後には、十津川の前に、何冊もの調書が、並べられた。

江上は、美女高原でといわないのに、処刑人は、ここへ連れ出して、殺した。

今度の多田もである。いや、多田の場合、殺したのは、恐らく、東京だろうから、わざわざ、死体を、この美女ケ池まで運んで、沈めたのである。

(なぜ、そんな面倒なことまでして、この美女高原に、拘るのだろうか?)

周囲が、次第に、暗くなってくるのだが、十津川は、動かなかった。

まるで、答が、池の面にあるみたいに、十津川は、水面を見つめていた。

処刑人が、誰かは、わからないし、一人なのか、複数かもわからない。小山を殺したのは、木田こと、早川勇と、思われるのだが、その早川も、殺されてしまったからである。

処刑人が、この美女高原に、土地勘があるのだろうか? 普通に考えられるのは、そういうことである。万一、警察に追われても、土地勘があれば、逃げ易いからだ。

しかし、そうだとしても、二人も、三人も、同じ場所で殺すというのは、不自然である。犯人が複数なら、なおさらなのだ。

特に、多田の場合は、異常である。

犯人だって、警察が、美女高原に眼を向けるのは、承知しているだろうからだった。下手をすれば、捕ってしまうのに、なぜ、わざわざ、死体を、ここに、運んで来たのか?

(何か、ここにあるのだ)

それが、結論だった。

それで、犯人と、断定したんですが」
「指輪が、被害者のものじゃない可能性があるんですか？」
と、十津川は、きく。
「いえ。一緒に来ていた友人の女子大生が、彼女の指輪と、証言しました。三人ともです」
「それなら、何処に、問題が、あるんですか？」
「犯人になんです」
「名前は、丸山保となっていますね。東京のサンライズ交易の社員と書いてある」
「ええ。そうです」
「これが、違っていたんですか？」
「いや、そうじゃありません。私は、彼のことを調べに東京に行きました。そして、丸山の友人とか、近所の人たちに会って、彼のことを、聞いてみたんです」
「なるほど」
「丸山は、結婚して、一年半で、マンション住いでした。友人たちの話でも、近所の人たちの話でも、女性を襲って、殺すような男には、思えないのです」
と、中村は、いった。
「しかし、そんなことはしそうもない人間が、殺人をやるものですよ」
と、十津川は、いった。

「この中で、何か、問題のあった事件というのは、ありましたか？」
と、十津川は、中村に、きいた。
「問題のあった――ですか」
中村は、口の中で呟きながら、調書の一つ一つを見ていったが、
「これは、ちょっと、引っかかるものがあった事件ですね」
と、一冊を抜き出して、十津川に示した。
〈美女高原バンガロー殺人事件〉
と、書かれたものだった。
四年前の九月に起きた事件である。
十津川は、事件の概要に、さっと、眼を通した。
女子大生四人のグループが、バンガローに、泊っていたとき、その中の一人が、何者かに、暴行され、殺された事件である。
犯人は、東京の三十二歳のサラリーマンで、事件を起こした翌日に、美女ケ池に投身自殺した。
「この事件のどこが、引っかかるんですか？」
と、十津川は、きいた。
「犯人は、水死体で発見されたんですが、上衣のポケットに、被害者の指輪が入っていました。

と、十津川が、いうと、中村は、
「それで、もちろん、奥さんにも、聞いてみましたよ。ところが、奥さんは、日曜日の朝早く、行先をいわずに、出かけたというんです」
「行先を告げずにですか？」
「そうなんです。ちょっと、出かけてくるといって、外出して、帰って来なかった。心配しているところへ、事件のことを、知らされたというわけですよ」
「妙な具合ですね」
「そうなんです」
「丸山は、前にも、美女高原に来たことがあったんですかね？」
と、十津川は、きいた。
「奥さんも、友人も、ないと思うと、いっていましたね。それに、丸山は、この近くの生れでもありませんでした」
「金に困っていたんですか？」
「いや、そんなことはなかったようです。まあ、豊かな生活ではなかったし、金は欲しかったろうとは、思いますが。なぜですか？」
「女子大生の指輪を奪ったというからです」
「ああ、指輪ですか。あれは、小売で二十万円ほどの品物でした」

「ええ。そうなんです。しかし、十津川さん。殺人と、暴行殺人とは、ちょっと違うと思うんですよ」

「確かに、そうですね」

「それで、東京に三日間いて、もっと、よく調べてみました。ところが、調べれば調べるほど、丸山は、犯人らしくなくなってくるんです。奥さんとも、うまくいっていますしね。何よりも、丸山が、小心なサラリーマンと、わかったんです。若い女子大生に、襲いかかるようなことが出来るとは、思えないんですよ」

「丸山保という男は、何をしに、美女高原に来ていたんですか？」

と、十津川は、きいた。

「それが、よくわからないんです」

「どういうことですか？」

「美女高原のロッジや、バンガローを、いくら調べても、丸山が、泊っていた形跡はないんですよ。何か、突然、現われたという感じがするんです」

「事件があった九月十一日は、日曜日ですね？」

「そうです。翌日の月曜日に、水死体で、見つかったんです」

「会社には、行ってないとして、奥さんは、事件の日に、丸山が、何処へ行っていたか、知っているんじゃありませんか？」

「違いましたか？」

「残念ながら、違いましたね。被害者長谷ゆみ子と、犯人、丸山保との間には、いくら調べても、接点がないんですよ。美女高原で、初めて会い、暴行の上殺したとしか、考えられないんです」

「血液型も、調べたんでしょうね？」

「もちろんです。被害者を暴行した男は、精液からみて、血液型はBです。丸山も、Bでした」

「しかし、B型というのは、日本人には、沢山いる血液型ですね」

と、十津川は、いった。

「そうなんですが――」

「まだ、何かありましたか？」

「これは、つまらないことなんですが――」

「何でもいいから、話して下さい」

「この事件の時、ある週刊誌が、いろいろと書きましてね。その一冊を、捜査本部に、送りつけて来たんです」

「どんな風に書いてあったんですか？」

「犯人は、丸山じゃない。警察は、眼を大きく開けて、事実を見ろみたいな記事でした」

と、中村は、いった。

「丸山は、それを、奪っているわけですね。なぜですかね？」

十津川は、調書に眼を通しながら、きいた。

「それは、わかりません。自殺していなければ、本人に聞けるんですが、何しろ、自殺してしまっていますから」

中村は、困惑した表情で、いう。

「確かに、そうでしょうね。わかります」

と、十津川は、肯いた。犯人が自殺して、事件が終るほど、刑事にとって、味気ないことはない。細かい疑問が、謎として残ってしまうからである。

「丸山が、買ってやった指輪ということはないんですか？」

と、間を置いて、十津川は、きいた。

「丸山が、被害者と知り合いだったということですか？」

「ええ」

「そのケースも、一応、調べてみました。実は、二人は、昔、親しくつき合っていて、恋人関係だったんじゃないか。女の方が、丸山を捨てたので、彼は、それを恨んでいた。たまたま、女が、美女高原に行くのを聞いて、追いかけて行き、殺した。そのあと、自責の念に堪えられず、近くの美女ケ池に身を投げた」

いた。

セクシャルタイムの発行人兼編集長で、桝田という名前だと、いう。

十津川は、彼を、近くの喫茶店に連れて行った。

コーヒーとケーキを注文しておいてから、

「四年前、美女高原で起きた暴行殺人事件について、おたくの週刊誌が、犯人は、自殺した男じゃないと書きましたね。その件で、話を聞きたいんですよ」

と、十津川が、いうと、桝田は、急に、顔色を変えて、

「あれは、もう、すんだことだから――」

「何を怖がってるんです？」

「別に、怖がってなんかいませんよ」

「じゃあ、話して下さい。なぜ、丸山保が、シロと思ったんですか？　なぜ、それを、記事にしたんですか？」

「勘弁してくれませんか。あの雑誌も潰れたし、僕は、北海道へ帰るんです」

「大事なことなんですよ。ぜひ、話して欲しいんですがね」

「四年前の事件ですよ」

「ひょっとすると、それが、四年後の今になっても、尾を引いているんじゃないかと思っているんですよ」

「それで、警察は、どうしたんですか？」

「無視しましたよ。何分にも、お色気専門の週刊誌だし、記事を間違えたと思ったのか、その号を、回収してしまったからです」

と、中村は、いう。

「何という週刊誌ですか？」

「セクシャルタイムという名前でしたよ。それだけでも、信用できないという感じでしょう？」

と、中村は、笑った。

十津川は、東京に帰ることにした。その週刊誌の編集者に、会ってみたくなったのだ。

中村は、ポルノ専門誌だから、信用できないと、いった。が、十津川は、逆に考えたのである。そういう雑誌が、なぜ、この事件だけ取り上げたのだろうか？

翌日、帰京すると、十津川は、「セクシャルタイム」の発行所を調べて、足を運んだ。

神田駅の近くで、小さなビルの二階だった。

ガラスのドアに「残務整理中」の貼り紙がしてあり、

「長い間、本誌をご愛読ありがとうございました」

とも、書いてある。どうやら、廃刊になってしまったらしい。

雑誌の束などが、乱雑に置かれた部屋の中で、一人の男が、のんびりと、帳簿の整理をして

「どうなんです？　話してくれますね」
と、十津川は、じっと、相手を見すえた。

2

それでも、桝田は、しばらく考え込んでいたが、やっと、
「四年前、僕は、ある男を知っていました。五十五歳で、いわゆるフィクサーと呼ばれるタイプの男ですよ」
と、話し始めた。
「続けて下さい」
と、十津川は、先を促した。
「その男と、僕との関係は、聞かないで下さい。関係は、絶ったと思っていますから」
と、桝田は、念を押した。
よほど、気になるのか、それとも、怖いのか。多分、その両方なのだろう。
「わかりました。秘密は守りますよ」
と、十津川は、いった。
「その男を、一応、Nと呼びます。Nは、親分肌の男で、世話好きなので、彼に、心服してい

と、十津川は、いった。
桝田は、眼を大きくして、
「それ、本当なんですか？」
と、きいた。
「何人もの人間が、今年になって、美女高原で、死んでいます。殺されているんです」
「それが、四年前の事件と、関係があるんですか？」
「あるのではないかと、私は、思っているんですがね」
「僕は、ないと思っていますよ」
「四年前、セクシャルタイムは、美女高原の事件について書いた。それを、回収したそうですね。あれは、圧力が、かかったんですか？　それとも、大金が動いたのかな？」
「忘れましたね。昔のことは」
と、桝田が、手を振った。
十津川は、急に険しい表情になって、
「これは、殺人事件の捜査なんですよ。それも、何人も殺されている。あなたが嫌でも、連行していって、訊問してもいいんだ」
と、いった。
「脅かさないで下さいよ」

「それで、一緒に来ていた社員の丸山に、罪を押しかぶせたんですね？」

「そうとしか思えませんね。殺した女子大生から、指輪を抜きとっておいて、丸山保のポケットに入れておいたんでしょう」

「すると、丸山は、自殺ではなく、殺されたことも、考えられますね？」

と、十津川は、きいた。

Nは、学生時代、柔道をやっていて、力が強いですからね。それに、丸山は、Nに心服していたから、全く、油断していたんだと思いますね。池の傍に連れて行かれて、いきなり、水に沈められたんじゃないかと、思ったんですよ」

と、桝田は、いった。

「それを、週刊誌の記事にしたんですね？」

義憤を感じましてね。Nというイニシアルにして、書きました」

「圧力が、かかったんですね？　その直後に」

「ええ、ものすごい圧力でしたよ。もともと、うちの雑誌は、セックス記事で売っていて、時々、警察の手入れを受けているから、圧力に、弱いんですよ」

と、いって、桝田は、小さく笑った。

「金も、貰いましたね？」

「それは、聞かないことにして欲しいですね。僕は、危険を承知で、あなたに、話しているん

る人間も、いましたね。しかし、僕は、Nの暗い面も、知っていたんですよ」

「どんなところですか？」

「Nには、病気がありましてね。確かに、病気としかいいようがないんです。それは、若い女性をレイプしたいという衝動です。金があるんだが、金を渡して、了解の上では、彼は、満足できないんですよ。いつもは、じっと、我慢しているんですが、どうにも我慢が出来なくなると、彼は、車で、旅に出るんです。東京で、レイプすると、捕まる確率が高いし、自分のことを、知っている人間に、会いやすかったからでしょう。四年前の九月十一日も、彼は、車で旅に出ました。ただ、その時は、自分の会社の社員の一人に、車を運転させて行ったんです」

「それが丸山保ですね？」

「そうです。丸山は、Nに心服していたし、Nの病気も知らなかったと思いますね。だから、彼は、奥さんにも、行先をいわずに、社長のNのお供をして、出かけたんです。行先は、高山だったと思いますね。そこで、美女高原で、若い女性のグループが、キャンプしていると聞いたんじゃないかな。だから、Nは、出かけて行き、衝動のままに、女子大生の一人を、暴行した」

「そして、殺してしまったんですね？」

「いつもは、レイプだけで、殺すことはなかったんですが、この時は、何かあったんでしょう。そこのところはわかりませんが、Nは、暴行だけでなく、殺してしまった」

と、十津川は、きいた。

「確か、十月末でしたよ。突然だったので、びっくりしましたね。倒産ということなんだが、黒字倒産だという噂もありましたね」

と、管理事務所の所長は、笑った。

「このサンライズ交易の社長は、何という名前でしたか？」

と、亀井は、きいた。

「何といったかな。今、調べますよ」

と、相手は、いい、四年前の名簿を持ち出して、調べてくれた。

「取締役社長は、江上になっていますね。自宅の住所は、調布市ですね」

と、所長は、いった。

十津川と、亀井は、顔を見合せた。やはり、あの江上だったのだ。

自然に、二人の顔に、微笑が、浮んだ。

十津川は、礼をいって、高層ビルを出た。

「予想が当って、ほっとしましたが、これは、何を意味しているんでしょうか？」

と、帰りの車の中で、亀井が、きいた。

「意味か」

「そうです。美女高原で、何人も殺されたことと、関係があるんですかね？」

だから」

と、桝田は、いった。

「Nの本名を教えてくれませんか？」

十津川が、最後にきくと、桝田は、いやいやをするように、頭を横に振った。

「それは、警部さんが、調べて下さい」

3

四年前、丸山保の働いていた会社は、サンライズ交易と、いった。

Nは、その会社の社長の筈である。

十津川は、高山署の中村に、電話をかけ、この事件の時に丸山の勤めていたサンライズ交易の住所を、教えてくれるように、頼んだ。

住所は、西新宿の高層ビル内と、中村が、教えてくれた。

十津川は、亀井と二人で、さっそく、西新宿に、出向いた。

問題の高層ビルを調べてみたが、サンライズ交易の看板は、出ていなかった。

ビルの管理事務所で、聞いてみると、四年前に、潰れてしまったと、教えてくれた。

「四年前の何月頃ですか？」

かとね」

「なるほど。Eではなく、Nと書いたのは、せめてもの桝田の思いやりだったということですか」

そうだよ。カメさんだって、私が、殺人をやったら、告発はしても、その告発の中に、少しは、思いやりを込めてくれるんじゃないかね」

十津川がいうと、亀井は、眼をしばたたいて、

「悪い冗談は、やめて下さい」

と、いった。

亀井は、そのあと、

「もう一つ、わからないのは、四年前に、江上が、美女高原で、暴行殺人を犯し、替玉で逃げ切った。その同じ場所で、なぜ、殺人を重ねるのか。それが、最大の謎です。普通に考えれば、逆でしょう？　そういうところでは、何もするなと、指示するんじゃありませんか？」

と、きいた。

十津川は、ニッコリ笑って、

「その通りだよ。だから、面白いんだ」

「よくわかりませんが」

「周囲の話だと、江上という男は、カリスマ性があって、彼に心服する人間も多いらしいが、

「私は、あると思っているよ」
と、十津川は、いってから、
「これは、私の推理だがね。四年前の九月に、江上は、サンライズ交易の社長をしていた。彼には、病気があって、美女高原で、女子大生を、暴行の上、殺してしまった。江上は、それを、社員の丸山の犯行に見せかけようとしたんだ。自分に心服している丸山を、恐らく、美女ケ池に、夜、連れ出して、溺れさせたんだろうと思うね。丸山のポケットに、殺した女子大生から奪った指輪を入れておいてね」
「そのストーリイは、わかるんですが、疑問がいくつかあります」
亀井は、まだ、戸惑いを見せていた。
「何だね？」
「セクシャルタイムの桝田は、Nという頭文字にして、書いていますね。なぜ、江上なら、Eとしなかったんでしょうか？　それが、疑問の一つなんですが」
と、亀井は、いう。
「それは、桝田自身が、答えてくれることだと思うが、推理すれば、こういうことじゃないかね。多分、桝田は、江上と、親しい関係の人間じゃないかと思うんだ。だから、止むに止まれず、四年前に、あの記事を書いたんじゃないかね。それだけに、サンライズ交易の社長とは書いたが、さすがに、E氏とは書けなかった。それで、あいまいな、N氏と、書いたんじゃない

一方で、婦女暴行の性癖があって、それが、殺人にまでなったように、凶暴性も、あわせ持っている。江上が、元警察官や、元私立探偵などを集めて、恐喝組織を作って、一応成功しているのも、このカリスマ性と、凶暴性の二つが、働いているからだと思うのだ」

「確かに、城西署長まで、その組織に加えていますし、容赦なく、口封じに、組織の人間を、殺していますからね」

と、亀井が、肯く。

十津川は、続けて、

「リーダーの江上は、恐怖で、組織を維持しているつもりなんだろうが、彼のために働いている人間は、自分が、いつ殺されるかわからないんだから、危くて仕方がないわけだよ」

「そうですね」

「それで、組織の一人か、或いは、二人かが、江上に、誰々を始末しろと命令されたとき、わざわざ、美女高原まで連れて行って、殺したんだ。多田なんかは、殺したあと、彼の死体を、延々と、美女ケ池まで、運んでいる」

十津川がいうと、「ああ」と、亀井は、大きく、肯いた。

「おれは、四年前の事件を知っているぞと、暗に、江上を、牽制しているわけですね」

「そうだよ。おれまで、殺そうとしたら、四年前の事件が、公になるぞと、暗に脅していたんだと思うのだ。四年前に出た週刊誌、そこにも、もちろん、載っていたんだろうや

「桝田が、いません！」
と、あわてた調子で、いったからである。
「自宅に帰っているのかも知れないぞ」
と、十津川が、いった。が、西本は、
「社内に、自宅の電話番号が、書いてありましたので、電話してみましたが、誰も出ません」
と、いう。
「とにかく、日下刑事を、自宅に行かせ、君は、周辺で、聞き込みをやってくれ。四十分前には、桝田は、そこで、残務整理をやっていたんだ」
十津川は、大きな声を出した。
「わかりました」
と、いって、西本が、電話を切った。
「桝田が、行方不明ですか？」
亀井が、心配そうに、きく。
「江上は、常に、桝田に監視をつけていたのかも知れない。それを、考えなかったのは、私のミスだ」
と、十津川は、いった。
「江上が、連れ去ったとすると、また、処刑人に、始末しろと、いいますかね？」

「西本刑事たちを、行かせましょう」

と、亀井は、いい、すぐ、西本と日下の二人を神田に、向わせた。

その指示をすませてから、亀井は、十津川に、

「やはり、危いと、思われますか？」

と、きいた。

「自分でやっている週刊誌に、匿名でとはいえ、江上が犯人だという記事をのせたんだ。きっと、江上が、暴行殺人の犯人だという確証を握っているんじゃないかと、思うんだよ」

「しかし、桝田は、消されませんでしたね」

と、亀井は、いった。

「そうなんだよ。桝田が保険をかけておいたのかも知れないね」

「保険というと、自分が死ねば、江上が犯人だという証拠が、警察に行くといったことですか？」

「そう思う。その代り、桝田も、二度と記事にしないという約束を、江上にしたんじゃないかな。だが、われわれが、桝田に会ったとわかれば、江上は、彼を殺すかも知れない」

と、十津川は、いった。

三十分後に、彼のその危惧は、適中した。

亀井の指示で、神田に向った西本と日下の両刑事から、連絡が入ったのだが、

調布の江上邸は、門の扉が閉まり、ひっそりと、静まり返っている。門の近くにつけた監視カメラだけが、音もなく、動いていた。

十津川は、インターホンに向って、

「江上さんに、お会いしたい」

と、告げた。

「お留守です」

と、男の声がした。

「あなたは？」

「秘書の西崎です」

〈ニシザキ？〉

と、十津川は、亀井と顔を見合せてから、

「家宅捜索をするから、開けなさい」

急に、厳しい声になって、いった。

「令状は、お持ちですか？」

「もちろん、持っている」

と、十津川は、いった。

門の扉が、オートマチックに開いた。

「いや、今度は、自分でやるだろう」
と、十津川は、いった。
「そうでしょうか？」
「誰かに委せたら、その人間は、また、美女高原で、殺すかも知れない。そうなれば、間違いなく、自分がマークされると、江上にだって、わかっているからだよ」
「どうしますか？」
「清水刑事と、北条君には、桝田と、江上の関係を調べて貰おう。絶対に、無関係ではない筈だ。私とカメさんは、江上を探すんだ」
と、十津川は、いった。
清水と北条早苗に、指示を与えておいて、十津川と亀井は、パトカーに乗った。
「上からの圧力で、調布の江上邸の監視は中止してしまっていますから、今、何処にいるか、つかめませんが」
運転席に座った亀井が、いまいましげに、十津川に、いった。
「構わないさ。とにかく、調布へ行ってみよう」
と、十津川は、いった。
彼は、覚悟を決めていた。
甲州街道を、サイレンを鳴らして、走った。

西崎は、二人を追いかけてきて、
「とにかく、困ります。改めて、令状を持って来て下さい」
と、いう。
十津川は、振り返って、
「それなら、すぐ、江上を連れて来たまえ。あなたが、彼の行先を知っていて、黙っていて、彼が、もし、桝田を殺したら、あなたは、殺人の共犯になるんだ。わかっているのかね？」
「……」
「今、江上は、何処にいるんだ？」
と、亀井が、詰問調で、いった。
「知りません」
それなら、黙って、引っ込んでいたまえ」
と、十津川は、突き放すように、いった。
二人は、奥の部屋から、調べ始めた。
別の部屋で、西崎が、どこかに電話している音が、聞こえた。
「弁護士に、連絡しているんだと思いますね」
と、亀井が、小声で、いった。
「さもなければ、江上に、連絡をとっているんだろう」

中は、日本的な建物である。敷石を伝わって、玄関に着くと、格子が開いて、中年の男が、顔を出した。

「令状を見せて下さい」

と、男が、いった。

「令状は、君の胸の中だよ」

「何ですって？　令状がないのなら、帰って下さい。弁護士を呼びますよ」

西崎は、顔色を変えて、いった。

「呼ぶのは、君の勝手だ。江上と、その下で働いている君たちには、恐喝、殺人、盗聴など、さまざまな容疑が、かかってるんだ。殺人は、ただの殺人じゃなくて、連続殺人だよ。間違いなく、全員、死刑に相当する。それで、弁護士を呼ぶ勇気があるのかね？」

と、十津川は、相手を睨みつけた。

一瞬、たじろぐ西崎に向って、亀井が、追い打ちをかけるように、

「弁護士と一緒に、江上も、呼んで貰いたいね。今頃、桝田という雑誌の編集者を、殺そうとしている筈だよ」

と、いった。

西崎の顔が、怯えた表情になったのは、思い当ることがあるのだろう。

十津川と、亀井は、西崎を押しのけるようにして、中に上り込んだ。

もう、家宅捜索をしている時ではなかった。
西崎は、今、江上に連絡して、十津川が、押しかけて来たことを、知らせ、指示を仰いだのだろう。
江上は、直感で、自分が追いつめられたのを知って、西崎にも、逃げるように、指示したに、違いない。
「船が沈みかけたときの鼠みたいなものだな」
と、十津川は、いった。
「親ねずみの江上は、何処へ逃げますかね？」
「もちろん、海外だろう。集めた金も、海外へ送金している筈だ」
と、十津川は、いい、亀井は、成田空港へ、パトカーを、走らせた。
走行中の車に、次々に、部下の刑事たちの報告が、入ってくる。
「桝田は、まだ、見つかりません」
と、西本が、まず、連絡してきた。
「引き続いて、捜してくれ」
と、十津川は、いった。
桝田と、江上の関係を調べていた清水と、北条早苗からも、連絡が入ってきた。
「桝田と江上は、同じ町の生れです。高校も同じですね。どうも、同窓生で、仲がよかったの

「戻って来たら、どうしますか？」
「歓迎するよ。江上にも、弁護士にも、聞きたいことが、いくらでもあるんだ」
「しかし、不法侵入で、告発されかねませんよ」
「そのくらいの覚悟はしているさ」
と、十津川は、いった。
二人は、構わずに、部屋の中を調べていった。
しかし、なかなか、これはと思うものが、見つからない。
「これは、整理されてしまっていますね」
と、亀井が、舌打ちした。
「そうだね。大事なものは、処理し、儲けた金は、全部、国外に、移してしまったのかも知れん」
「その作業をやったのは、あの西崎という男ですよ。連れて来ます」
と、いって、亀井は、部屋を出ていったが、飛び返って来ると、
「警部、逃げられました！」
と、叫んだ。
「江上たちを手配しよう」
と、十津川は、いった。

「どうしたんだ？」
「交通事故です。桝田の乗った車が、八王子の郊外で、崖下に転落しました」
「作られた事故だよ。狙われたんだ」
「これから、桝田の運ばれた病院に行って来ます」
と、西本は、いった。
「やはり、狙われましたね」
亀井が、横から、いった。
「やったのは、江上だろうね」
と、十津川も、いった。
空港派出所の警官たちが、手分けして、調べてくれた結果が、出た。
これから出発する国際便のどれにも、江上の名前は、ないというのである。
「ないのが、当然かも知れないな。彼は、まだ、大丈夫と思っていたとすれば、飛行機の予約は、取っていなかったと思うからね」
と、十津川は、亀井に、いった。
「すると、江上は、どうしますかね？　ここへ来て、予約の取り消しを狙うでしょうか？」
「しかし、ここに来て、じっと、待つのは、危険だと、わかる筈だよ」
「そうですね。とすると、今、日本は、国際空港が、沢山ありますから、まず、そこへ逃げて、

ではないかと、思います。今までにわかったのは、このくらいです」

と、清水が、いう。

「わかった」

と、十津川は、いった。

なるほどという感じがした。多分、江上と桝田は、親友という関係だったに違いない。

それが、中年になっても、さまざまな感情を、生み出したのではないか。

成田空港に着いた。

5

十津川は、空港派出所に行き、そこにいた警官たちに、協力を頼んだ。

現在、午後五時三分。

これからあと、成田を出発する全ての飛行機に、江上が、予約していないかどうかを、まず、調べて貰った。

その間にも、次々に、西本たちから、連絡が入ってくる。

西本の声は、今度は、あわてていた。

「桝田ですが、今、重傷を負って、救急車で運ばれたことがわかりました」

いる。

「しかし、警部。パスポートなしに、出国は出来ませんから、何も出来ないと思いますよ。パスポートを偽造しても、本人が、ここに現われることは、間違いないんですから」

と、亀井は、いった。

「そうなんだがねえ――」

と、十津川は、呟いてから、急に、

「空港事務所へ行ってみよう」

と、いった。

二人は、空港事務所に、足を運ぶと、十津川が、所長に会って、

「今日、チャーター便が、ありますか？」

と、きいた。

「一便だけありますね。午後八時四五分。二〇時四五分に、北京行の直航便が出ます」

と、所長は、いった。

「どんな団体なり人間たちが、チャーターした飛行機ですか？」

「通産省の職員と、経済友好会の人間で、中国への経済視察が、目的です」

「人数は？」

「全部で、百二十人です。使用されるのは、全日空のボーイング７３７です」

そこから、海外脱出を、図るかも知れません」
と、亀井が、いった。
十津川は、肯いて、
「そのおそれがあるので、大阪、千歳、福岡などには、手配しておいたよ。それに、外国への船便が出る港にもだ」
と、いった。
「これで、海外へ逃げるルートは、おさえましたね」
「そうなんだが、江上という男は、何をするかわからない男だからね」
十津川は、難しい顔で、腕を組んだ。
「しかし、飛行機を乗っ取るなんてことは、出来ないでしょう？　いくら江上でも」
と、亀井が、いった。
「確かに、それは、出来ないと思うね」
「それなら、彼にやれることは、他に、ないと思いますが」
と、亀井は、いった。
「しかしねえ。警察のエリートまで、仲間に引き入れたほどの男だからね」
と、十津川は、また、考え込んでいた。
亀井も、黙ってしまった。確かに、城西署の署長まで、江上は、仲間に引き込んでしまって

なら、誰も怪しまないし、特別に扱われる
「その可能性は、大いにありますね」
と、亀井も、いった。
「普通の便のキャンセル待ちをするかも知れないから、その方も、注意しよう
と、十津川は、逆に、慎重ないい方をした。
八王子の病院に飛んだ西本刑事からの連絡が、入った。
「桝田は、意識不明ですが、医者は、命は助かるだろうと、いっています」
「調べているのは、八王子署だね？」
「そうです。今のところ、純粋な交通事故として、調べているようですね」
「何かわかったら、知らせてくれ」
と、十津川は、いっておいた。
清水と、北条早苗の二人からも、報告があった。
「桝田の友人を見つけました。同じ高校の同窓生で、神田で、スキー用具の販売店をやっている男です」
と、清水がいい、続けて、早苗が、
「高校時代、江上は、ボス的な存在だったようです。腕力も強く、その上、雄弁で、彼が喋ると、なんでも、本当らしく、聞こえたと、いっています。ただ、二年の時、嘘をついて、友人

と、所長は、いった。

十津川は、事務所を出ると、亀井に、

「このチャーター便かも知れないな」

と、いった。

「まさか。関係のない人間は、チャーター便には、乗れませんよ」

「だがね。江上は、政財界人の秘密をつかんでは、脅迫していた男なんだ。その秘密は、消えたわけじゃなくて、いぜんとして、残っているものも多いだろう」

「それを利用してというわけですか？」

急に、亀井の眼が、光った。

「その可能性を、考えているんだよ。北京へ飛ぶチャーター便には、通産省の役人の他に、財界人が、何人も、乗ることになっている。その中には、ひょっとすると、江上に、秘密を握られている人間がいるかも知れない。そうだとすると、江上は、それを利用することを、考えるかも知れない」

と、十津川は、いった。

「出発直前になって、視察団の一人が、急病になり、自分の代りに、江上を推薦するということですか？」

「そんなことが、起きるんじゃないかと、思っているんだよ。政府の推進している経済視察団

もりでいたのだから、国内に潜伏することはないだろう。

八王子の病院に行っている西本刑事から、また、連絡が入った。

「桝田が、意識を回復しました」

「事故のことを、話したかね？」

と、十津川が、きくと、

「それが、事故のことは、いくら聞いても、答えようとせず、やたらに、高校時代のことを話すんですよ。まるで、夢遊病みたいにです。取りとめがなくて、困っています」

と、西本が、いった。

「そんなに嫌がらずに、じっくり聞いておいてくれ。メモも、とっておけよ」

と、十津川は、いった。

「大事なことなんですか？」

「清水刑事と、北条君の二人が調べてくれたところでは、桝田と江上は、同じ高校の同級生で、親友だったんだ。それが、尾を引いているらしい」

「それでですか。名前はいいませんが、親友が、親友がとか、あいつは、とかいっています。それが、江上なわけですか」

「その筈だよ。桝田は、何といってるんだ？」

「あいつは、間違いをやった。あいつは、病気だ。高校時代に、その芽があった　といった

を傷つけたことから、友人たちが、離れていったそうです。その時、桝田だけは、江上を信じて、つき合っていたようです」

と、いった。

「なるほどね」

「今日会ったスキー用具店の主人は、あの二人には、ホモに似た感情があったんじゃないかと、いっています」

「卒業後も、その感情は、続いていたのかな？」

と、十津川は、きいた。

「あったようだといっています。少なくとも、桝田の方は、結婚していません」

「面白いね」

「引き続き、調べてみます」

と、早苗は、いった。

時間が、経過し、次々に、夕方の便が、飛び立って行くが、江上も、西崎も、現われない。

ひょっとして、江上は、警察が、空港に張り込んでいるのを見越して、国内で、潜伏することに決めたのだろうか？〉

と、一瞬、十津川は、不安になったが、すぐ、自分で、それを、否定した。

江上は、手に入れた金を、海外に、送金している。つまり、万一の時は、海外に逃亡するつ

台のリムジンバスの最後のバスから、一行の残りが、出発ロビーに、入って来たのだ。
また、見送りの人たちとのあいさつが、始まった。
それを、じっと見つめていた十津川が、突然、亀井の横腹を、突ついた。
「いるぞ！」
と、小声で、いった。
「いますね」
亀井も緊張した顔で、いった。
三つ揃いの背広姿で、江上は、神妙に、見送りの人たちと、あいさつを、交わしているのだ。
十津川と亀井が、そっと、近づいて、両側から、挟み込んだ。
「江上さん。あなたを、逮捕します」
と、十津川が、いった。
「何をいうのかね？　私は、これから、経済視察団の一員として、北京へ行くんだ」
江上が、青ざめた顔で、いった。
別の団員の一人が、血相を変えて、
君たちは、何のまねだ。われわれを、邪魔するのかね？」
と、食って、かかった。
十津川は、内ポケットから、逮捕令状を取り出して、その男に、突きつけた。

ことを、喋っています」

「それで、いいんだ」

と、十津川は、いった。

午後八時ちょうどに、リムジンバスが、次々に、到着した。

バスのフロントに、「中国経済視察団様」と、貼り紙がしてあった。

八時四五分に出発するチャーター機の乗客だった。

見送りの人たちも、出発ロビーに、集ってきていた。そのため、急にロビーが、混雑してきた。

十津川と亀井は、眼を光らせて、ロビーにいた。

視察団の一行が、どっと、ロビーに入って来た。

そこ、ここで、見送りの人たちとのあいさつが始まり、テレビ局のカメラが、一斉に、彼等を追いかけて行く。

十津川と亀井は、百二十人の顔を、見に行った。

見覚えのある財界人の顔も、いくつか、眼についた。

だが、江上の顔は、なかなか、見つからない。

(この一行には、入ってなかったのか?)

と、十津川が、思ったとき、また、三、四十人ぐらいの男たちが、ロビーに入って来た。

「一緒に来て貰うよ」
と、十津川は、いった。

6

江上は、捜査本部に連行されたあとも、全ての容疑を否認し、弁護士を呼んでくれと、それだけを、要求した。
しかし、十津川が、桝田の助かったことを告げたとたんに、急に、弱気になってしまった。
やはり、桝田だけは、江上が、自分で始末しようとしたのだ。
「今、西本刑事が、桝田さんから、話を聞いているよ。きっと、いい話が聞けると、期待している」
と、十津川は、江上に向って、いった。
江上は、ぶつぶつ、何か呟いていた。よく聞くと、
「あいつを、早く、処分しておけばよかったんだ」
と、呟いているのだった。
十津川は、思わず、苦笑して、
「早く、というのは、四年前、君が美女高原で、女子大生に対し、暴行殺人を働いた時にとい

「何だね？　これは」
「逮捕令状ですよ。殺人、恐喝、その他。文句がありますか？」
「しかし、この人は？」
「急に、視察団に、もぐり込んで来たんでしょう？」
「――君が急病で、その代りに、推薦されたんだ。私は、正直にいって、よく知らないんだ」
と、相手は、急に、弱気になった。
「それでは、黙っていて下さい」
十津川は、ぴしゃりと、いった。
相手は、更に、気弱くなって、
「われわれ視察団は、八時四五分のチャーター機で、出発しなければならないんだが、構わないかね？」
と、きいた。
「もちろん、構いませんよ。どうぞ、出発して下さい。それに、もともと、彼は、皆さんとは、無関係の人間だったんでしょう？」
「そうなんだ。今日になって、初めて会った男でね」
と、相手は、いい、搭乗ゲートの方に、走って行った。
十津川は、江上に、向き直った。

「そうかね。君も、彼が好きだったから、四年前に、殺せなかったし、今度も、交通事故に見せかけて、殺そうとして、失敗したんじゃないのかね？」

「――――」

江上は、黙ってしまった。

それでも、江上は、すらすらと、自供を始めた。

江上の下で、恐喝を働いていた人間の名前が、ずらずらと出てきた。その多くが、元警察関係者である。

十津川にとって、彼等を逮捕するのは、辛い仕事だった。中には、十津川の知っている名前もあったからである。

全部で、五人の男が、逮捕された。

だが、最後に、一番、辛い仕事が、十津川を、待っていた。

三上刑事部長が、十津川を呼び、一枚の逮捕令状を渡した。

「今日、やっと、滝沢署長の逮捕令状が出たよ」

と、三上も、暗い表情で、いった。

十津川が、その令状を見ていると、三上は、

「上の方では、激論があったらしい。いぜんとして、滝沢が、そんな組織に関係しているとは、信じられないという声も、多かったらしいんだ。何とか、穏やかに処理できないかという声も

うことなのかね？」

と、きいた。

「あいつは、疫病神だ」

と、江上は、いった。

「しかし、桝田さんは、君を尊敬していたんだよ。それだけに、君の行為を、許せなくて、週刊誌にのせたんだ。あの時に、君が、反省して、自首してくれていればと思うね」

「負け犬だよ。あいつは」

と、江上は、低い声で、いった。

「まるで、彼を、憎んでいるようないい方だな」

「ああ、憎んでいる。あいつがいなければ、私は、捕らなかった。少なくとも、海外に、逃げられたんだ」

と、江上は、いった。

十津川は、そんな江上の顔を、じっと見すえて、

「君も、ひょっとして、彼が、好きだったんじゃないのかね？」

と、きいた。

とたんに、江上の顔が、引きつったように、ゆがんだ。

「そんなことはない！」

「署長に、会いに来たんだよ」
「署長は、しばらくひとりにしてくれといって、署長室に入ったままです。誰にも、会わないと、いわれて」
と、その刑事は、いった。
十津川は、物もいわずに、階段を駆けあがり、二階にある署長室に、突進した。若い刑事が、あわてて、ついて来た。
十津川は、署長室のドアを、蹴破るようにして、中に入った。
（遅かった！）
滝沢は、口から血を吐くようにして、署長の椅子で、死んでいた。毒を飲んだに違いない。
「大変だ。医者を呼びますか？」
と、若い刑事が、顔色を変えて、叫ぶ。
「何もするな！」
と、十津川は、叱りつけるように、いった。

あったと聞いたよ」

と、いった。

「わかります。私も、出来れば、逮捕する前に、彼が、自首してくれれば、よかったと、思っていたんですが」

十津川は、そういって、自分の部屋に戻った。

亀井が、十津川を迎えて、

「令状が出ましたか？」

「ああ、出たよ」

「私も、一緒に行きましょうか？」

と、亀井が、きくので、十津川は、頭を横に振って、

「いや、私一人でいい」

「大丈夫ですか？　抵抗するかも知れませんよ」

「彼も、そんな無駄なことはしないさ」

と、十津川は、いった。

十津川は、パトカーで城西署に行き、ひとりで、入って行った。

若い刑事が、十津川を見て、

「何かご用ですか？」

徳間文庫

美女高原殺人事件

©Kyôtarô Nishimura 1993

著者　西村京太郎
発行者　徳間康快
発行所　株式会社徳間書店
東京都港区新橋四―一〇（〒一〇五）
電話（〇三）三四三三・六二一一（大代）
振替　東京四―四四九二番
印刷　凸版印刷株式会社
製本
編集担当　吉川和利

1993年11月15日　初刷

ISBN4-19-890028-0（乱丁、落丁本はお取りかえいたします）

この作品は１９９１年８月徳間書店より刊行されました。

徳間文庫の最新刊

支店長の自殺 水沢 渓

こんなに尽くしてきたのに……。エリート支店長の栄光と挫折——。

仕手相場 こずかた治

空前の仕手戦に踊る相場師たち。知られざる商品相場の実態を曝く。

特命欲望課長 南里征典

女性用ペンダントに匿された〝花の峰肉紐ラビア〟の秘写真。

八王子分署事件簿 白樺山荘怪火事件 島田一男

ガス事故か、放火殺人か。物言わぬ焼死体が語る事件の真相は？

九州平戸殺人事件 木谷恭介

熱海・平戸・南紀、二つの殺人を結ぶ糸は、母と子の出生の秘密!?

喧嘩一代 青山光二

理に叶わないことは許せねえ！義理と人情の喧嘩バカ一代記。

やくざと抗争 上 安藤 昇

感化院から闇市焼け跡時代までの、伝説化する学生やくざの素顔！

やくざと抗争 下 安藤 昇

殺られたら殺り返す、野獣の掟！暗鬱な青春彷徨と、安藤組解散。

徳間文庫の最新刊

長崎殺人物語 山村美紗

長崎と京都で起った殺人事件。浮び上がった容疑者は冬子の友人!?

美女高原殺人事件 西村京太郎

日本のためになる仕事だから…奇妙な依頼に応じた男が殺された!

首位戦争 清水一行

二輪車業界を震撼させた乱売合戦。なぜ両者はそこまで争ったのか!?

大脱走（スピンアウト） 高杉良

男にとって仕事とは? 大会社より情熱を選んだ男達の熱き闘い。

剛腕の経営学 邦光史郎

維新の政商から巨大証券会社まで、日本経営史上の巨星たちに迫る。

熱血商人 渡辺一雄

バブル以降、空前の不況期。アイデアと努力の創業経営者に学べ!

中国兵法の発想 村山孚

人を動かす技術「孫子の兵法」の真髄を平易に説く恰好の入門書。

四十代は男の峠 高任和夫

勤続疲労に陥った中年サラリーマンに贈る、ひとときの清涼剤。

美女高原殺人事件

西村京太郎

1930年
東京都生まれ

〈ミステリー・ハードロマン〉

消えた巨人軍　西村京太郎
黄金番組殺人事件　西村京太郎
ゼロ計画を阻止せよ　西村京太郎
鬼女面殺人事件　西村京太郎
日本ダービー殺人事件　西村京太郎
幻奇島　西村京太郎
聖夜に死を　西村京太郎
汚染海域　西村京太郎
華麗なる誘拐　西村京太郎
殺人者はオーロラを見た　西村京太郎
盗まれた都市　西村京太郎
マンション殺人　西村京太郎
けものたちの祝宴　西村京太郎
南伊豆高原殺人事件　西村京太郎
八ヶ岳高原殺人事件　西村京太郎
会津高原殺人事件　西村京太郎
志賀高原殺人事件　西村京太郎
スーパー雷鳥殺人事件　西村京太郎
ハイビスカス殺人事件　西村京太郎
美女高原殺人事件　西村京太郎
君よ憤怒の河を渉れ　西村寿行
峠に棲む鬼《上下》　西村寿行
犬笛　西村寿行
怒りの白き都　西村寿行
黄金の犬《一・二部》　西村寿行
魔の牙　西村寿行
われは幻に棲む　西村寿行
白骨樹林　西村寿行
修羅の峠　西村寿行
炎の大地　西村寿行
蒼き海の伝説　西村寿行
遙かなる海嘯　西村寿行
虎落笛　西村寿行
鬼女哀し　西村寿行
虚空の舞い　西村寿行
虚空の影落つ　西村寿行
鷲の啼く北回帰線　西村寿行
地獄《上下》　西村寿行
妖魔　西村寿行
裸の冬　西村寿行
霖雨の時計台　西村寿行
魔笛が聴こえる　西村寿行
神の岬　西村寿行
花に三春の約あり　西村寿行
荒らぶる魂　西村寿行
昏き日輪　西村寿行
汝は日輪に背く　西村寿行
妖しの花乱れにぞ　西村寿行
憑神　西村寿行
扉のない闇　西村寿行
鷲の巣　西村寿行
雲の城　西村寿行
闇の法廷　西村寿行
人類法廷　西村寿行
ガラスの壁　西村寿行
まぼろしの獣　西村寿行

ISBN4-19-890028-0

C0193 P500E (0)

9784198900281

1910193005005

定価500円(本体485円)

警視庁を懲戒免職となり、妻子とも離別した小山淳一郎の前に、西条恒夫と名のる男が現れた。〝日本のためになる仕事〟だからひき受けてほしいと高額の報酬を示され、小山は西条の指示通りに尾行や盗聴をすることになった。やがて不審を覚えた小山は、西条の正体を探ろうとするが、その矢先、飛騨高山近郊の美女高原に誘い出されて殺されてしまう。十津川と亀井は小山のマンションに向ったが……。長篇推理。

徳間文庫

C0-EGS-462